The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ブラジル人就労者における日本語の諸相 |
| Author(s) | Nakamizu, Ellen |
| Citation | 大阪大学, 1998, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.11501/3151040 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# ブラジル人就労者における日本語の諸相

エレン・ナカミズ

**(Ellen Nakamizu)**

# 課　程　博　士　学　位　申　請　論　文

大阪大学文学研究科日本学専攻社会言語学
エレン・ナカミズ

1998 年 3 月提出

# 目　次

第１章、序　論 ……1
1.1. 研究の目的と意義 ……1
1.2. ブラジル人就労者 － 来日の背景 ……1
1.2.1.「出稼ぎ現象」を及ぼした日本･ブラジル両国の状況 ……2
1.2.2.ブラジル人出稼ぎの推移 － 短期滞在から定住化へ ……4
1.3. 地域社会とのかかわり合い ……5
1.4. ボランティア日本語教室 － ２重の役割 ……5
1.5. 本論文の骨子 ……7

第２章、先行研究と調査の概要 ……9
2.1. 先行研究 ……9
2.1.1. 欧米における自然習得の研究 ……9
2.1.2. 日本における第２言語習得の研究 ……12
2.1.3. 本研究の位置づけ ……13
2.2. 調査の概要 ……14
2.2.1. 調査地 ……14
2.2.2. 被調査者 ……16
2.2.2.1. 属性 ……17
2.2.2.2. 来日以前の言語環境 ……17
2.2.2.3. 来日後における日本語のインプット環境 ……18
2.2.2.4. 日本語母語話者の協力者 ……22
2.2.2.5. 日本語習得・使用に関与し得る変数 ……23
2.2.3. 調査法 ……24
2.2.3.1. アンケート調査 ……24
2.2.3.2. 参与観察調査 ……25
2.2.3.3. 自然談話録音調 ……25

第３章、ブラジル人就労者の実態 ……28
3.1. 属性と社会的な背景 ……28
3.1.1. 性別・年齢 ……28
3.1.2. 日本での滞在期間 ……30
3.1.3. ブラジルでの居住地・学歴・職業 ……32
3.2. 日本語能力・日本語運用 ……34
3.2.1. 日系人と日本語 ……34
3.2.2. 来日以前の日本語使用状況 ……35
3.3. 在日ブラジル人におけるネットワークと言語行動との関連 ……38
3.3.1. ネットワークとは ……38
3.3.2. 日常におけるブラジル人のネットワーク － アンケート調査の結果より ……40
3.3.3.「職場内」におけるネットワーク ……41
3.3.4.「職場外」におけるネットワーク ……44
3.4. ネットワークと日本語使用との関連 ……48
3.5. まとめ ……48

第４章、日本語使用における言語形式の諸特徴 ……50
4.1. 動詞の習得・使用実態 ……50
4.1.1. 先行研究と問題点の所在 ……51
4.1.2. 分析の進め方 ……52
4.1.3. 動詞の出現 ……53
4.1.3.1. 曖昧さを及ぼす動詞の脱落とその原因 ……56
4.1.3.2. 伝達動詞の脱落 － 伝達表現の習得 ……58
4.1.3.3.「名詞並列型」文 ……60
4.1.3.4. Copulaの脱落と使用 ……63
4.1.4. ブラジル人話者が使用した動詞の形式と機能 ……67
4.1.4.1. 場面ごとの動詞使用 － 動詞形式の分布 ……67
4.1.4.2. 非過去における「普通体」・「丁寧体」の使用 ……69

4.1.4.3. 「の（ん）だ・の（ん）です」の使用 ……73
4.1.4.4. 過去形における注目点 ……77
4.1.4.5. 「非過去形」・「過去形」の併用 ……78
4.1.5. 可能形の習得状況 ……81
4.1.6. まとめ ……83
4.2. モダリティ形式の使用実態 ……84
4.2.1. モダリティ表現の習得に関する研究の重要性 ……84
4.2.2. 本稿で扱うモダリティ形式の性質と分類 ……85
4.2.3. ブラジル人話者が使用したモダリティ形式の考察の順序 ……86
4.2.4. 日本語のモダリティ文献から見た「よ」と「ね」 ……87
4.2.5. 終助詞と「丁寧体・普通体」との共起 ……87
4.2.6. 「よ」とその語用論的な機能 ……90
4.2.7. 「ね」とその語用論的な機能 ……93
4.2.7.1. ポルトガル語の「né?」と日本語への転移 ……95
4.2.7.2. 「補充形式」としての「ね」 ……101
4.2.8. 「ね」以外の確認・同意要求表現 ……103
4.2.9. 命題にかかわるモダリティ表現の使用 ……105
4.2.9.1. 判断を表すモダリティ表現 ……105
4.2.9.2. その他のモダリティ表現 ……107
4.3. まとめ ……109

第５章、スタイル切り替えの習得 ―「普通体」・「丁寧体」の使い分け 110
5.1. 第２言語習得におけるスタイルのとらえ方と従来の研究 ……110
5.2. 日本語のインプット ―「職場内」・「職場外」 ……112
5.3. スタイル標識としての「普通体」・「丁寧体」 ……116
5.4. 分析 ……117
5.4.1. 質問・応答ペアーにおける「普通体」・「丁寧体」の切り替え ・118
5.4.2. スタイル切り替えに関与する諸要因の解説 ……122
5.4.2.1.「職場内」の切り替え状況：場面へのアコモデーション ・・・122

5.4.2.2. スタイル切り替えの意識テスト ……124
5.4.2.3.「職場外(ボランティア)」の切り替え状況:話し相手への配慮127
5.4.2.4. 談話ストラテジーとしての丁寧体 ……129
5.5. まとめ ……132

第6章、結　論 ……134
6.1. 本稿のまとめ ……134
6.2. 調査の反省 ……136
6.3. 今後の課題 ……136

参考文献 ……138

# 談話資料の表記

① 人名や組織名: 頭文字で表す。
例: U さんはよく会う、僕。

② あいづち: 改行せずに、(　)の中に記入する。
例: 日勤の土岐は（うん）そう、月曜日から（うん）土曜日まで。

③ ポーズ:　5 秒より短いポーズは「・」(中黒) で示す。5 秒より長いポーズは「・・」で示す。2 人話者の発話の間にポーズが挟まれている場合は、そのポーズの実際の長さを測り、数字で示す。
例: ブラジルの人は・すごく、あの、にぎやかで、よくしゃべる。

BI: 全部。コンピューター、テレビ、ビデオ。
[5]
JY: で、その中で...

④ 発話の重複 (overlaping): 発話がだぶりはじめるところとだぶり終わるところを「＝」で示す。
例: BI: 見たことがある、ありま＝すか＝。
JY: ＝たぶん＝ね。

⑤ まったくポーズなしで、次の発話が前の発話に続く場合: 「＝＝」で示す。
例: BI: 8 時半から 8 時半
JO: ＝＝ 8 時半まで。12 時間。

⑥ 「か」が後接しない質問文: 「＋」で示す。
例: JY: なんかするとか。そういう仕事ですか。
BI: 僕の仕事＋

⑦ 笑い声、非言語的な行動など、必要と思われる情報を[ ]の中に記入する。
例: BI: はい＋
JY: [ゆっくり言う]退屈＋

⑧ 聴取不能の場合: ( )の中に、単語ごとに「x」を記入する。
例: BA: プログラムは＋エフェクト＋覚えたい＋
JH:　(xx) ちゃうやろー＋

# 第１章
# 序　論

## 1.1. 研究の目的と意義

本研究は日本在住ブラジル人就労者における日本語習得および日本語使用の諸側面を明らかにすることを目的としている。

ブラジル人就労者が使用する日本語は、大体の場合、自然習得によるものである。これまでの（第２言語としての）日本語習得におけるほとんどの研究は、教室内で正式に学習してから自然な環境で日本語を使用するようになった人を分析の対象としてきた。その理由は、最近まで日本語を習得したそれらの人は教室を学習の出発点としていた留学生、あるいはビジネスマンなどに限られていたからであろう。しかしながら、近年生活しながら日本語を自然習得する日本人と結婚した配偶者や日本に移住した就労者が増加したことで、自然習得研究に取り組む必要があると思われる時代がやってきた。

本研究で対象としたのは、職場での日本語の自然習得がすでに進んでいた時点で、地域社会のボランティア団体が営む日本語教室で学習しはじめた人である。これらの人々の日本語学習および日本語使用に関しては次のような問題が含まれる。第１に、自然習得から学習へ、という過程を経る彼らの日本語は学習することによって、どのように変化するのか。第２に、学習しはじめてからでも、自然習得によるインプットの影響はどれほど残存するのか。第３に、これらの点は、ブラジル人の自然談話にどのような形式で現れるのか。本稿ではこれらの問題を中心の課題にし、考察していく。

## 1.2. ブラジル人就労者 — 来日の背景

日本に在住しているブラジル人は 20 万人ちかくにのぼっており、その大部分が就労者として来日した人々である。これは、80 年代後半、ブラジルの経済が悪化しつつあった一方、日本の好景気が最高潮に達した状況の中で、いわゆる「出稼ぎ

現象」が起きたことに由来している。

### 1.2.1. 「出稼ぎ現象」を及ぼした日本・ブラジル両国の状況

まず、「出稼ぎ現象」を及ぼした日本国内の背景を簡単にまとめてみたい。

日本産業の高速な近代化に伴い、きつい、危険、汚いと呼ばれているいわゆる３Ｋ職種における人手不足の深刻な問題が発生した。このことから、単純労働に携わる外国人が急増したが、その多くが不法滞在者であった。就労者の中で例外扱いされたのは南米諸国の日系人、とりわけ日系ブラジル人であった。日系人の日本への流入は、渡辺(1995)に記載されているように、「日本国籍を持つ１世、ブラジルと日本の２重国籍を持つ２世から始まり、次第にブラジル国籍の２世や３世にまでその層は拡大するようになった」。さらに、従来国内での外国人の就労を制限する日本の労働規定「入国管理及び難民認定法」が 1990 年 6 月に改正され、その改正によって、「日本人の配偶者、日系２世及び３世である外国人」が合法的に日本で就労することができるようになった。再び渡辺(1995)を引用すると、「このように、入管法の改正は日系人以外の不法就労外国人の流入を防ぎ（中略）日本社会の人手不足の解消を意図したものであるとみることができる」という。

こうした日本へのブラジル人出稼ぎ者の流入は、特別な現象ではなく、現代の、発展途上国から先進国への世界的な移動という大きな枠組みの中で捉えなければならない。

さて、ブラジル人の出国を及ぼしたブラジル国内の状況を辿ってみよう。

80 年代後半のブラジル経済が 1000%を越えたインフレ、先進国の国民所得との格差が大きくなるばかり、という混乱状況に陥っていた。このような状況はアメリカやヨーロッパ諸国、やがて日本への出稼ぎ現象を導いた。人々が、収入の低下から逃れる方法として、短期的により高所得が得られる、先進国の単純労働を選択するようになった。

こうしたブラジルの出稼ぎ現象がはじまって 10 年以上たった現在、日本の様々な地域でブラジル人コミュニティが形成されつつある様子が見られる。労働移住の初期からブラジル人の労働力を求めた静岡県の浜松市や群馬県の太田市などのよう

な企業城下町では既に定住化の過程が窺われる。以下の表は、ブラジル人における都道府県別外国人登録状況を示す。この表のデータからは、ブラジル人による日本国内の移動の傾向を垣間見ることができる。

表 1-1 ブラジル人の都道府県別外国人登録状況

(単位：人)

| 都道府県別 | 1990年12月 | 1991年12月 | 1992年6月 | 1992年12月 | 1993年6月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 愛知県 | 10,764 | 24,296 | 28,430 | 29,607 | 29,254 |
| 静岡県 | 8,964 | 17,452 | 19,990 | 19,803 | 21,435 |
| 神奈川県 | 8,215 | 13,145 | 14,361 | 14,698 | 14,662 |
| 埼玉県 | 4,926 | 8,546 | 9,543 | 9,617 | 10,141 |
| 群馬県 | 3,822 | 7,107 | 8,344 | 8,773 | 8,689 |
| 上位5県合計<br>(シェア) | 36,691<br>(65.0%) | 70,546<br>(59.1%) | 80,668<br>(58.0%) | 82,498<br>(55.8%) | 84,181<br>(54.1%) |
| 北海道 | 70 | 257 | 276 | 405 | 567 |
| 青森県 | 29 | 39 | 49 | 58 | 63 |
| 岩手県 | 36 | 21 | 29 | 49 | 42 |
| 宮城県 | 154 | 268 | 235 | 345 | 391 |
| 秋田県 | 12 | 30 | 28 | 43 | 20 |
| 山形県 | 195 | 325 | 279 | 289 | 308 |
| 福島県 | 194 | 813 | 937 | 932 | 841 |
| 茨城県 | 1,610 | 4,098 | 4,848 | 5,107 | 5,483 |
| 栃木県 | 2,899 | 5,482 | 5,806 | 5,931 | 5,664 |
| 千葉県 | 1,773 | 4,178 | 4,017 | 5,369 | 6,889 |
| 東京都 | 2,632 | 5,359 | 6,416 | 6,508 | 6,612 |
| 新潟県 | 89 | 640 | 779 | 892 | 1,034 |
| 富山県 | 184 | 533 | 756 | 999 | 1,375 |
| 石川県 | 88 | 246 | 385 | 492 | 568 |
| 福井県 | 190 | 591 | 761 | 970 | 1,253 |
| 山梨県 | 459 | 963 | 1,561 | 1,858 | 1,967 |
| 長野県 | 1,414 | 2,861 | 3,173 | 3,774 | 4,365 |
| 岐阜県 | 1,643 | 4,682 | 5,665 | 5,998 | 6,443 |
| 三重県 | 1,559 | 4,218 | 5,004 | 5,464 | 5,957 |
| 滋賀県 | 972 | 3,070 | 3,773 | 4,298 | 4,526 |
| 京都府 | 266 | 562 | 702 | 725 | 726 |
| 大阪府 | 1,328 | 3,434 | 4,391 | 4,614 | 5,200 |
| 兵庫県 | 291 | 1,403 | 2,007 | 2,173 | 2,480 |
| 奈良県 | 167 | 331 | 449 | 652 | 743 |
| 和歌山県 | 28 | 63 | 96 | 137 | 240 |
| 鳥取県 | 29 | 37 | 26 | 78 | 45 |
| 島根県 | 26 | 94 | 153 | 149 | 117 |
| 岡山県 | 171 | 670 | 925 | 1,332 | 1,737 |
| 広島県 | 655 | 2,357 | 3,371 | 3,738 | 3,620 |
| 山口県 | 33 | 129 | 169 | 205 | 277 |
| 徳島県 | 19 | 39 | 62 | 70 | 81 |
| 香川県 | 60 | 187 | 341 | 403 | 417 |
| 愛媛県 | 25 | 47 | 102 | 155 | 217 |
| 高知県 | 18 | 27 | 31 | 27 | 31 |
| 福岡県 | 133 | 335 | 375 | 411 | 411 |
| 佐賀県 | 21 | 41 | 42 | 74 | 66 |
| 長崎県 | 30 | 32 | 66 | 78 | 85 |
| 熊本県 | 25 | 55 | 37 | 97 | 151 |
| 大分県 | 24 | 34 | 44 | 91 | 130 |
| 宮崎県 | 18 | 33 | 29 | 75 | 111 |
| 鹿児島県 | 21 | 44 | 56 | 89 | 133 |
| 沖縄県 | 148 | 159 | 153 | 151 | 147 |
| 計 | 56,429 | 119,333 | 139,072 | 147,803 | 155,714 |

出所) 法務省入国管理局登録課「外国人登録国籍別人員調査表」。

### 1.2.2. ブラジル人出稼ぎの推移 — 短期滞在から定住化へ

ブラジル人出稼ぎの日本への流入は就労を制限する入管法「改正前」と、「改正後」という２つの時期に分けるべきであろう。改正後は、日系人とその配偶者（非日系人を含む）に対する就労条件の制限がなくなり、急速に日本に在住するブラジル人が増加した。ところが、改正とほぼ同時期に日本経済が不景気になり、その影響がブラジル人の就労実態や生活の諸側面に波紋を及ぼした。

経済の不況に伴い、ブラジル人就労者を解雇する企業は少なくなかったものの、予想されていたブラジル人の帰国が、実際には見られなかった。不況が起こしたのは帰国ではなく、ブラジル人就労者の社会的な推移ということである。その推移は特に次のような点において具体化したと思われる。

(1) かつて関東と東海地方に集中していたブラジル人は就職口のある別の地方に移住するようになった（表 1-1 を参照）。このように、90 年代に入って以来、本研究の調査地である関西地域でもブラジル人就労者が増加し、しかもその人数が安定してきたとも言える。

(2) 製造工場のリストラを機に、異なる職種への移転が多くなり、その中で事業を興した人が顕著に現れた。この場合の事業は多様であり、拡大したブラジル人コミュニティへのサービス業が目立つ。特に、食品店、レストラン、マスメディア関係（いわゆるエスニックメディア）の会社などがあげられる。

(3) 不景気以前、日本語能力を問わずブラジル人就労者を雇用していた企業の採用条件が厳しくなり、日本語がある程度できる人が優先されるようになった。その結果の一つとしては、日本語を習う意志を示した人が増え、同時にその需要を満たすための日本語教室が各地で設立されたことがあげられる。たいていの場合、それらの日本語教室は地方自治体もしくは民間のボランティア団体が営むものである。

以上のボランティアの日本語教室とブラジル人とのかかわり合いが本稿の中心的

な位置を占める。

## 1.3. 地域社会とのかかわり合い

外国人就労者が各県の地域社会に数年在住しているにもかかわらず、日本人の住民と接する度合いは低いとみなされている。これに関して、ブラジル人は例外ではない。特に、ブラジル人が多い群馬県の太田市、大泉町[*1]、静岡県の浜松市、愛知県の豊橋市などの産業都市ではブラジル・ポルトガル語共同体が形成され、その範囲以内で充分生活することができるようになった。このように、職場でのみ日本人と接することになる。こうした現状では、職場以外は日本社会と「出会う」唯一の機会が、ほとんどの場合、ボランティア団体に限られている。これらのボランティア団体が様々な形式で実現している。雇用問題、人権問題の相談窓口になる組織が多数であり、その一部が日系ブラジル人によって成立した。また、実用的な日本語を教えることを主な目的とする団体も際だつ。ブラジル人の日本語習得及び言語行動について論じる本稿は、特に後者に関心を抱く。ブラジル人が置かれている以上のような社会的な状況を、日本語習得・使用に影響を及ぼす重大な要因として扱わざるを得ないからである。その理由は以下の章の考察で明らかにしたいと思う。

## 1.4. ボランティア日本語教室 — 2重の役割

上述したように、外国人就労者の定住化が進むにつれ、日本の各地で彼らの生活を援助するボランティア団体が増加し、その多くが日本語教室を設けることを目的としている。在住外国人が最も多い地域は日本語教育ネットワークが成立する段階にまで至っている。群馬県太田市がその例の1つである。

---

*1　大泉町での7年継続調査をまとめた喜多川(1997)が「イスラム・ロード、パキスタン・バングラデッシュ・ゾーンと呼ばれた太田・大泉町ではあるが、新入管法以来、アジア形の代替労働力として、日系人労働者の就労が進んできたのである。こうしたなかで、1996年6月1日現在、大泉町は、人工42,229人中、外国人が、4,274人と、外国人比率が10%を越し、全国1位を記録したのである」と報告している(p.79)。

図 1-1 太田市の日本語教育ネットワーク

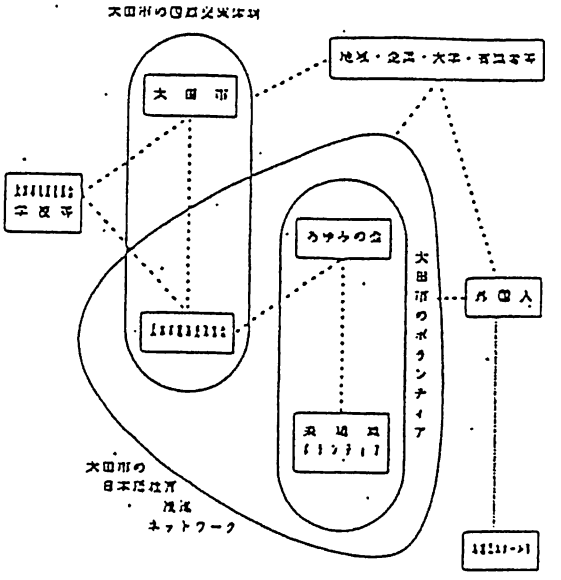



表 2-2 太田市における外国人日本語教室受講者等の推移

| | 平成５年度 | 平成６年度 | | 平成７年度 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 前期 | 後期 | 前期 | 後期 |
| 受講者合計 | 7ヵ国 ４５人 | 14ヵ国５９人 | 14ヵ国101 人 | 15ヵ国124 人 | 14ヵ国117 人 |
| ボランティア講師 | ６５人 | ４３人 | ３７人 | ６５人 | ６８人 |

筆者が調査を行った滋賀県は太田市と比べると、外国人就労者の受け入れの歴史が浅いとは言え、在住外国人に対する援助や交流活動が活発に行われ、その中で草津市にある調査対象の O 日本語教室が県内外で注目を浴びるようになった。ボランティア教室が成功した理由はどこにあるのだろうか。それは、外国人の要求を満たしているからだと思われる。しかし、ここで言及する要求とは日本語学習にとどまっておらず、幅広いものとしてとらえている。

ブラジル人への調査で得られたデータについて述べると、日本語教室に通う動機付けは２つ考えられる。１つは、いうまでもなく、日常のコミュニケーション問題を和らげるために、実用的な日本語の学習を求めることである。もう１つは、くつ

ろいだ場で同国人の仲間及び日本人と付き合うことである。場合によって、後者が第１の目的になる。自宅と職場の往復に限られた生活を送っている多くのブラジル人就労者が、日本語教室に通いはじめることによって、付き合いの範囲が広がり、日本社会のもう１つの側面が見えてくるであろう。すなわち、ボランティア日本語教室は、日本語を教える以上に社交場としても機能していると言っても過言ではない。言い換えると、ボランティア日本語教室は二重の役割を担っていることになる。

職場とは異なった環境、つまり緊張がない環境で日本語を学習及び使用するようになることはブラジル人の言語行動に影響があると予想される。その影響はどのような形式で現れるのかを調べるにあたって、次のような項目を明らかにする必要がある。

＊「職場」と「ボランティア」、各領域内部の言語的な特徴

＊各領域においてのブラジル人の言語行動、とりわけ日本語使用の諸側面

＊日本語教室の学習によって、日本語に対する意識が異なってくるのか、異なってくるとすれば、どのようにそれが表面化するのか。

以上の点の分析を試みることとする。

## 1.5. 本論文の骨子

本部は３部から成り立つ。序論と結論を除き、第１（第３章）に、アンケート調査と参与観察調査を通じてブラジル人就労者の言語生活を総合的に調べる。詳細に述べると、所属、言語的な背景、彼らが形成する社会的ネットワークということである。その中で、日本語習得および使用に関与する変数を探る。第２（第４章）に、ブラジル人が参加した「職場場面」の会話と、「ボランティア場面」の一対一の会話を資料とし、実際の言語運用の諸特徴、とりわけ動詞と終助詞の習得・使用状況を記述的に分析する。第３（第５章）には、ブラジル人の社会言語能力に関する一考察を試みる。ボランティアと接し、学習することによって、日本語のフォーマルなスタイルのインプットが行われる。職場で用いられるインフォーマルなスタイルとの差を意識し、場面または話し相手によってこれらのスタイルを切り替えるようになる。要するに、「職場内」と「職場外」、それぞれの異なるスタイルのインプ

ットによって、ブラジル人の日本語が形成すると思われる。この仮説の下で、ブラジル人によるスタイル切り替えの諸要因を浮き彫りにし、インプット環境と第２言語習得の因果関係を裏付けるような方向に分析を進めていく。

# 第２章
# 先行研究と調査の概要

本章では、本研究の枠組みとなる言語習得理論と調査の概要を紹介する。まず、言語習得諸理論との関係から本研究の位置づけを行う。次に、本研究の調査データの概要を述べたい。

## 2.1. 先行研究

本論文に関係する言語習得理論の先行研究は２つのグループにまとめることができる。１つは、欧米における第２言語習得、とりわけ移住者の自然習得に関する研究、もう１つは日本語習得に関する研究である。なお、各章のトピックにおける参考文献については、それぞれの章で取り上げるので、本節では、全体のテーマと直接関係のある文献のみを記すにとどめる。

### 2.1.1. 欧米における自然習得の研究

本研究の出発点が自然習得であるということで、研究対象と研究目的に関しては類似点のある次の先行研究から大きな示唆を得た。

まず、Schumann の「ピジン化仮説・同化モデル」（Pidginization Hypothesis and Acculturation Model）があげられる（Schumann, 1978; Larsen-Freeman & Long, 1991; Ellis, 1994）。Schumann はアメリカに移住したアルベルトという、中南米出身の 33 歳の男性を 10 ヶ月間観察し、英語の習得過程を追究した。英語を自然習得した６名のインフォーマントの中でアルベルトが最も遅い習得段階に立っていることがわかった。例えば、10 ヶ月後、否定形の copula "don't" をまだ習得しておらず、"no + V"形式を多く使用していた。続いて、Schumann が、アルベルトを対象に７ヶ月の正式な学習を施したが、否定形の形式や語順などの項目において進歩が見られなかった。その要因のうち、年齢と認知能力は最初から排除された。なぜかと言うと、同じ年齢の他のインフォーマントがアルベルトより速く上達したからである。また、認知テ

ストでは特に問題がなかったという。そこで、アルベルトをとりまく社会的な状況を調べた。アルベルトが住んでいた地区および働いていた工場ではスペイン語母語話者が多く、ふだんの生活ではほとんど英語を使用することがなかった。このことから、限られた習得の最大の要因として Schumann があげたのは目標言語と母語話者との社会心理的な距離である。

同化モデルにおいては、社会的な距離とは集団にかかわるものであり、社会的支配（social dominance）、同化のパターン（integration pattern）、包囲（enclosure）、団結（cohesiveness）、文化的調和（cultural congruence）、態度（attitude）、滞在予定の期間（intended length of residence）という８要因から成る。一方、心理的な距離とは個人にかかわる単位である。言語衝突（language shock）、文化衝突（culture shock）、動機づけ（motivation）、自己浸透性（ego permeability）という４つの情意的な要因を包括する。有利な社会的な条件が整っていない場合、第２言語習得の促進には心理的な距離が大きな役割を果たすという。しかし、アルベルトがスペイン語母語話者のみと付き合い、英語教室に通う意志を示さないということから、英語を習得する意欲や動機づけが低いと判断された。要するに、アルベルトは、社会的にも、心理的にも、英語母語話者から大きく離れているという結論が導かれた。

なお、アルベルトとその他のインフォーマントにおける習得の初期段階に見られた言語的な特徴にピジンとの多くの類似点が観察された。この調査の結果を基に、Schumann は第２言語習得における社会心理的な条件がピジン化のそれに類し、さらに第２言語とピジン、いずれも言語機能の同種の簡略化（simplification）によって形成されると言及している。

Schumann のモデルに対する反論は特に第２言語とピジンとの形成過程を同じ基盤の上で考えることを問題とする。例えば、ピジンは第２言語と異なり、様々な第１言語が接触した状況の下で生まれる。また、第２言語が目標言語をモデルにするのに対して、ピジンは複数の言語の要素を取り入れながら、独立とした体系になっていく。そもそも、ピジンは集団単位で生じる現象であり、第２言語は個人単位で分析すべきであると指摘されている（Larsen-Freeman & Long, 1991）。

社会心理的な要因に関して言えば、どれほどこれらの要因が習得の成功率に直接かかわるのかが問題点になる。社会心理的な要因の重要性を認めなければならないとは言え、第２言語話者自身の内的要因も視野に入れる必要があるであろう。そこ

で、同化モデルが社会心理的な要因を重視しすぎているところがあると言わざるを得ない。

本研究の参考になったもう１つの枠組みは、ドイツの言語学者を中心とした第２言語研究プロジェクト(Zweitsprachenwerb Italienischer und Spanischer Arbeiter - ZISA)が1970年代に構築した「Pienemann-Johnston モデル」、または「多次元モデル」(Multidimensional Model)である。ZISAはドイツに移住したイタリアおよびスペイン出身の外国人就労者におけるドイツ語習得を徹底的に調べた巨大な規模のプロジェクトである。複数の調査法を用い、横断調査に加え、２年の縦断調査を実施した。多次元モデルの大きなメリットと言えるものは第２言語の自然習得をとりまく社会心理的な状況も考慮しながら、各習得段階に潜在する言語的な規則性と、学習者の認知的な作用という側面を総括的に分析したことにある。このモデルは、正式な学習の有無というような外的な要因と関係なく、すべての第２言語母語話者が同じ習得段階を経ると主張している。ただし、同じ習得段階にいると判断されたあるグループの中でも、文法的な正確性や伝達の成功率にかかわる実際の運用が、個人によって異なってくると言う。このように、多次元モデルには習得過程を示す「developemental axis」と、習得者個人の変異を示す「variational axis」という２つの次元から成立するのである（Meisel, 1981)。

ZISA研究に対する批判の１つは、語順などの文法項目における習得順序を明らかにするものの、各段階に現れる形式はどのような文法的な規則に制約されているのか、なぜ現れるのかについては説明していないということである。しかし、誤用分析（error analysis)研究が盛んになされていた1970年代には、多次元モデルが先駆的な役割を果たしたことはいうまでもない。要するに、目標言語との比較から習得過程そのものに視点を移行したのである。学習者の言語をどれほど目標言語に近づいているかということより、どの順序で、どのように第２言語話者が体系として形成および変異するかを解明するのが目的であった。また、Larsen-Freeman & Long (1991)が指摘するように、それぞれの話者の習得過程に関与する社会心理的な変数と、習得にかかわる内的なメカニズムを会わせ、分析したことにも先駆的な意義があった。

### 2.1.2. 日本における第２言語習得の研究

第２言語としての日本語研究は誤用分析を主流として、発展を遂げてきた。渋谷(1988)では日本の誤用分析研究には２つの方向性が見られると指摘する。１つは教材や教授法の開発に活用するものであり、もう１つは日本語の文法体系の解明に活用するものである。後者が現在まで成果を上げ続けていると言えるであろう。長友(1993)が言及するように、これらの誤用分析の研究はそれなりに評価すべきであるが、中間言語の体系や習得のメカニズムを明らかにするには限界があると言わざるを得ない。

ネウストプニーを中心に、社会言語学的なアプローチから学習者の日本語の言語行動に焦点を当てた一連の研究もあげられる。これらの研究は、特に日本語母語話者との接触場面における学習者のコミュニケーション能力やコミュニケーションストラテジーを分析したものである。ある意味では、これらの研究も誤用分析の範囲にはいると言える。さらに、接触場面の研究に応用されるネウストプニーの「言語管理モデル」が学習者の逸脱を分析することで、誤用分析の研究として認めても良いのであろう。ただし、このモデルは逸脱にとどまらず、逸脱を訂正する段階までを含む。

最近、特に 90 年代に入って以来、習得過程を明らかにする目的を持って、理論枠組みを応用する第２言語習得研究が数々登場した。例えば、長友が提唱した「系統的可変モデル」(Systematic Variation Model)がその１つである。長友はこのモデルを応用し、中国語および韓国語を母語とする学習者における「は」・「が」の習得過程を追った。また、Doi and Yoshioka(1990)は上述の Pienemann-Johnston の多次元モデルを応用し、助詞の習得順を明らかにしようとした。欧米などで打ち立てられたモデルを応用した日本語習得の研究は他にも多数あるが、これらの研究の概観については長友(1993)に詳しく掲載されているため、ここでは、述べないこととする。ところが、最後に注意したいのは、これまで１つの言語を母語とする学習者に限定し研究が進められることが一般的な傾向であったが、上のようにモデルを応用した最近の第２言語習得研究では様々な言語を母語とする学習者の日本語習得を調べ、学習者の中間言語に潜在している普遍的な規則や特徴を見出そうとしている。これ

により第２言語としての日本語習得研究の理論に大きな展開が見えてくるのであろう。

### 2.1.3. 本研究の位置づけ

本研究はブラジル人就労者の日本語の言語行動において日本語習得の諸特徴を解明することを目的とする。ただし、これまで行われた日本語習得研究と異なると言えるのは、正式に学習した者を対象とするのではなく、自然習得を出発点とした就労者の日本語習得の分析を試みるということである。

最近まで留学生を中心に日本語を学習した人々が教室を出発点としたことが、日本語の習得研究は学習者のみを対象としてきたもの以外はほとんど見られなかったことの原因であろう。しかし、留学生とは異なった環境で日本語を習得する外国人就労者の増加に伴い、日本語習得の研究が新たな展開を迎えるに違いない。そこで、70 年代に同じような過程を経たはずの欧米諸国における移住者の第２言語習得の状況と対比が考えられた。それらの移住者の社会的な位置や習得環境に関して多数の共通点が見られると予想される。具体的に言うと、就労者がホスト社会との接触の度合いが低いということは言語習得に大きな影響があるのであろう。たとえとして、上述した Schumann の同化モデル研究の対象となったインフォーマントが置かれた習得環境がブラジル人就労者のそれと類する。こうした社会心理的な要因との絡みあいを第３章で考察する。

本稿は Pienemann-Johnston モデル（多次元モデル）を提唱したドイツの ZISA 研究とも類する点がある。多次元モデルは各インフォーマントの運用上のバリエーションや個人差を尊重すると同時に、習得段階の普遍性を探る。さらに、正式な学習があるにもかかわらず、すべての第２言語話者が同じ習得段階を経る。また、学習によって、習得段階をとばすことがあり得ないと言及している。本稿はポルトガル語を母語とするブラジル人をのみ対象とするため、習得過程に観察された諸特徴はどこまで普遍的と言えるのかが明確にはならない。しかし、インフォーマントの中間言語に関与する要因として、母語からの転移を重視する立場をとらない。要するに、本研究は日本語の習得過程に見られた諸特徴とそれらの要因がブラジル人話者の特

有のものだと決めつけない。日本語という言語の習得過程そのものに見られる特徴を見出そうとする方向に進めたい。それらの特徴が普遍的か否かを明確にするためには、さらに他の言語を母語とする話者の日本語習得を対照的な観点から調べる必要があるであろう。

最後に、学習が習得段階に影響があるか否かに関しては、それを検証するより、むしろ、学習しはじめたことによって、インフォーマントが表面化した言語形式上の具体的な変化を示そうとする。

## 2.2. 調査の概要

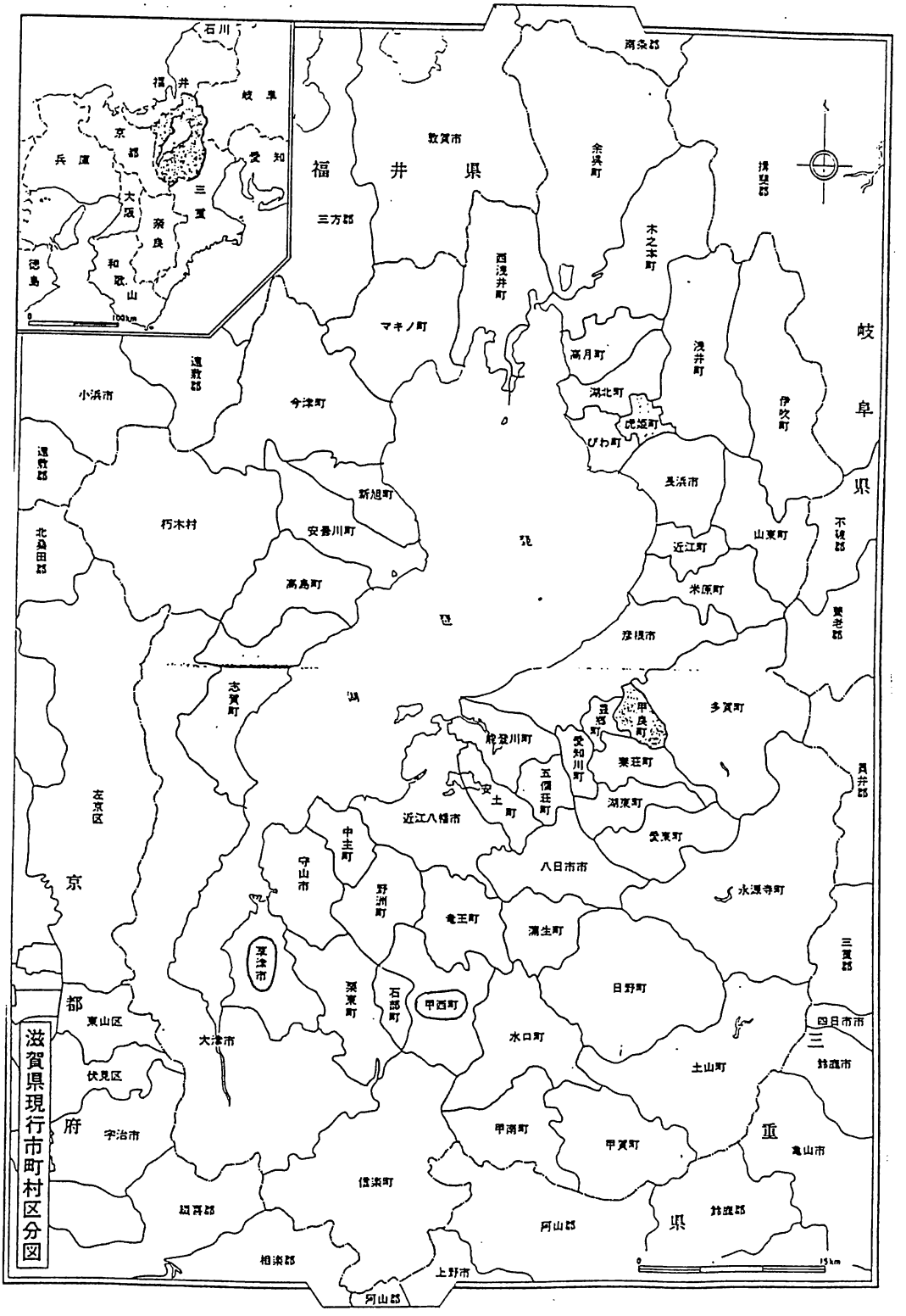
本研究は 1993 年に開始した。社会言語学と人類学の調査法を用い、ブラジル人就労者の言語生活から談話細部における日本語習得および使用の実態までを調べた。言語生活やインフォーマントの日本社会における生活の諸相を把握するためのアンケート調査と参与観察調査を行った上で、３名のインフォーマントの自然談話を縦断的また横断的に分析した。横断的に分析した場合、他に２名のインフォーマントの談話資料を補足データとして用いた。

### 2.2.1. 調査地

関西地方で調査を行い、その中で、アンケート調査は大阪府と滋賀県、談話録音調査は主に滋賀県で実施した。

90 年代に入って、入管法改正や不景気にともない、ブラジル人就労者がもっとも多く在住している関東と東海地方から関西へも流入してきた。当該の調査地、大阪府には現在約 5 千人以上在住している。また、滋賀県にはブラジル人やペルー人が急増し、県内の数カ所にある工業団地で就労している。以下の地図に調査を行った地域が示されている。

地図 2-1: 調査地域




『角川日本地名大辞典』 25 滋賀県、角川書店、昭和 54 年

表 2-1: 滋賀県におけるブラジル人の登録人数

| 外国人 | ブラジル人 |
|---|---|
| 19,056 名 | 7,275 名 |

滋賀県庁国際課調べ　平成８年１２月

ブラジル人の人口は増えてはいるが、群馬県の大泉町や静岡県の浜松市に見られる「ブラジル人タウン」のような地区は大阪、滋賀県や関西のその他の地域にはまだ形成されていない。関西では、ブラジル人の居住地が特定の地区に密集していない。このように、仲間と一緒にくつろぎ、情報交換する場としては、教会やブラジル人向けの食品店に限られている。教会においては、相談の他、日本語教室が開かれることがしばしばある。

滋賀県では、日本語教室が 10 校存在しているが、その中で草津市にある日本語サークル（以下 O 日本語教室）が特に注目を浴びている。草津市周辺だけではなく、県内の数々の地区からもブラジル人が集まっている。

O 日本語教室は 1994 年７月に形成され、２年あまりの活動によって拡大した。現在（1997 年１月）、60 名のボランティア教師と、400 名の会員が登録されている。その中で、50 名が継続的に教室に通っている。ブラジル人の他、ペルー人、アメリカ人、中国人、マレー人が生徒として登録され、ブラジル人が 90 %を占める。前章で述べたように、O 教室は日本語教育とともに交流、という二重の役割を果たしている。

筆者はこの O 日本語教室で２年６ヶ月間調査し、３名のインフォーマントの日本語習得を追究した。

### 2. 2. 2. 被調査者

連続的に談話を調べた３名のインフォーマントは全員日本語を自然習得したものである。これらのインフォーマントを追究することとしたのは、３名とも、来日後の生活パターン、周囲の人々とのネットワーク、日本語のインプット環境という変数が一致しているからである。

以下、各インフォーマントの属性や言語的な背景を個別に述べる。これらの情報はインタビューとアンケート調査に通じて得られた。

### 2.2.2.1. 属性

インフォーマントの属性は次の表？？？から表？？？までにまとめてみた。各インフォーマントを２つの文字で区別する。１つ目の B は「ブラジル人」を表し、２つ目はインフォーマントの氏名の頭文字を表す。

**表 2-2： 属性**

| | 性別 | 年齢 | 父 | 母 | 出身地 | ブラジル居住地 | 学歴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| BI | 男 | 33 | 準１世 | ２世 | サンパウロ市 | サンパウロ市 | 大学卒 |
| BA | 男 | 24 | 非日系 | 準１世 | パラナ州 | パラナ州 | 学中退 |
| BM | 男 | 25 | ２世 | ２世 | ンパウロ州 | サンパウロ州 | 校中退 |

* 準１世: 学校教育を受ける前の年齢で移住した人

** 表に示したインフォーマントの年齢は調査開始の時のものである。

**表 2-3： 補足インフォーマント**

| | 性別 | 年齢 | 父 | 母 | 出身地 | ブラジル居住地 | 学歴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| BN | 男 | 40 | 非日系 | 非日系 | サンパウロ市 | サンパウロ市 | 高校卒 |
| BF | 男 | 40 | 非日系 | 非日系 | サンパウロ市 | サンパウロ市 | 高校卒 |

### 2.2.2.2. 来日以前の言語環境

以上の BI、BA、BM は日系人であるということで、来日後初めて日本語や日本文化に触れたわけではない。BI と BM は会話がまったくできなかったが、挨拶や簡単な表現を聴いて理解できる程度の能力を持っていたという。BA は聞き取り能力、会話能力、両方とも完全に来日後養った。ブラジルでの正式な学習に関しては、いずれもなかった。また、３名の中でもっとも日系人社会とつながりがあったのは

BM である。しかし、インフォーマント全員の発言によると、ポルトガル語が母語であり、来日するまでの日本語との接触は最低のレベルにとどまっていた。このことから３名の日本語習得はほぼ来日後行われたと思われる。

これら３名のインフォーマントに対して、BN と BF は来日するまでまったく日本語にさらされたことがなかった。

表にまとめると、次のようになる

表 2-4-1: 来日以前の日本語能力

| | 会話 | 聴解 | 正式学習 |
|---|---|---|---|
| BI | × | △ | × |
| BA | × | × | × |
| BM | × | △ | × |

表 2-4-2: 来日以前の日本語能力

| | 会話 | 聴解 | 正式学習 |
|---|---|---|---|
| BN | × | × | × |
| BF | × | × | × |

*　×: 全然できない　　△: 少しできる

### 2. 2. 2. 3. 来日後における日本語のインプット環境

BI、BA、BM、３名とも滋賀県内の製造工場で働いている。BI と BA は同じセクションの同僚であり、BM は他のブラジル人がいない工場で働いている。いずれも職場で接触する人は同じ現場の日本人の同僚と、直接かかわる上司の班長である。他のセクションに所属している人や班長以外の上司とはほとんど接触がないという。このように、３名とも来日後の最初の日本語のインプットは職場での自然習得によるものである。

職場の同僚や上司が、ほとんどの場合、滋賀県生まれの滋賀県育ちであり、使用する日本語が地元の方言に当たるものである。ところが、仕事を求めて、外の地方から移住した日本語母語話者もいることがわかった。例えば、BM ともっとも親しくしており、同じ寮に住んでいる同僚（以下 JD）が長崎県出身の人であり、BM と話す場面では長崎県の方言と思われる要素が多く出現する。

(1) [BM-JD: BM の部屋で FAX の使い方について話しているところ]

JD: その何番と、こう、消せば消えるきゃ。何番目に登録しちょうるとか。録画しちょるとか。[...] はっきりまだわらん。あんまり見ちょらんけ。ただ X だけで。メーカーが違うけえ、わからんね。

3名のインフォーマントが来日し、しばらく職場に限って日本語にさらされていたが、しばらくしてから、地域社会のボランティアの日本語サークルに通いはじめることによって、職場外へ付き合いの範囲を広げ、正式に日本語を学習するようになった。職場で使用されている日本語とボランティアで使用されている日本語との相違点はスタイルの差によるものである。前者は方言形式が多く、普通体が用いられるよりインフォーマルなスタイルの日本語である。後者は、方言形式が少なく、丁寧体の高い使用頻度のよりフォーマルなスタイルの日本語である。ちなみに、このスタイルは授業だけではなく、普段話している場面でも見られる（スタイルについては、第5章で詳細)。

BI、BA、BM は草津市にあるボランティアの O 日本語教室に週に1時間通っていた。ところが、BM は3ヶ月経った時点で教室に通えなくなったため、学習の影響がほとんどないと思われる。そこで、学習を主な変数として BM の資料をコントロールデータとして用い、BI と BA の日本語使用に見られる変異と対比的に分析したい。

以下、3名のインフォーマントにおける来日後の主な情報を提示する。なお、正式学習に関しては、調査をはじめた 1994 年 12 月の時点での学習の期間を記す。

**表 2-5: 来日後の基本的な情報**

| | 来日年 | 滞在期間 | 居住地 | 同居 |
|---|---|---|---|---|
| BI | 1993 年 | 1 年 8 ヶ月 | 栗東町 | ブラジル人同僚 |
| BA | 1991 年 | 4 年 9 ヶ月 | 栗東町 | 兄弟 |
| BM | 1990 年 | 5 年 | 甲西町 | 1 人暮らし（寮） |

表 2-6: 来日後の言語環境

| | 日本語母語話者との付き合い | | 使用言語 | |
|---|---|---|---|---|
| | 職場内 | 職場外 | 職場内 | 職場外 |
| BI | 上司（班長） | ボランティア | 日本語・ポ語 | +ポ語－日本語 |
| BA | 同僚 | ボランティア | 日本語・ポ語 | ポ語・日本語 |
| BM | 班長、同僚 | 同僚 | 日本語のみ | ポ語・日本語 |

BI と BA に比べると、BM のボランティアメンバーとの接触の度合いが低いとみなされる。すなわち、日本語教室に限られている。一方、BI と BA は日本語教室以外の場でもボランティアメンバーと付き合うことが多い。

さらに、補足インフォーマントの BN と BF は自然習得の初期に位置づけられ、他の３名のデータと対照的に考察する。BI、BA、BM とは異なり、BN、BF は日本語教室に一切通ったことがなく、正式な学習もしていない。職場でのみ日本語にさらされている。BN と BF はいずれも５年間日本に在住しているが、その間習得した日本語が習得の初期に化石化していると思われる。自然習得の初期にあると思われる要素は次のようなものである。

**(I) ポルトガル語の語順が日本語に残存している。**

(2) [BF-同僚: 仕事の現場で]

BF: あなた、わかるオサハラ+

S + V + O

**(II) ポルトガル語の語句をそのまま日本語に取り入れる。**

(3) [BF-同僚]

BF: 違うね。[笑]M、China, China。 お父さん、お母さん、é da China.

[中国、中国] [is from China]

(4) [BN-初対面の日本語母語話者]

J: JTB、しらへん＋

BN: propa, propaganda

[広告]

**(III) 名詞一語文が多く見られる。**

(5) [BN-初対面の日本語母語話者]

BN: はい、はい。ポストカード。うーん。これ。

(6) [BN-同僚: 仕事の現場で]

同僚: 見る＋どこらへんで見る＋

BN: ああ、むこう。毎日、毎日。

**(IV) 動詞がほとんど出現しない。**

(7) [BF-同僚 仕事の現場で,次の日に一緒に昼食をとることを約束しているところ]

BF: 明日、マックドナルト、ええ、O.K.＋ → 勧誘

[会うという動詞の位置に O.K. を使用した]

同僚: 午後+

BF: 1時から。ごはんね。

(8) [BN-初対面の日本語母語話者]

BN: たくさん写真 [笑い]

[写真をたくさん撮る]

**(V) 助詞がほとんど出現しない。**

(9) [BN-初対面の日本語母語話者

BN: 大阪、みな知ってるね。[...] 話しゅむずかしい。

他の3名の来日直後の談話を録音することが不可能だったため、自然習得の初期に位置づけられる BN と BF のデータと対照的に考察する。

表 2-7: 来日後の基本的な情報

| | 来日年 | 滞在期間 | 居住地 | 同居 |
|---|---|---|---|---|
| BN | 1992 年 | 4 年 | 大阪市 | 家族 |
| BF | 1992 年 | 4 年 | 大阪府枚方市 | 妻 |

表 2-8: 来日後の言語環境

| | 日本語母語話者との付き合い | | 使用言語 | |
|---|---|---|---|---|
| | 職場内 | 職場外 | 職場内 | 職場外 |
| BN | 上司、同僚 | ほとんどない | 日本語 | ポ語 |
| BF | 上司、同僚 | ほとんどない | 日本語 | ポ語 |

なお、最後に注意しなければならないことがある。ドイツの外国人就労者（gasterbeiter）の間で話されているドイツ語はある種のピジンとして認められるか否かについて、議論がなされてきた（Blackshire-Belay, 1991）。ドイツでは、様々な言語を母語とする外国人就労者が同じ工場で働き、または、同じ地区に在住するような状況が見られるからであろう。しかし、日本では、ブラジル人が働いている職場では、ポルトガル語母語話者がほとんどであり[*1]、ペルーなどの他国の就労者との接触の度合いが低いとみなされている。従って、多数派である日本語母語話者の言語環境に適応するような状況が見られる。

### 2. 2. 2. 4. 日本語母語話者の協力者[*2]

日本語母語話者の属性は次の表 2-9 にまとめる。

---

*1 ペルー人就労者が同じ社会で働くことはあるが、ペルー人の人数が少ない上に、ブラジル人との接触がほとんどないと言っても過言ではない。

*2 日本語母語話者の談話を分析の対象とはしないため、被調査者ではなく、協力者と呼ぶこととする。

表 2-9: 日本語母語話者の属性

| | 性別 | 年齢 | 居住地 | 出身地 | 育ち | ブラジル人との関 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| JO | 女 | 30 代 | 草津市 | 福岡県 | 福岡県 | ボランティア |
| JY | 男 | 37 歳 | 草津市 | 名古屋 | 草津市 | ボランティア |
| JK | 男 | 21 歳 | 草津市 | 草津市 | 草津市 | ボランティア |
| JT | 男 | 40 代 | 大阪府 | 四国 | 東京 | 初対面 |
| JH | 男 | 30 代 | 栗東市 | 滋賀県 | 滋賀県 | BI、BA の班長 |
| JC | 男 | 20 代 | 栗東市 | 滋賀県 | 滋賀県 | BI、BA の同僚 |
| JD | 男 | 40 代 | 甲西町 | 長崎県 | 長崎県 | BM の同僚 |

＊ J は日本語母語話者、2 つ目の文字は氏名の頭文字を表す。

以上の表からは、ボランティアの日本語母語話者は滋賀県生まれの滋賀県育ちの人とは限られていないことがわかる。このように、ボランティア場面においては、滋賀方言と異なるバラエティの日本語のインプットが行われるのである。

### 2. 2. 2. 5. 日本語習得・使用に関与し得る変数

第 2 言語習得の際、関与する変数が無限であるとは言うまでもない。研究をとりまく状況や対象によって、どのような変数が最も影響があるのかを探らなければならない。本研究では、次のような変数がブラジル人就労者の日本語習得過程に関与し得ると思われる。

(I) 年齢: いずれのインフォーマントも 20 代を越えてから来日し、日本語を習得したため、言語を習得する能力が低下していたことが予想できるのであろう。特に、40 代の BN と BF の場合、年齢の影響が大きいと思われる。とは言え、年齢の厳密な関与を検証するのが困難であるため、絶対的な変数として扱わない。

(II) 個人差: 2 人以上の第 2 言語話者が同じようにその言語を運用するわけではない。話者によって、言語能力、言語に関する意識、動機づけなどが異なってくる。

(III) 来日以前の日本語習得: 特に BI と BM の場合、来日以前日本語にさらされたことがあったようであるが、その程度は低いと思われる。また、来日以前まったく

日本語のインプットがなかったBAはBMより習得過程が早く進んだことは事実である。たとえこの変数の影響が大きいと認めても、BAとBMとの差を説明することができない。

(IV) 日本語母語話者との接触: 接触の度合が高ければ、当然日本語のインプットが増え、運用能力が高くなる。最も日本語母語話者との接触が多いのはBIとBAである。

(V) 正式な学習: その言語を体系的に習うことによって、語彙が増え、文法的な発達が行われると予想できる。また、日本語のもう1つのバラエティ（標準語）をインプットするようになる。

以上の変数の中で、明らかにブラジル人就労者の日本語習得に関与していると思われるものは(IV)および(V)である。本研究は特にこの2つの変数を中心に、日本語の習得と使用状況を調べることとする。

### 2.2.3. 調査法

#### 2.2.3.1. アンケート調査

言語生活を調べるために、二回に分け、アンケート調査を実施した。第一のアンケート調査は1993年8月から11月にかけて、大阪府と滋賀県を中心に85名のブラジル人に配布した。特に、インフォーマントの属性、日本語能力（内省）、日本人とのかかわり合いという3項目を探った。その中で、日本人とのかかわり合い、すなわち周囲の人々とのネットワークがブラジルの言語行動と密接に関係していることが窺えたため、この問題点を軸に第2のアンケート調査を行った。

1994年12月と1995年1月の間、大阪府周辺に在住しているブラジル人50名を対象に第二のアンケート調査を行うこととした。調査の内容を具体的に述べると、ブラジル人就労者が日本で生活するにつれ形成する様々なネットワークの性質ということである。双方のアンケートの回答を通じて、ブラジル人就労者の背景や言語生活の諸側面を把握することができた。なお、多くのインフォーマントが記述式のアンケートに馴染んでいないため、自由回答式の項目を控え、主に選択肢の質問を

設けた。

### 2.2.3.2. 参与観察調査

補足データを得る目的で、第一のアンケート調査と同時期に参与観察調査(participant observation)を行った。調査の出発点になったのはブラジル人を雇っている滋賀県甲賀郡甲西町にある下請け会社の工場で、1993 年 8 月に、一週間アルバイトをすることであった。これを機に、インフォーマントの職場でのブラジル人の同僚と日本人との接し方や言語行動を観察することができた。その間、同じ工場で働いていたブラジル人の自宅に泊まり、家族や友人にも接するようになり、生活環境をほぼ把握することができた。その後も、定期的にインフォーマントの自宅を訪問し、周囲の地域コミュニティや職場での日本人との付き合い、言語観などに関する意識を探った。インフォーマントには日本人とブラジル人とのコミュニケーションについて調査していることをあらかじめ知らせたが、調査の具体的な内容や項目は明確にしなかった。

さらに、1994 年 11 月から 1997 年 5 月にわたり、滋賀県草津市のあるボランティアの日本語サークル（以下 O 教室と呼ぶ）に通い、地域コミュニティのボランティア団体とブラジル人とのかかわり方を調べた。教室に通うブラジル人は草津市の近辺に住んでいる就労者であり、彼らのうちのほとんどの人は教室に通うことによって、初めて職場以外の場で日本人と接し、正式に日本語を学習している。また、O 教室を通じて、自然談話録音調査の対象となったインフォーマントに連絡した。

### 2.2.3.3. 自然談話録音調査

事例研究の形式で３名のインフォーマントの自然談話を三回にわたり録音し、分析した。日本語習得および実際の日本語使用の状況を調べるためには、定期的にインフォーマントが参加した日本語母語話者との会話を録音した。インフォーマントが日常生活で日本語を話す領域は職場とボランティアの日本語サークルに限られていることをあらかじめアンケート調査とインタビューで確認した上で、この二つの

領域の場面を談話録音調査の対象とした。職場では、作業中の同僚と上司との会話、また休憩時の同僚との会話、ボランティアサークルでは、ボランティアの日本語母語話者との一対一の会話を分析の資料にした。授業場面の会話も録音したが、インフォーマントの自発的な発言が少ないことと、教科書に記載されている文型をそのまま読み上げることがあるため、本調査で得られた資料として使わなかった。本稿では、この場面の会話は補足データにした。

自然談話録音調査を行う際、録音する会話はどれほど自然談話として認められるのかという問題が必ず浮かんでくる。インフォーマントが観察されていることを意識している限り、最も自然な姿勢をとらないということが既に知られている。こうした「observer paradox」[*3] の影響を希薄にするためのいくつかの方法が提唱されてきた。本研究も状況が許す限りインフォーマントの録音に対する意識を弱めようとした。調査のため録音することは伝えてあったが、会話の開始部から数分がたち、インフォーマントが会話の内容に集中するようになったところで録音をはじめた。

インフォーマントの談話録音時間および録音を行った時期と回数は次の通りである。

**表 2-10: 自然談話録音の回数**

| ブラジル人話者 | 録音時期 | 職場内 | ボランティア |
|---|---|---|---|
| インフォーマント 1 (BI) | 96/5 | BI-JC (30 分)<br>BI-JH (15 分) | BI-JO (40 分)<br>BI-JY (40 分) |
| | 96/12 | BI-JC (30 分) | BI-JO (40 分) |
| インフォーマント 2 (BA) | 96/4 | BA-JH (15 分) | BA-JK (40 分) |
| | 97/5 | BA-JC (1 日密着) | BA-JY (40 分) |
| インフォーマント 3 (BM) | 96/12 | BM-JD (20 分) | BM-JY (40 分) |
| | 97/7 | BM-JD (20 分) | BM-JY (40 分)<br>BM-JT (30 分) |

*3「Observer paradox」という用語は W. Labov が提唱したものである。

その他、４年以上日本に在住しており、その間日本語を使用する機会がほぼ職場に限られている２名のインフォーマント（以下 BN と BF)の自然談話も録音した。これからも彼らの日本語に変化がないと予想されるため、補足データとして分析した BN と BF の会話は一回のみ録音し、本調査の 3 名のインフォーマントのデータと対照的に分析した。さらに、職場内の日本語母語話者がブラジル人に対してフォリナートークや普段と異なるスタイルを使用するか否かを確かめるためには、休憩時や作業中の日本語母語話者同士の会話のサンプルも録音した。なお、職場場面のいずれの会話もブラジル人インフォーマントに録音してもらった。

# 第３章
# ブラジル人就労者の実態

本章では、アンケート調査の結果に基づいて、関西地域、とりわけ滋賀県と大阪府に在住しているブラジル人就労者の属性と社会的な背景から言語的な特徴を探りながら、彼らの全体像を描いていきたい。さらに、それらの背景や特徴の中から、ブラジル人の日本語習得と日本語運用に関与する要因を抽出し、より詳しく考察したいと思う。

本章の構成は以下の通りである。まず、インフォーマントの属性と日本語能力との相互関係を重視した第１アンケート調査の解説からはじめ、同時に補足として参与観察調査のデータを加える。そして、第２アンケート調査を中心に、ブラジル人と日本人とのネットワークの性質を明らかにし、またそれらのネットワークが日本語習得・使用にいかに関与しているかについて述べることとする。すなわち、双方のアンケート調査を通じて、ブラジル人を取り巻く社会的・言語的な環境を明らかにすることが本章の目的である。

アンケート調査はインフォーマントの内省に頼っていることで、信頼性の面では様々な欠点が一般的に指摘されている。ただし、以下のアンケート調査の結果について、次のことは確実に言えるであろう。この調査結果はブラジル人自身の視点から日本語に対する自らの態度および日本での生活観を反映しているものになるということである。その点において、ここで述べる結果は重要なデータになるに違いない。

## 3.1. 属性と社会的な背景

### 3.1.1. 性別・年齢

ブラジル人を採用する多くの会社が単純労働を求めているため、ブラジル人の過半数は男性であり、平均年齢は 20、30 代である。その中で、独身、及び家族と離れ単身で来日する人が多く見られる一方、1990 年の入管法改正以来、家族連れの

来日も顕著になってきている。なお、調査を行った 1993 年当時においては次の傾向がうかがえた。

表 3-1: 性別

| | 15-20 | 21-30 | 31-40 | 41-50 | 51-60 | 61以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 10(11.7%) | 21(24.7%) | 20(23.5%) | 4(4.7%) | 5(5.8%) | |
| 女 | 3(3.5%) | 14(16.4%) | 5(5.8%) | 1(1.1%) | 1(1.1%) | 1(1.1%) |

表 3-2: 誰と一緒に住んでいますか

| 家族 | ブラジル人の友人 | 日本人の友人 | 一人暮し | 無回答 |
|---|---|---|---|---|
| 28(33%) | 42(49.4%) | 1(1.1%) | 13(15.3%) | 1(1.1%) |

ブラジル人就労者には(1)単身、(2)家族連れ、という２つのパターンが見られ、現在、後者にあてはまるケースが増加している。それに伴い、定住の過程が早くなると見なされる。

### 3.1.2. 日本での滞在期間

表 3-3: 滞在期間の予定（日本にどのぐらい滞在する予定ですか）

| 1-2 年 | 3-5 年 | 5 年以上 | 永住 | 無回答 |
|---|---|---|---|---|
| 19 (22,3%) | 54 (63,5%) | 10 (11,7%) | 0 | 2 (2,3%) |

3-5 年間の滞在をメドに来日したと答えたインフォーマントが 63.5%(54 名)を占める。ただし、前節で示唆したように、実際には滞在の期間を延長し、無期限に日本に残留する傾向が強くなってきた。また、一旦帰国し、再来日する人も数多く見られる。梶田(1994)が指摘するように、「ブラジルと日本をいったりきたりする『環流型』ないしは『分居型』移民が多くなると予測されている」[*1]。こうした移動は受け入れの国と祖国において、いずれとも不安定な関係を生み、心理的にも社会的にも大きな影響を及ぼすと考えられる。その不安定な関係に伴う受け入れの国との「心理的な距離」が日本語に対する態度にも影響を及ぼすであろう。

なお、滞在期間と日本語能力を結びつけがちだが、滞在期間が日本語能力に直接関与する要因であるか否かの問いに関しては、次の表 3-4 を参照していただきたい。

記号

C: comprehension　S: speaking

C○S○　ほとんど全て理解でき、流暢に話せる。また、どのような話題についても長時間話せる

C±S±　ある程度まで理解でき、話せるが、特定の話題について長時間は話せない

C±S↓　ある程度まで理解できるが、片言や短い文しか話せない

C↓S↓　片言や短い文しか理解できないし、片言しか話せない

ほとんど何も理解できないし、ほとんど何も話せない

*1　この考察は東洋大学（喜多川豊子代表）による群馬県大泉町調査の報告書から引用したものである。

「環流型」および「分居型」という用語も喜多川で用いられている。

表 3-4: 日本語能力×滞在期間

| 日本語能力 | 来日年 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | '90 | '91 | '92 | '93 | '94 | '95 | 無回答 |
| C○S○ | | 2 | | | | | |
| C±S± | 1 | 8 | 4 | | | | |
| C±S↓ | 1 | 2 | 2 | 1 | 4 | | |
| C↓S↓ | 1 | | | | 2 | | 2 |
| 合計 | 3 | 12 | 6 | 1 | 6 | | 2 |

表 3-5: 日本語能力 × 滞在期間（人数: 85 名）

| 日本語能力 | 来日年 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 無回答 | 合計 |
| C ○ S ○ | | | 1 | 9 | 2 | | | | 12 |
| C ± S ± | 1 | 1 | 1 | 4 | 6 | 2 | | | 15 |
| C ± S ↓ | | | 8 | 11 | 6 | 1 | 1 | | 27 |
| C ↓ S ↓ | | | 6 | 8 | 6 | 3 | | | 23 |
| 無回答 | | | | | | | | 7 | 7 |

（1994 年の調査によるデータ）

表 3-4 と表 3-5 に示されているように、ばらつきがあり、滞在期間は日本語能力に

影響を与える基本的な要因としては認めがたいのである。

### 3.1.3. ブラジルでの居住地・学歴・職業

表 3-6: 居住地

| | | | |
|---|---|---|---|
| サンパウロ市 | 21 (25,9%) | マット・グロッソ・ド・スル州 | 8 (9,4%) |
| サンパウロ州 | 32 (37,6%) | その他 | 3 (3,5%) |
| パラナ州 | 13 (15,3%) | 無回答 | 7 (8,2%) |

（無回答：1 名）　（人数：85 名）

インフォーマントが来日以前に居住していた地域を調べると、ブラジル南東部のサンパウロ州と南部のパラナ州、両地域で全体の 75%を上回る。それはサンパウロ州とパラナ州に日系人が集中しており、日本からの人材派遣会社が猛烈な採用活動をしていることに原因がある。

表 3-7: 学歴

| 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 大学 |
|---|---|---|---|
| 4 (4,7%) | 20 (22,3%) | 37 (44,7%) | 23 (28,2%) |

無回答：1 名　（人数：85 名）

ブラジル人労働者の「高学歴」が先行研究でしばしば指摘されているが、それは現実と一致しているのだろうか。

今回のデータでも 85 名中 23 名（約 28 %）が、来日以前ブラジルの大学に進学している。その中で、中退し来日した 20 代の若者が 12 名いる。これらの若者の多くが、日本での滞在中、単純労働を手段に貯金し、興味のある技術的な専門分野をどこかで勉強する希望を抱いてはいるが、「日本語が充分には話せない」という大

きな壁があり、それが実現できる人はわずかなのである[*2]。

本調査のデータでは、大学に進学した割合が高いと思われる一方、中学校と高等学校卒業もしくは中退し来日した割合が全体の 67 %を占める。その大部分が肉親と一緒に来日するのが普通である。ブラジルで完全な教育を受けないまま来日し、日本でも学校教育を受けることが、たいていの場合、困難である。このように、来日間もなく単純労働に携わり、長期間滞在する 10 代後半、20 代前半の若者が増える傾向が見えている。特定の専門知識を得ずに帰国した場合、学歴社会であるブラジルでどのような職業に就くのかが、大きな社会的な問題になると予想される。

**表 3-8: 職業**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 自営業 | 13 (15,3%) | 一般技術 | 14 (16,4%) | 農業 | 6(7,1%) | その他 | 13 (15,3%) |
| 事務職 | 14 (16,4%) | 専門技術 | 13 (15,3%) | 学生 | 8(9,4%) | 無回答 | 4(4,7%) |

*一般技術:配管工、自動車の修理工、電気工のような職種である。　　（人数：85 名）

ブラジルでの職業は様々であり、特定の職業への偏りは見られない。日系人が多いため、農業及び商業という回答の比率が高いと予想されたが、実際の結果は異なった。この結果は、移民の初期には、主に農業に携わっていた日系人社会の変容を示唆していると思われる。この変容に伴って、一方では日本的な価値観や習慣の消失が進行し、他方ではブラジル文化への同化が進むわけである。こうした現象が当然日系人の言語行動にも反映されていることはいうまでもない。これについては、後ほど詳しく述べることとする。

ここで注意しなければならないのは、来日以前いわゆる 3K 職業の単純労働の経験のない人がほとんどであるということである。日本で初めて労働者扱いをされて、心理的な圧力を受け、階級差の激しいブラジル社会で育った彼らは深くプライドを

*1 このような現状は調査者の参与観察調査とインフォーマントとの個人的な対話からわかったことである。

傷つけられることもしばしばあるようである。その結果、日本人、そして日本社会に抵抗感を抱くようになる人もいるが、そのような場合、日本語に対する態度へも影響することが多い。

## 3.2. 日本語能力・日本語運用

### 3.2.1. 日系人と日本語

日本在住ブラジル人の大半が日系人であることを前提とすれば、彼らの日本語能力・日本語運用を論じるに当たって、来日以前の言語的な背景、とりわけ日本語使用の状況を明らかにする必要がある。ここでは、まず日系人と日本語との関係について簡単に述べてみたい。

次に、日本在住のブラジル人労働者とヨーロッパ先進国の外国人労働者との言語的な環境や第2言語習得の共通点を指摘して、受け入れ側の言語(ブラジル人の場合は、日本語である)との関係における、その相違点を考察したい。

ホスト(日本)とゲスト(ブラジル人)の観点からながめると、その関係は特徴的であると言えるのではなかろうか。なぜならば、外国人労働者受け入れの歴史の長いフランスやドイツなどの移住者は、受け入れ側の国に移住した時点で初めてその国の言語に接するのに対して、ブラジル人は、日本語の理解力、会話力が高くないとしても、何らかの形で来日以前から日本語もしくは日本文化にさらされたことのある人が多いからである。大半の日本在住ブラジル人にとって日本語はそもそも「継承言語」(heritage language)としてみられてきた。また、その関係の特質性が日系人であることことから成り立つとすれば、次のようなことが言えるであろう。

(1) 日系人は、日本語能力が低いとしても、来日以前日本及び日本語に対する好意的な感情を持っていた人が多い。

(2) 来日後、日本語が習いたいと希望する人が多い。その希望は(1)の好意的な感情から生まれるのであろう。また、日系人であることから「日本語を話す」という義務を感じる人も少なくない。ただし、日本社会に受け入れられず、日本人に「異人」としてみられることによって、好意的な感情から抵抗感へ転換するケースもある。

要するに、他の外国人移住者と異なって、ブラジル日系人は、アイデンティティの問題も絡めて、日本に対するある種の愛着を持っており、その愛着が日本語に対する態度と具体的な行為を左右していると思われる。

### 3.2.2. 来日以前の日本語使用状況

ブラジルへの日本人移住に関する研究者、半田友雄は、70 年代の前半にブラジルにおける日本語の行方について次のようなことを論じている。日系人が話す日本語には３つの段階があり、それは時代とともに変化していくというパターンが見られると言う。

「(...) processo que se desencadeia, primeiramente, pela incorporação de palavras luso-brasileiras ao japonês; na fase seguinte, há uma inversão de situações, isto é, passa-se a usar a língua portuguesa com inclusão de vocábulos japoneses e a fase final, em que se passa a utilizar somente a luso-brasileira.」(Handa, 1973 pp.492)

訳「まず、ポルトガル語の語彙が日本語に取り入れられる。次の段階は、日本語の語彙を取り入れたポルトガル語が使用されるという逆の現象が見られる。最後の段階は、ポルトガル語のみが使用されるようになる。」*3

世代が変わるに従って、日本語を維持する傾向は弱くなっていくのは当然のことであろう。ブラジル日系人における日本語の実態を対象とした研究の多くが「世代」を重視しがちである（Handa, 1973; Suzuki, 1986 など)。ただし、「世代」という要因だけでは日系人をめぐる日本語能力・日本語使用の諸問題を片づけることはできない。日系人の日本語能力と日本語使用の実態を調べる際、困難なのは各人がどの程度日本の価値観を受け入れているか、どの程度日本語の知識があるか、どの程度ブラジルへ同化しているかを調べることである。それを考え、「世代」の要因と重ね合わせて、個々の話者の「言語的な背景」を知らなければならないのである。従って、日本在住ブラジル人の日本語能力を測るために、こうした「言語的な背景」を念頭にして、次のような分類を試みる。

---

*3 原文からの和訳は筆者によるものである。

1) 家庭で聞く・話す・正式な学習あり

2) 家庭で聞く・話す・正式な学習なし

3) 家庭で聞く・話さない
- 正式な学習あり
- 正式な学習なし

4) 家庭で聞かない・話さない、正式な学習あり

5) 家庭で話さない・来日後習得
- 自然習得
- 自然習得＋正式な学習

以上の分類に基づいて、第 2 アンケート調査では話者の言語的な環境及び日本語歴と日本語能力との相互関係を調べた。日本語能力に関する回答はインフォーマントの自己評価によるものである。

**表 3-9:** 日本語歴×日本語能力

| | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C↑S↑ | 4 | | | 1 | | | 5 |
| C±S± | 3 | 9 | 2 | 1 | 2 | 1 | 18 |
| C±S↓ | | 3 | 5 | | | | 8 |
| C↓S↓ | | 2 | 10 | | 1 | 2 | 15 |
| 合計 | 7 | 14 | 17 | 2 | 3 | 3 | 46 |

無回答: ４名　人数: ５０名

**表 3-9 の記号**

横

(1) 正式な学習はしたことがないが、家庭で話していた。

(2) 正式な学習はしたことがないし、自分から話したこともないが、家庭では聞いたりしていた。

(3) 正式な学習はしたことがないし、家庭で話したこと、聞いたこともない。

(4) 正式な学習をしたことがあり、家庭では聞いたり、話したりしていた。

(5) 正式な学習をしたことがあり、家庭で聞いてはいたが、話したことはない。

(6) 正式な学習はしたことがあるが、家庭で聞いたことも、話したこともない。

縦

C ↑ S ↑ ほとんど全て理解でき、流暢に話せる。また、どのような話題についても長時間話せる。

C ± S ± ある程度まで理解でき、話せるが、特定の話題について長時間は話せない。

C ± S ↓ ある程度まで理解できるが、話すことはそれほどできない。

C ↓ S ↓ 片言や単文しか理解できないし、片言しか話せない。
ほとんど何も理解できないし、ほとんど何も話せない。

このデータに合わせて、第 1 アンケート調査の次の質問項目から得られた回答も考慮に入れる。

**表 3-10: 家族と同居の方は、家庭内の会話は何語を使っていますか。**

| | |
|---|---|
| ポルトガル語のみ | 15 (53.5%) |
| 日本語よりもポルトガル語の方を多く使う | 10 (37.7%) |
| ポルトガル語よりも日本語の方を多く使う | 2 (7.1%) |
| 日本語のみ | 0 |
| 無回答 | 1 (1.1%) |

以上のデータでは、日本語能力と日本語使用率の双方が高くはないことが示唆される。

「日本語がほとんどできない」と答えた人が少なくないとは言え、表 9 が示してい

るように、「大体理解できるが、特定の話題について長時間は話せない、あるいは少ししか話せない」という回答も多く見られた。このことから、ブラジル日系人、そしてブラジル人就労者には「受動的な話者」(passive speaker)に近い人が多いと言えるのであろう。要するに、聞き取りにはある程度慣れているが、会話能力がその聞き取り能力に追いつかないと言うことである。

在日ブラジル人個々の言語的な背景を調べなければならないということは既に述べたが、個々の話者が来日後、日常生活の中で、どのような人とどの程度日本語を話してきたかを知ることも必要になってくる。つまり、個々の話者のネットワークを辿ることが欠かせない条件の 1 つである。ここでは、「ネットワーク」という用語を応用し、次節において考察してみたい。

## 3.3. 在日ブラジル人におけるネットワークと言語行動との関連

### 3.3.1. ネットワークとは

ここで応用する「ネットワーク」とは「社会的ネットワーク」(social network)という概念である。この概念は社会学者 Barnes がノルウェーの Bremnes という町の社会的な構造を明らかにするための手段として導入したものである。 Barnes は次のように述べている。「When we study the social organization of a simple society, we aim at comprehending all the various ways in which the members of the society systematically interact with one another (...) I decided to concentrate my attention on those kinds of face-to-face relationships through which a class system, if there were one, might operate」 (Barnes,1954, p.39,40)。当時は、社会階級(social class)といったマクロレベルの抽象的な概念が重視されていが、Barnes は一対一の具体的なインターアクションが全体の仕組みを成すとし、その一対一の関係に焦点を当てることによって、社会学の世界に新風を吹き込んだ。それ以来、特定のコミュニティの構造や内部の動きを対象とした社会学者がこの概念を応用してきた。こうした「社会的ネットワーク」理論の骨子と様々な応用について総括的に説明した重要な文献としては Mitchell(1969)があげられる。

社会言語学の分野では、あるコミュニティの話者が参加するネットワークの性質

が彼らの言語行動に影響を与える要因として把えられている。代表的な研究の１つは Milroy(1980)である。Milroy は「社会的ネットワーク」を基に、ベルファストの労働階級コミュニティの話者が持つネットワークの性質がどのように彼らの属している言語共同体における言語的規範の維持と関係しているかを実践的に調べた。最近、社会的ネットワークの概念が移住者に関するヨーロッパの社会言語学研究にも広く応用されている(Barden & Grosskopf,1994; Milroy & Wei,1995; Dabene,1995 など)。また、社会言語学だけではなく、言語教育の分野でもこのネットワークの概念が取り入れられるようになった。日本語教育の実践的な研究がその１例である。例えば、ネウストプニー(1995)は言語管理の観点から日本語教育全体のネットワークを考察している。そこでは、「レベル」、「ネットワーク」、「参加者」という３つのレベルを取り上げる。政府のような大きな単位からコミュニティレベルなどを経て、組、学習グループと学習者個人が作る「習得行動のネットワーク」単位までを細かく分割し、各々のレベルを成すネットワークと、そのネットワークを成す参加者のつながりについて記述している。

以上の社会学、社会言語学、いずれの研究もネットワークの個々の構成員ではなく、構成員全員が保つ全体の関係を重視し、それを体系的に捉えることによって、その社会やコミュニティの構造を明らかにするわけである。それに対して、本稿で考察するネットワークはあくまでもブラジル人話者を中心にし、その話者が個人として日常生活の中で接する日本人や他のブラジル人との関わり合いを意味するものである。要するに、ブラジル人話者をネットワークの中心的な位置に置き、その話者が存立する関係を総合的に捉えようとする。ネウストプニーが呼ぶ「個人ネットワーク」(いわゆる ego ネットワーク) とはほぼ同じ意味範囲で用いるわけである。このようなネットワークを探るには、個々のブラジル人が日常的に行なう様々なインターアクションを考慮に入れる必要があるであろう。すなわち、毎日、どのような場で、だれと、どの言語で、どのようなインターアクションを行っているかを調べることである。それを調べた上で、ネットワークとブラジル人の日本語習得・日本語使用との相互関係を明らかにすることが以下の節の目的である。

### 3.3.2. 日常におけるブラジル人のネットワーク — アンケート調査の結果より

話者が行なう各インターアクションはその話者が形成するネットワークの最少単位であると言えるだろう。ある人とインターアクションを行うたびにその人と特定の関係が成立する。このように、だれでも、生活していくにつれて、様々な人とかかわり合い、様々な異なる性質の関係を持つわけである。例えば、近所の商店でいつもやりとりをする店員、毎日職場で会う同僚、付き合う家族や友人など、人は多種の関係を持っており、それら全体の関係がその人の個人としてのネットワークを成すと思われる。

ここでは、ブラジル人労働者の日本で成立するネットワークの諸相を明らかにした上で、そのネットワークが彼らの実際の言語行動、とりわけ日本語使用と如何に結びついているかを考察したいと思う。

研究によって、ネットワークの分類は異なってくるが、それらの分類を見渡すと、1 つの共通点が見出せる。いずれの分類も相手との関係の「強さ」(strong links)と「弱さ」(weak links)によって、ネットワークの性質が定まる。ある相手と会う回数が多くても、必ずしもその相手との関係が強いとは限らない。たとえ買い物に行く近所の商店の店員とインターアクションを行う頻度が高くても、いつも交わすことばが挨拶にすぎないとすれば、その店員との関係は弱い。つまり、Mitchell(1969)の用語を使うと、ネットワークの親密度が低いと言えるのである。逆に、月に一回しか会わない夫婦同士や親子の関係は前者よりはるかに強い。この場合、親密度が高いという。

ここで、「頻度」(frequency)と「親密度」(intensity)の観点からブラジル人労働者のネットワークを分析してみたいと思う。分析するにあたって、ブラジル人労働者が形成するネットワークを、大まかに 2 つの領域に分けることにする。それらの領域は「職場内」と「職場外」である。2 つの領域に分ける理由は、それぞれの領域でブラジル人が保つネットワークが異なる性質を持つという仮定の下にである。それぞれの領域におけるネットワークにおいて、はっきりとしたパターンが見られると予想する。

以下、「職場内」と「職場外」におけるネットワークの分析を、1995 年に大阪府に在住している 50 名を対象としたアンケート調査のデータと、滋賀県甲西町のある工場で行った参与観察調査に基づいて進めていきたいと思う。

### 3.3.3.「職場内」におけるネットワーク

1993 年に約 450 名のブラジル人労働者が在住している滋賀県甲賀郡甲西町で参与観察調査した際は、ブラジル人の工場内での言語行動を見ることができた。調査の目的は主に、同じ職場にいる日本人の同僚や上司とどのぐらい、及びどのようにインターアクションを行うかを調べることであった。

観察した工場は小型の下請け会社であり、ブラジル人を受け入れる会社としては典型的なところであると思われる。その工場には 40 代の日系２世と、20 代の若い３世、計 8 名のブラジル人が在職していた。全員がパラナ州、日系人の多い地域を出身地とし、その地域の日系人コミュニティとの関わり合いが強いと見られた。日本語能力に関しては、年輩の２世は聴解能力はあったが、自ら話すことはほとんどなく、前節で述べた受動的な話者のカテゴリーに入るようであった。３世の方は、短文や片言がわかる程度、聴解能力も会話能力も低いことがわかった。ブラジル人同士のコミュニケーション言語としてはポルトガル語のみが使用されていた。

同じ工場で働いていた日本人の同僚や上司は地元の年輩の男性が多かった。工業団地の地帯であるため、それらの男性は農業との兼業に携わる人が多い。工場内で普段話している日本語は地元の方言であり、ブラジル人に対しても方言を使用していた。

筆者が観察したところ、挨拶、仕事の指示や命令以外はブラジル人と日本人が話すことはほとんどないようであった。休憩の時でも、それぞれの位置する場所が決まっており、雑談することは見られなかった。必要な場合、日本語能力が高い 20 代の２世が、ブラジル人と日本人の間に通訳の役割を務めていた。

以上の例からブラジル人と日本人との職場でのコミュニケーション、あるいはインターアクションには１つのパターンが見られる。そのパターンは、特に上司とのコミュニケーション手段として使用されるもので、それは媒介者を通じて、インタ

ーアクションを行うということである。

渡部(1992)もブラジル人と日本人との職場内におけるコミュニケーションについて同様の指摘をしている。「日系人が増えたことで職場において日本と出会わなくて済む状況が見える（中略）ことばが通じなくても、日本語のできるブラジル人が日本人との調停役を担ってくれる」。筆者が参与観察調査を行った滋賀県の工場では、以上に述べたように、人材派遣会社に雇われている、より日本語能力の高い通訳者の日系二世が他のブラジル人と一緒に働き、上司に何かを報告する時、あるいはトラブルが起きた時に、ブラジル人と日本人の間に立つ役割を果たしていた。このような体制を持つ会社が多数であることが推測されよう。

上のような、職場内でのブラジル人と日本人とのインターアクションは、次の図にまとめることができる。

図１

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ブラジル人 | → | 媒介者 | → | 日本人 |
| （低い日本語能力） | ← | （より高い日本語能力のブラジル人） | ← | （上司） |

参与観察調査の結果をもとに、ブラジル人は他の同国人が多い会社では、日本人の同僚との言語的なやりとりが少ないだろうと予想をし、アンケート調査で再びこの問題点を取り上げたが、同様の結果を得ることができなかった。同国人の数と関係なく、ブラジル人と日本人との間になんらかの言語的なインターアクションが頻繁に行なわれるケースが少なくない、という回答が多く出現した。それは、同じ職場にいる同国人の数よりも、インフォーマントの日本語能力という要因と関係しているように思われる。

表 3-11: 日本人同僚と話す頻度×職場にいるブラジル同僚の人数

| | しばしば | 時々 | あまり | 全然 |
|---|---|---|---|---|
| 10 人以上 | 7 | 6 | 3 | |
| 5 人-10 人 | 5 | 10 | 2 | |
| 5 人以下 | 7 | 1 | 1 | |
| 私しかいない | 2 | 3 | | |
| 合計 | 21 | 20 | 6 | |

＊ 無回答　3 名　　（人数：50 名）

表 3-12: 日本人の同僚と話すときは、どのような話をしますか。

| 会話の内容 | 日本語能力 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | C○S○ | C±S± | C±S↓ | C↓S↓ |
| 様々な話題について長い話し | 3 | 11 | 3 | |
| 仕事に関する短い話し | | 4 | 4 | 2 |
| 挨拶しかしない | | | 1 | 2 |

さらに、表 3-13 によると、職場で、より日本語能力の高いブラジル人同僚に頼る人が少なくないものの、紹介者を利用せずに自分で何とかコミュニケーションをとろうとする人が過半数を占めている。

表 3-13: 日本人の同僚や上司に自ら話しかけますか。

| | |
|---|---|
| 黙る | 4 |
| より日本語能力の高いブラジル人に言ってもらう | 15 |
| 自分で何とか言おうとする | 27 |

表 14: 職場で何かわからない時、あるいは上司に何かを伝えたい時はどうしますか。

| | |
|---|---|
| 黙る | 4 |
| より日本語能力の高いブラジル人に言ってもらう | 15 |
| 自分で何とか言おうとする | 27 |

ところが、ここでは前述したネットワークにおける「頻度」と「親密度」の概念が絡んでくる。日本人の同僚と話す頻度は高いと言えるだろうが、双方の関係の親密度はそれほど高くないことが明らかになった。職場の同僚との付き合いは主に「短い話」にすぎないと答えた人が全体の約半分を占める。

表 3-15: 日本人の同僚と話す時は、どのような話をしますか。

| 話題の種類 | しばしば | 時々 | あまり | 全然 |
|---|---|---|---|---|
| 様々な話題について長い話 | 10 | | | |
| 仕事とその他の話題について短い話 | 11 | 14 | 2 | |
| 仕事について短い話 | 2 | 2 | 1 | |
| 挨拶しかしない | 1 | 2 | 3 | |
| 合計 | 23 | 18 | 6 | |

＊無回答　2名　　（人数：50名）

### 3.3.4.「職場外」におけるネットワーク

職場外の領域ではブラジル人はどのようなネットワークを持っているのであろうか。同僚との付き合いは職場の外でも見られるのであろうか。

同僚との付き合いに関しては、職場外への連続が多少見られるが、頻繁ではない。しかも、その点において、男女差があり、男性がより同僚との職場外のつきあいが多いことがわかった。

表 3-16: 休日は、職場の日本人の同僚と一緒に遊びに行くことがありますか。

| 性別 | しばしば | 時々ある | あまりない | 全然ない |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 1 | 10 | 6 | 4 |
| 女 | | 1 | 4 | 4 |

また、会社の同僚以外の日本人との付き合いについては、次のような結果が現れた。

表 3-17: 職場の同僚以外の日本人と話す機会はありますか。

| しばしば | 時々 | めったにない | 全然ない |
|---|---|---|---|
| 7 | 22 | 13 | 6 |

無回答：2名　　（人数：50名）

表 3-18: 職場以外の場所で最もよく話す日本人の相手

| | |
|---|---|
| ほとんど接することがない | 13 |
| 近所や商店の人と挨拶する程度 | 20 |
| 近所の人と様々な話 | 2 |
| 近所の商店の人と様々な話 | 4 |
| バーやディスコで会う人 | 5 |
| 公民館などのボランティアグループ | - |
| 日本語の先生 | 2 |
| その他 | 4 |

（人数：50名）

職場外において、日常行う何らかのインターアクションの相手及びそのインターアクションの性質を調べたところ、「自宅の近所の人や近所の商店の人と挨拶をする程度の付き合いはある」との回答が目立ち、また「ほとんど接することがない」との答えの割合も多かった。

休暇の過ごし方を問う項目に関しては、「自宅で過ごす」と「ブラジル人の仲間と一緒に過ごす」ことが一般的な傾向である。

**表 3-19: 休日はどのように過ごしますか。(複数回答)**

| | |
|---|---|
| 自宅で過ごす | 22 |
| 他のブラジル人に会えるレストラン、バー、ディスコなど | 18 |
| 教会 | 6 |
| ブラジル人のサッカー試合に参加する | 1 |
| ブラジル人と日本人のサッカー試合に参加する | 3 |
| 地区の文化会館や公民館などの行事に参加する | 1 |
| 日本語教室 | 4 |
| その他 | 8 |

＊無回答：3名　　(人数：50名)

現在の段階では、ブラジル人が持つ日本人とのネットワークの頻度が高いと言っても、多くの場合、そのネットワークは職場で形成され、職場に限定されているものである。職場外での日本人とのインターアクションの頻度は低く、お互いの関係の親密度も低いものである。言うまでもないだろうが、職場外ではブラジル人の仲間に頼り、ブラジル人を対象としている商店やレストランでなわばりを作る傾向が強く見られる。さらに、ブラジル人同士のネットワークに関しては、同じ相手が職場の同僚であり、かつ親類もしくは遊び相手の友人でもあるというようなパターンの関係が普通である。要するに、同じ相手との「複数関係」は持たれることが少ないのである。

職場の内・外を基準に線引きをし、ブラジル人が持つネットワークの全体的な構造を展望してみると、「職場内」と「職場外」という２つの領域によって、ネット

ワークの性質が異なってくるが、それに伴い、ブラジル人の言語行動が左右されると見なされる。使用言語においては、次のようになっている。

**表 3-20: 領域・話し相手・使用言語**

| 領域 | インターアクションの相手 | 使用言語 |
|---|---|---|
| 家庭 | 家族、親類 | ＋ポルトガル語 －日本語 |
| 仕事 | 日本人同僚、上司<br>ブラジル人同僚 | 日本語<br>ポルトガル語 |
| 遊び | ブラジル人の友人 | ポルトガル語 |

以上のアンケート調査の項目を振り返ると、ブラジル人には仕事以外の領域で日本人と接する機会が少ないことが明らかになった。多くの場合、日本語のインプットと使用が職場に限定される。それはブラジル人の日本語習得とディスコースレベルの実際の日本語使用の実態を調べるにあたって、大きな手掛かりになるものである。なお、ブラジル人は職場外で日本人と接する機会が少ないという状況に関してどう思うかとの問いには、次のような回答が得られた。

**表 3-21: 職場外ではもっと日本人と接することを望んでいますか。**

| | |
|---|---|
| 日本人よりブラジル人の友人とつきあった方がいいと思う | 13 |
| 日本人ともっと接したいと思う。 | 25 |
| 職場外では、もう充分日本人と接している。 | 4 |

＊無回答: 4 名　　（人数：50 名）

インフォーマントの 50 %が日本人とのつきあいを広めることを望んでいるという結果である。そして、その希望を満たしているのは地域コミュニティの住民が形成するボランティア団体なのではないかと思う。このアンケート調査を配布した際、特にボランティア団体が営む日本語教室に通っている人を対象としたわけではないが、前章で述べたように、最近のボランティア団体の増加は顕著である。こうした

ボランティア団体との交流によって、職場外で新しいネットワークが形成され、ブラジル人の、日本人や日本語に対する意識が変化すると考えられる。さらに、ボランティアからの日本語のインプットがあることによって、その結果としての変化が実際の日本語習得と使用にまで現れるであろう。

## 3.4. ネットワークと日本語使用との関連

製造工場で働いている大半のブラジル人は仕事上でことばを使用する頻度が低いとみなされている。雑音が多く、注意深い作業をする場所では、必要な時のみ、ことばを交わす。仕事中の言語的なやりとりは単純命令や単文を相手に投げかけることに限られる。つまり、ことばを簡略化せざるを得ない環境なのである。さらに、次章の談話資料の考察で述べるように、職場では特定のスタイルの日本語が話されている（以下、職場内のスタイルと呼ぶ)。職場外でボランティア団体とのつながりができ、それらの団体のメンバーと接するにつれ、ブラジル人は標準語に近い、異なる日本語のスタイルにさらされるようになる（以下、職場外のスタイルと呼ぶ)。しかも、日本語教室に通うことによって、教科書などを媒介に正式な学習をすることになる。したがって、まず職場でのインプットによって日本語を習得し、その後ボランティアの日本語教室で標準語的なスタイルの日本語を習うブラジル人が実際の会話の中でどのように日本語を運用しているかを調べてみる必要があろう。次章では会話に現れる諸特徴に焦点を当て、多方面からその運用に迫っていきたいと思う。

## 3.5. まとめ

本調査は３年間にわたって継続したが、ブラジル人労働者の言語実態における諸側面を明らかにする目的はほぼ達成したと思う。

アンケート調査と参与観察調査を通じて、ブラジル人の日本語能力と日本語運用について次のような点が明らかになった。

(1) ブラジル人の大部分は、日系人であるにも関わらず、言語文化的には均質な

集団ではない。そこで、ブラジル人の日本語能力と日本語習得背景を調べるために、ブラジル人の、来日以前のネットワークと来日後のネットワークを調べる必要が生じてきた。すなわち、だれと、どこで、どのように日本語を話してきたかを調べるということである。

(2) 日本人と接する機会は職場に限られている。職場外での日本人との関わり合いは希薄であり、多くの場合、挨拶を交わす程度にすぎない。調査の結果からは、来日後のネットワークは「職場内」と「職場外」という2つの主な領域にわけることができた。それぞれの領域において、ネットワークの性質と機能は異なっている。一般的には、職場内での日本人とのインターアクションは頻度が高いとみなされるが、互いの関係は親密ではないことがわかった。一方、家庭や遊び場など、職場外の領域では同国人とのネットワークがはるかに頻度及び親密度が高いと見られる。

(3) ブラジル人が日本で形成するネットワークの性質は必ずしも「日本滞在期間」と関係しているとは言えない。日本に長くいても、ネットワークにおける関係の頻度と親密度が変わらないケースが少なくない。「日本滞在期間」よりネットワークの性質に影響を与えると思われるのはむしろ話者の日本語能力と日本社会や文化に対する態度であろう。

(4) 「日本滞在期間」はブラジル人話者の日本語習得の過程、または日本語能力とも無関係のようである。来日後の日本語習得の過程と日本語能力に関与する要因としては、もちろん話者の日本語歴を考慮に入れなければならないが、それ以上に、話者が形成したネットワークの性質が重要なものだと考えられる。このように、ネットワークと日本語能力及び日本語運用は相関関係にあるわけである。

今後、ボランティア団体の日本語教室に通っているブラジル人を対象として調査を行い、彼らの意識や態度を明らかにする必要がある。本稿での意識に関する考察はこれでとどまるが、次章では、各話者の、個人としてのネットワークと関連させながら、日本人とブラジル人が実際に参加する「職場外」と「職場内」の会話に焦点を当てて、ブラジル人が使用する日本語の具体的な特徴を浮き彫りにしたい。

# 第４章
# 日本語使用における言語形式の諸特徴

## 4.1. 動詞の習得・使用実態

どの言語にでもテンポラリティ（時）の概念とそれを表す方法があり、その言語を習得しようとした場合、時の流れの中で起こる事象、出来事の順序や自己の発話時とその他の出来事との相関的な位置づけを、初段階から明確に意識する必要があるであろう。

世界の多くの言語では、時の表し方が動詞のテンス・アスペクトや副詞の使用によって文法化されている。日本語もその言語の１つである。第１言語であろうと、第２言語であろうと、それらの言語を習得する際、どのような順序で習得の過程が進んでいくか、話者はどのような形式を使用し時間を表すか、使用された形式にはそれに相当する機能の習得が伴うかなどの問題は興味深いテーマであり、実際にはその研究領域で成果を上げている研究は少なくない。日本語にもいくつかの研究が見られるが、教室内のみの学習を取り上げたものがほとんどである。

本節では、第２言語として日本語を自然習得した当該ブラジル人話者における動詞の習得及び使用状況の全体を総括的に把握した上で、注目されるべき点を浮き彫りにしたい。

ブラジル人話者における動詞の習得・使用を２つの観点から扱うこととする。ひとつは、場面ごとに見られる傾向、要するに職場場面とボランティア場面によって使用される動詞形式に偏りがあるか否かを調べることである。もうひとつは、インフォーマントの習得過程を縦断的に捉え、ボランティア場面からのインプットが多くなり、また同様の場面においての学習をつづけるにつれて、習得過程には変化が見られるかどうか、見られるとすれば、それはどのように表面化するかを明らかにすることである。

### 4.1.1. 先行研究と問題点の所在

本稿で課題になっている「自然習得」と「正式な学習」の相違点は、動詞の使用状況を通じて窺い知ることができるのではないかと思う。ここで、その相違点の一つとして「形式」(form)と「機能」(function)の習得の性質について考察することとする。

教室で体系的に教わった学習者は、ある文法形式とともにその文法形式が包む(包括する)概念及び機能をひとまとまりとして習得することが普通であろう。一方、第二言語を自然習得する際、習得される言語形式と同時に必ずしもその形式が働く機能が認識されるとは限らない。自然習得の場合、話者は置かれた状況から判断し、限られた言語能力でその状況に応じようとするが、学習とは異なり、教科書と教師からの指示や訂正がなく、ほぼ周囲のインプットからのみ第二言語の体系を帰納的に組み立てていく。やがて、習得は「形式」>「機能」という順で進む傾向が見られるわけである。このように、例えば、ある形式が複数の機能を持って使用されるといったその傾向は特定の目標言語に限定されず、第二言語の自然習得に関する先行研究にもすでに指摘されている。ここで参考にした先行研究の一つとして Klein (1993)に注目したい。この研究は Klein その他が英語、ドイツ語、フランス語、それぞれの言語を自然習得した移住者による、テンポラリティを表す方法の習得過程を明らかにしようとしたものである。その結果から述べると、目標言語が異なるとはいえ、それぞれの言語の習得過程に共通点が多く見られた。その中で、機能より形式が先に習得されること(form precedes function)がいずれのインフォーマントのデータにも観察された。例えば、英語において、習得のある段階では、テンスとアスペクトを表す形態素 ($V_0$ and V*ing*, $V_0$ and past tense, past tense and present perfect tense)の併用が見られたが、機能の区別はなかったという。

もう一つの共通点としては、Schumann(1987)が挙げた次のようなことがある。第2言語話者が習得のある段階までは文脈に頼り、文法形式より語用論的なストラテジーを多く使用することも注目された。Schumann は、次のように指摘する。

「temporal reference can be made by adverbials (now, tomorrow, always, prepositional phrases), serialization (the fixing of a temporal reference point and allowing the sequence

of utterances to reflect the actual temporal order of reported events), calendric reference (dates, days of the week, months, and numbers), and implicit reference (temporal reference inferred from a particular context or situation)」。

以上の研究で対象とされたインフォーマントは様々な言語的な背景を持ちながら、受け入れ先の言語を習得した際、もちろん個人差があったにも関わらず、著しく同じような傾向を見せた。また、言語的な背景という要素だけではなく、習得しようとする目標言語が異なっていても、習得過程には共通点が見られた。そこで、日本語の習得過程にも同様の特徴を見つけだすことが出来るとすれば、言語を問わず、第二言語習得の過程に普遍的な要素が存在しているということができるであろう。

具体的なデータ分析に入る前に、再び次のことに注意されたい。それは、ここで個人差及び第１言語からの影響を考慮に入れながら、話者の中間言語をひとつの体系として捉え、言語習得において普遍的と呼ばれる特徴について詳しく述べていうことである。すなわち、話者の母語を無視するわけではないが、それを重視しすぎないこととするわけである。

### 4.1.2. 分析の進め方

「職場内」と「職場外」の場面に分け、定期的にそれぞれの場面における、ブラジル人話者(BI, BA, BM)と本人話者との自由会話の録音文字化資料を分析のデータとした。会話に過去の出来事も話題にされたが、非過去に位置づけられる話題は比較的に少なかった。

再びインフォーマントの属性を簡略に振り返ってみる。BI と BA は、来日後の自然習得とともに、ボランティアの日本語教室での学習が録音の第一回目の時点で数ヶ月間に渡っていた。BM は、同じ日本語教室で学習しはじめたところで調査を実施したが、その後、BM が日本語教室に通えなくなったので、学習は現在中断されている。

さらに、ここでは、以上の３名のインフォーマントにおけるデータと対比するために、調査者が予備調査の段階で録音した、一切学習せずに日本語を自然習得した

BN 話者の会話も分析のデータとして併せて示したい。BN は非日系の 40 才の男性であり、滞日期間が４年間にもなっている。来日後大阪市内の工場で働いており、BM と同様に、職場以外の場で日本語を使用することがほとんどない。ただし、BN は BM と異なり、BN は来日以前日本語のインプットが全くなく、自然習得が完全に来日以降に行われた（第２章表　参照）。

「職場外」の場面に参加した日本語母語話者は、JKe 以外は全員がボランティア日本語教室のメンバーである。また、「職場内」の JH が BA に直接かかわっている上司の班長であり、JC はブラジル人話者の同僚である。

まず、次のような点を中心に、分析を進めたいと思う。第１に、第２言語話者の談話には動詞が出現すべき文脈の中で出現するかどうか、また出現するとすれば、使用される動詞の形式を全面的に見渡した上で、文脈によって、形式と機能との関係どうなっているかという点である。

### 4.1.3. 動詞の出現

ここでは、３名のインフォーマントが使用した動詞の形式に焦点を当てるが、まずその形式の出現・非出現を調べる必要があるであろう。そこで、動詞が出現する文脈を、義務的な文脈と、任意的な文脈に分けることとする。前者は動詞が欠かせない要素となっている環境であり、後者は動詞が出現し得る環境ではあるが、必ずしも出現しなければならないわけではない。

まず、義務的な文脈だと認めた基準は次のような場合であると思われる。

(I) 動詞が脱落すると、発話の意味が曖昧になる場合。

(1) [ボ　BA-JK]

JK:日本、厳しいですね。働きすぎと（はい）よく（はい）
　言われますね。

BA: だから、今いい生活が$\underline{\phi}$、な。

(II) 動詞の脱落によって、文が不自然になる場合。直接話法や引用の文脈で用いられる「という」のような伝達動詞の脱落がこのケースに当てはまると思われる。

(2) [ボ　BI-JO(1)　友達が日本語教室に行くように誘った話]

BI:(...) で、来週の、その、その時、来週に（ん）あの、「一緒に行きましょうか」φ、「あ、僕は行きましょうか」φ、それからずっと

(III) 構文に支障がある場合。第２言語話者における中間言語の統合的構造がまだ発達していないため、このような脱落が見られるのであると考えられる。この場合、話者は「名詞並列型」の文を生産することにとどまる。この場合は、動詞だけではなく、助詞も脱落することが頻繁に見られる。

(3) [ボ BM-JY(2)]

E（調査者）：あ、おじいさんとおばあさんに＝会ったこと＝

BM:＝おじ＝、おじいちゃん、おばあさん、今、ブラジル φ [おじいさんとおばあさんは今ブラジルにいる]

JY: (笑) なんや、すれちがってるやつね（ああ、はあ）(JY、笑いながら) せっかくＭさん日本にいるのにな。

任意的だと思われた動詞の脱落は次のような基準に基づく。

(i) 話し手自身、もしくは話し相手の直前の発話でによって、当該の発話の意味が明確になった場合、動詞を省略することは多い。特に、対話場面では、珍しいことではない。こうした場合は、動詞が脱落しても、発話の意味が充分理解でき、むしろその方が自然だと思われるのであろう。

(4) [ボ　BI-JY]

BI: コンピューターの基盤つくります。

JY: はい。あっ、コンピューターの基盤。

BI:全部 φ。(はい) コンピューター（はい)、テレビ（はい)、ビデオ φ。

(5) [職　BI-JC(1)]

JC: 毎日シャンプーしてる＋

BI: 毎日φ

(ii) 名詞文、形容詞文における助動詞「だ・です」、いわゆる copula の脱落。このような脱落は母語話者の発話にも頻繁に見られる。

(6) [職　BI-JC(1)]

JC: K ちゃん、ちょっと苦しい、ちゃうかなぁ。

BI: 苦しいφ＋

JC: うん。

(7) [ボ　BA-JY]

BA:でも、[交通ルール]厳しい方が安全φね。(...)やっぱりブラジルは、あの、道に、あの、左方向で走って＝るでしょ＝（＝はい＝はい）日本は右φ。

上の項目のうち、義務文脈の(I)、(II)、(III)と、任意文脈の(ii)について、次節により詳しく述べることとする。まず、表～表では、各インフォーマントの発話に見られた動詞の出現率を場面ごとに、また調査段階ごとに明示する。動詞が出現しなかったことを「φ」という記号で示す。

**表 4-1-3: BI における動詞の出現・非出現**

| 場面 | 動詞 | | | NP・AP＋Copula | | | | | V+Copula | 伝達動詞 | | Copula タ形 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 出 | φ | | 出 | | | φ | | 出 | 出 | φ | ダッタ | デシタ | φ | |
| | | 任 | 義 | ダ | デス | ヤ | 任 | 義 | | | | | | | |
| ボ BI-JO(1) | 83 | 8 | 4 | − | 8 | − | 33 | − | 4 | − | 7 | − | − | − | 147 |
| ボ BI-JY | 101 | 13 | 3 | − | 33 | − | 15 | − | 6 | − | − | − | − | − | 171 |
| 職 BI-JC(1) | 26 | 1 | − | − | 1 | − | 21 | − | − | − | 1 | − | − | − | 50 |
| ボ BI-JO(2) | 86 | 11 | 3 | − | 14 | − | 23 | − | − | 7 | 4 | 6 | 1 | 2 | 157 |
| 職 BI-JC(2) | 38 | 5 | − | 1 | 3 | − | 35 | − | 1 | − | 3 | − | 1 | − | 87 |
| 合計 | 334 | 38 | 10 | 1 | 59 | − | 127 | − | 11 | 7 | 15 | 6 | 2 | 2 | 612 |

表 4-1-2: BA における動詞の出現・非出現

| 場面 | 動詞 | | | NP・AP＋Copula | | | | | V+Copula | 伝達動詞 | | Copula タ形 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 出 | φ | | 出 | | | φ | | 出 | 出 | φ | ダッタ | デシタ | φ | |
| | | 任 | 義 | ダ | デス | ヤ | 任 | 義 | | | | | | | |
| ボ BA-JK | 86 | − | 5 | 1 | 12 | − | 45 | − | 3 | − | − | − | − | − | 152 |
| 職 BA-JH | 41 | − | − | 2 | − | − | 22 | − | − | − | − | − | − | − | 65 |
| ボ BA-JY | 111 | 15 | 7 | 1 | 1 | 2 | 61 | − | 4 | 2 | 4 | − | − | − | 208 |
| 職 BA-JC | 82 | 11 | 2 | 2 | 4 | − | 54 | − | 4 | − | − | − | − | − | 159 |
| 合計 | 320 | 26 | 14 | 6 | 17 | 2 | 182 | − | 11 | 2 | 4 | − | − | − | 584 |

表 4-1-3: BM における動詞の出現・非出現

| 場面 | 動詞 | | | NP・AP＋Copula | | | | | V+Copula | 伝達動詞 | | Copula タ形 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 出 | φ | | 出 | | | φ | | 出 | 出 | φ | ダッタ | デシタ | φ | |
| | | 任 | 義 | ダ | デス | ヤ | 任 | 義 | | | | | | | |
| ボ BM-JY(1) | 45 | 11 | 6 | − | − | − | 16 | − | − | − | − | − | − | − | 78 |
| 職 BM-JD(1) | 68 | 1 | 4 | − | − | − | 7 | − | − | 2 | − | − | − | − | 82 |
| ボ BM-JY(2) | 54 | 16 | 5 | 1 | 3 | − | 15 | − | − | − | − | − | − | − | 94 |
| ボ BM-JT | 49 | 16 | 17 | 1 | 1 | − | 30 | − | − | − | − | − | − | − | 114 |
| 職 BM-JD(2) | 108 | 4 | 3 | 1 | − | 1 | 28 | 2 | − | − | − | − | − | − | 147 |
| 合計 | 324 | 48 | 35 | 3 | 4 | 1 | 96 | 2 | − | 2 | − | − | − | − | 515 |

### 4.1.3.1. 曖昧さを及ぼす動詞の脱落とその原因

この場合は次のような２原因が動詞の脱落に直接関与していることが分かった。１つ目は動詞の未習得であり、２つ目は動詞を思い出さないことである。後者は母語話者の発話にも見られる現象である。語彙をすぐに思い出せなかったり、適切な表現を思いつかない理由で、発話を完成させないことがしばしばあるであろう。非母語話者の場合は、どちらかが原因になるかが判断しにくいが、いずれの原因にせよ、話者の発話が文法的とは認められるものの、語彙不足のため、意味が曖昧になるのである。

(8) [ボ　BI-JO(1)どのようなきっかけで日本語教室に通いはじめたかという質問への答]

BI: 「行くかなぁ、行くかなぁ」、で、６ヶ月φ

(9) [ボ　BM-JT]

JT: 店＋

BM: うん、店（＝ああ、店＝）いろんなものをφ＝

文脈から推測すると、(8)では、BI はこの位置に「日本語教室に通うようになるまで６ヶ月過ぎた」とう意味で、「過ぎた」という動詞を使用するつもりでいただろうが、「過ぎた」以外の動詞が絶対用いられないとは断定できない。(9) では、BM は「ブラジルで持っていたお店はいろいろなものを売っていた」、つまり「売る」という動詞を用いるはずであった。

(10) [ボ　[BA-JY]

JY:そう、そう。で、そこ、駐車場なか、いつも入れない（ああ）そうすると、あの一、わざ、=わざ=

BA: =バイク=はどこでもφ（笑）

JY:そう、そう、あの、=プラザ=（=うん=）まで行ってね、車、うん、止めてこないといけ=ないし=（=うん=）。うん。

BA: バイクはどこでもφ

BA の場合、同じ発話の同じ環境で２回も動詞の脱落が見られる。ここでの脱落は単に語彙を思い出さなかったことに原因があるかもしれないが、動詞の不使用は形式の未習得による可能性も推測される。要するに、コンテクストから言うと、「止める」の可能形「とめられる」が予想できるが、BA がここで発話を完成させなかったのは可能形を習得していないからであると考えられる。該当の会話を含め、BA のデータには可能形が全く見られないと言うわけではないが、出現した可能形はすべて五段活用動詞にあたるものである。「とめる」のような一段活用動詞の可能形は見あたらない。

### 4.1.3.2. 伝達動詞の脱落 — 伝達表現の習得

会話の中で話し手自身や第３者の発話を話し相手に伝える場合は、直接話法と間接話法のどちらかを用いることができる。直接話法を用いると、引用に伴う「と言う、と聞く」など、「と」が前接されるいわゆる伝達動詞が使用される。ブラジル人話者の談話において、こうした伝達動詞の脱落にも注目したい。

ブラジル人話者の発話に見られる伝達動詞の脱落は伝達の表現力と深くかかわっていると思われる。以下、その習得順を追っていきたい。なお、出来事を伝達する文脈がBIとBAの談話にのみ見られたので、２名のデータから用例を取り上げる。

まず、Iのデータを調べると、伝達動詞の脱落が特に録音調査の第１回目に多く見られた。

(11) [ボ　BI-JO(1) 例(1)]

BI:で、Aは僕に、あの、僕、言ったね、最初から。(ん、ん、ん) あの、「日本語学校ありますか」。「あ、僕は日本語学校に」φ。「どこの」,「あ、僕と一緒に行きましょうな」φ (ん、ん、ん) で、それから、その話から、「行くかな、行くかな、行くかな」で、６ヶ月 (笑)

JO: そうようね。そんな初めからいなかったものね。

例(11)では、すくなくともφ印が示している位置に伝達動詞が入るべきだと思われる。BIはこのような、自分とかかわりのある過去の出来事を伝える場合、登場人物の発言をそのまま再現し、発言の引用を動詞でつなぐことが見られない。

他に、次のような例もあった。

(12) [ボ　BI-JO(1)]

JO: でも、そう言ってたよ。

BI: 違うよ。

JO: Bはやかましい。

BI:めずらしいよ、それ。めずらしい。誰も聞いたら、P、やかましいよφ。　[聞いてみたら、だれでもPがやかましいというよ]

上の例(12)では、話し手は自分自身が参加した出来事を語るのではなく、他人が一般的に言うある情報を話し相手に伝えているが、ここでも「という」が使用されるべきであろう。このように、調査の第１回目には、伝達動詞がすべての文脈で脱落した。

８ヶ月後行った録音調査の最後の段階にも以上の例(13)と例(14)と同様の文脈が再び BI と JO との会話に見られた。この段階においても、出来事を語る文脈ではまだ伝達動詞が出現していなかった。

(13) [ボ　BI-JO(2)]

BI: (...) 注文して、あと、あの「Uさん、僕知ってるか、誰」φ「ああ、知ってる、あああ、もう、一緒に食事しましょう。友達いるから」φ「はい、しましょう」φ。いろいろ話しました。

一方、他人が言った情報を話し相手に伝える文脈では、２つのパターンが見られた。１つは、情報内容の後に「と」が伴わない「いう」動詞の使用、もう１つは「と」が伴う「いう」か「いう」が省略された「と」のみのどちらかの使用である。

(14) [職　BI-JO(2)]

BI: あるφゆった。友達。(...)会社の友達がタコベルがありますφゆった。
[「あります」と「ゆった」の間にポーズがない]

(15) [ボ　BI-JO(2): 地震について]

BI: その人が、それは（ｘｘ）ていってるの。皆、偉い人、賢い人。prevision, prevision.

JO: あっ、ん、予言＋

（中略）

BI: あの、神戸の地震、もっと大きい。

[神戸の地震よりもっと大きな地震]

JO: えっ、どこに＋

BI: たぶんね、東京って（中略）東京はすごい危ないって

以上の例で見られるように、「φφ→φいう→と（いう）」の順で伝達動詞の習得が進んでいるようであるが、この段階では３つの変項とも出現し、まだ揺れが見られる。さらに、自分と直接かかわった出来事や事象について語る文脈であるか、他人が言った情報を伝える文脈であるかによって、使用する変項が異なる。前者は、「φφ」が用いられ、後者は「φいう」または「と（いう）」が用いられる傾向が見られた。全体的に言えば、伝達動詞の出現頻度が増えつつあり、BI の日本語の文構造がより複雑化さしていることが言えるのだろう。

BA のデータを分析したところ、録音調査の最後の段階(BA-JY)にのみ伝達情報が出現する文脈があった。BI と同様に伝達動詞の非出現と出現との揺れが見られた。ただし、BI とは異なり、BA のデータには「φ」と「と（いう）」、２つの変項がのみ使用された。「という」が使用されたいずれの場合、「いう」が省略された。

(16) ［ボ　BA-JY］

BA:(...)右、左、確認して下さい＝とか＝（＝うん＝）左、右は<u>だめって</u>。

#### 4.1.3.3.「名詞並列型」文

話者は動詞形式そのものを習得していても、中間言語の統語的構造がまだ発達していないため、動詞が出現しない「名詞並列型」文を生産することにとどまっている。これは自然習得の初期における最も典型的な特徴の１つとみなされ、中間言語が目標言語に近付いていくにつれ、このような構造が見られなくなる。本稿の対象となっている３名のブラジル人話者のうち、BM の談話にのみこの特徴が残存しており、この点において彼の言語体系が化石化していると考えられる。

(17) ［ボ　BM-JY(1)］

JY:ああ、弁当買うね。弁当買うっていゆって、あの、朝から、朝、昼、晩とある。さん、三食あるでしょ、食事は。

BM: あ、夜だけ。［夜だけにお弁当を買う］

JY: ああ、<u>夜だけ</u>。ほんと、で、えっ、朝と昼は＋

BM: お昼、会社[お昼は、会社で食べる]

JY: うん、ああ。

BM: 朝、パン。[朝は、パンを食べる]

この傾向は会話録音の次の段階に残り続け、BM の動詞使用には際立つ変化が見られなかった。

(18) [ボ　BM-JY(2)　最初の録音から８ヶ月後]

JY: お酒飲めない人は＋どうすんの。

BM: いや、ジュース [ジュースを飲む]

JY: ジュース。ジュース飲む。(笑)

(19) [ボ　BM-JT　最初の録音から８ヶ月後]

JKe: ああ、そうですか。ブラジルでは働いてたんですか。

BM: 店、ブラジル。[ブラジルでは、お店をやっていました]

前節の例(3)と合わせて、以上の(17)から(19)までの用例から、「名詞並列型」文が続いている。これらの例では、話者が述語の最低限の情報しか提供していないということである。例(3)と(19)には動詞がなくても、文脈から発話の時間の位置づけが明確になり、時間の流れの中でその発話を位置づけることができる。それは、BM がその位置づけを明確にするためには副詞的な補語を使用しているからと思われる。(19)では、場所を表す副詞的な補語が使用されているが、JT の前の発話を含む文脈から、場所とともにテンスも表していることがわかる。その発話は過去にしか位置づけることができないのであろう。

(3') おじいちゃんとおばあさん、今　　ブラジル

↓　　↓

(時間)副詞　場所(副詞的な補語)

(19') ブラジルでは働いてたんですか。

述語（テイタ形が過去の事柄を指していることを明示する）

店、ブラジル

（場所）副詞的な補語

これまでの例でわかるように、こうした「名詞並列型」文は完全に文脈に依存しており、文脈から文の意味が推測できるのである。そこで、語用論的な観点から述べると、最低限の情報しか含んでいないこのような発話は話し相手が求めている「新情報」をのみ伝える。統語的には構文が成立していないが、コミュニケーションには支障を来すことが少ないと言えるであろう。(21)のように、付いてくるはずの動詞がすでに話し相手の発話に出現した場合があるので、BM の発話に再びその動詞が現れなくても、意味が充分に通じる。BM の発話にしばしば見られたこの特徴は第 1 言語習得過程にも観察できるという(Givón, 1985)。Givón によると、談話の「pragmatic mode」と「syntactic mode」が存在しており、言語習得過程においては、「pragmatic mode」が「syntactic mode」に先立ち、習得が発達するにつれ、syntactic mode に入れ替えていくことになる。それぞれのモードには次のような特徴があると述べている。

| | pragmatic mode | syntactic mode | |
|---|---|---|---|
| (a) | 主題・命題構造 | 主語・述語構造 | |
| (b) | loose coordination | tight subordination | (Givón, 1985) |

例(3)、(17)、(19)で見られるように、BM が話し相手の質問に現れた主題を繰り返しており、「新情報」を命題として提供している。この説明に従って、(3)、(17)、(19)を分解するとすれば、次のようになる。

(17') ああ、夜だけ。ほんと、で、えっ、朝と昼は＋

主題

お昼　＋　会社

主題〈旧情報〉　命題〈新情報〉

(3") おじいちゃんとおばあさん + 今ブラジル

主題　　命題

〈新情報〉

(19") ブラジルでは + 働いてたんですか。

主題　　述語

店 + ブラジル

〈新情報〉　〈旧情報〉

命題？

### 4.1.3.4. Copulaの脱落と使用

出現が義務的だと思われる文脈で copula が脱落した例は BM の談話資料に２回、BI の談話資料に１回のみ現れた。いずれも名詞と言い止し文の「けど」の間に copula が脱落したものである。

(20) ［職　BM-JD(2)］

BM: うん。ずっと N φけど。［N は人名を指している］

(21) ［職　BI-JC(2)］

BI: おまえは独身φから、いいですよ。

例(20)(21)以外は、copula が脱落した文脈が任意的だと判断される（4.1.3.の例( )を参照)。さらに、このような脱落は母語話者の発話にもしばしば見られる。

本節は、脱落だけではなく、copula が出現した文脈に焦点を当てたい。各インフォーマントの談話に用いられた copula の２変項「だ」・「です」と、それに対応する「だった」・「でした」の使用状況を観察することによって、ブラジル人話者における copula の習得順が窺えるのではないかと思われ、以下、それらの出現に見られた特徴を考察したい。

「だ」・「です」の使用状況に迫ると、いずれのインフォーマントも「です」の方を圧倒的に使用していることがわかった。個別に見てみると、3名のうち、BAだけが録音調査の最初の段階から「だ」を用いていた。

(22) [ボ BA-JK]

BA: はい。今は同じだけど。

(23) [職　BA-JH]

JH: 自分で会わすんか、これは。

BA: 自動だけれども

BMは、録音の第1回目にどちらの変項も出現しなかったが、一方、BIは、copulaが出現した場合、「だ」のではなく、「です」が用いられた。この段階でBIのデータに見られた変項は「φ」か「です」のみであった。

[ボ　BI-JO(1)]

(24) JO: (...)割と、土曜日働いてる人、多いですね。

BI: 多いφよ。

(25) BI: あの、普通の名前ですけど。

(26) BI:ちょっと、あの、会社は難しいから、えーと、僕は、今週、夜勤ですけど。

(27) JO:(...)でも、私の聞いた話では、ブラジルの人はすごくあの、にぎやかで、よくしゃべる。

BI: そうです。そうです。

以上の例のように、「です」が出現した言語環境には偏りが見られた。名詞に後接した場合、「けど」がつく傾向があるように思われる。また、「そうです」のよ

うな固定表現も頻繁に用いられた。一方、形容詞文に関しては、「よ」が文末に用いられた場合、copula が脱落した。

BI と BM、双方とも、「だ」が調査の最後の段階になって初めて現れたが、その出現頻度は高くなかった（表を参照）。

(28) ［職　BI-JC(2)］

BI: おまえは独身φから、いいですよ。兄貴は家族だから

(29) ［ボ　BM-JY(2)］

BM: ピザと焼きそば好きだけど。

例(28)では、同じ言語環境（名詞 + φ/copula + から）で「φ」と「だ」が用いられた。この言語環境における「だ」の使用が規則的ではないが、「φ」から「だ」への移行が窺われるのではないかと思われる。BM の場合も、言語環境が異なるとは言え、「φ」と「だ」の混用が見られた（例と例）。

動詞に copula が伴った場合は、BI、BA、２名のインフォーマントとも録音調査の最初の段階から「V + です」形式を最も多く用いた。この「V + です」形式はいずれの場面でも用いられ、さらに特定の言語環境に出現するとは限らない。BM のデータにはこの形式が出現しなかった。

(30) ［ボ　BI-JY］

JY: お父さんは＋

BI: お父さんいないです。

(31) ［職　BI-JC(2)］

BI: あるんですけども。

(32) ［ボ　BA-JY］

BA: 見てみたいです。

以上の考察に基づくと、ブラジル人話者における copula の習得順は「φ→です→だ」のようにまとめることができるであろう。そこで、なぜ「です」の習得が「だ」の習得に先立つのかという疑問が湧いてくる。周囲のインプットを考えると、説明できると思われる。ブラジル人が在住する滋賀県では関西弁に属する地元の方言が話されており、日本語教室に通う以前は「だ」に対応する関西弁変項「や」のインプットが圧倒的に多かった。職場におけるインプットはほとんど「や」にのみ限られており、「だ」の使用がまれである。しかしながら、ブラジル人話者の発話には「や」が非常に少なく、「や」の代わりに、copula φが最も見られる。インフォーマント(BA)へのインタビューより、「や」の使用が意図的であることがわかった。要するに、関西弁の「や」の使用によって、話し相手との心理的な距離を縮め、アコモデーションしようとするのである。ただし、このようなストラテジーは BA における使用にのみ明らかになった。

(33) [ボ　BA-JY]

JY: ほんま無茶無茶ゆうなぁ。

BA: 厳しいんやね。

ブラジル人による「や」の低い生産率は明らかになっていない。今後、追求調査が必要である。なお、日本語教室のボランティアと接しはじめてから、「です」および「だ」のインプットが多くなるが、前者は教科書とボランティアとの会話によるものであり、後者はボランティアとの会話だけによるものである。「だ」より「です」が先に習得される理由としては、教科書で教われ、授業場面で徹底的に多く使われていると考えられる。ここでも、正式な学習の影響が見られると言えるのであろう。

た形の「だった」と「でした」に関して言えば、出現し得る環境が少なかったものの、出現したほとんどの場合、「だった」が用いられた。

### 4.1.4. ブラジル人話者が使用した動詞の形式と機能

前節では動詞が脱落した文脈について論じたが、今度は動詞が出現した場合、どのような形式が使用されるか、またテンス・アスペクトを表すそれらの形式はいかに用いられているかなどを考察したいと思う。

使用された形式を調べるにあたり、中でも動詞形態素の習得実態を明らかにすることを目的とする。第２言語研究、とりわけ自然習得に関する研究においては、動詞形態素の習得が中心的な位置を占めてきた。第２言語習得の過程をピジン化との類推でとらえる Schumann(1987) など、数々の研究者が、ピジンとの共通点として動詞形態素（動詞体系）の簡略化をあげている。こうした簡略化は習得の初期における特徴であり、習得が進むにつれ、この特徴が消えつつあり、習得者の動詞体系が目標言語のそれに近づいていくという。

本研究の対象となるブラジル人話者は非過去・過去を軸としてテンスを表す形態素をほぼ習得していると思われる。しかし、前節で述べた BM の場合と同様に、それぞれの中間言語体系が均質なものではなく、さらに個人差が多く見られ、初期の特徴が残存している場合もある。

以下、ボランティア場面からのインプット期間の長さと場面差を念頭に置きながら、各話者の動詞形態素の習得および使用状況を詳細に論じる。

#### 4.1.4.1. 場面ごとの動詞使用 — 動詞形式の分布

まず、非過去・過去に分け、場面ごとに、また段階的に使用された動詞形態素を、次の５つの表に示した。以下、それぞれの形式において、各インフォーマントの動詞使用における困難さや特徴を個別的に述べていくこととする。

表 4-2-1: BI - 場面ごとにおける動詞形式使用（非過去形）

| 場面 | 非過去 | φ | だ | です | んだ(のだ) | んです(のです) | ます | ない＋φ | ないです | ないのです | ません | へん | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ボ | BI-JO(1) | 21 | – | 1 | – | – | 18 | 10 | 3 | – | 1 | – | 54 |
| ボ | BI-JY | 15 | – | 1 | – | – | 39 | 5 | 4 | – | 4 | – | 68 |
| 職 | BI-JC(1) | 8 | – | – | – | – | 6 | 3 | – | – | – | 1 | 18 |
| ボ | BI-JO(2) | 23 | – | – | – | – | 14 | 8 | 1 | – | 3 | – | 49 |
| 職 | BI-JC(2) | 22 | – | – | – | 1 | 7 | 2 | 1 | – | 8 | – | 41 |
| | 合計 | 89 | – | 2 | – | 1 | 84 | 28 | 9 | – | 16 | 1 | 230 |

表 4-2-2: BI - 場面ごとにおける動詞形式使用　（過去形）

| 場面 | 過去 | た＋φ | たのだ | たのです | ました | なかった＋φ | なかったです | なかったのです | ませんでした | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ポ | BI-JO(1) | 8 | – | – | 4 | 1 | – | – | – | 13 |
| ポ | BI-JY | 4 | – | – | 4 | 1 | – | – | 1 | 10 |
| 職 | BI-JC(1) | 8 | – | – | 2 | – | – | – | – | 10 |
| ポ | BI-JO(2) | 8 | 1 | – | 12 | 4 | – | – | – | 25 |
| 職 | BI-JC(2) | 1 | – | – | – | 1 | – | – | – | 2 |
| | 合計 | 29 | 1 | – | 22 | 7 | – | – | 1 | 60 |

表 4-2-3: BA - 場面ごとにおける動詞形式の使用　（非過去形）

| 場面 | 非過去 | φ | だ | です | んだ(のだ) | んです(のです) | ます | ない＋φ | ないです | ないのです | ません | へん | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ポ | BA-JK | 21 | 1 | – | – | – | 13 | 13 | 4 | – | 5 | – | 57 |
| 職 | BA-JH | 13 | – | – | – | – | 1 | 6 | – | – | – | 2 | 22 |
| ポ | BA-JY | 22 | – | – | – | 3 | 4 | 15 | 1 | – | – | – | 45 |
| 職 | BA-JC | 25 | 1 | – | – | 3 | 1 | 7 | – | – | 2 | – | 39 |
| | 合計 | 81 | 2 | – | – | 6 | 19 | 41 | 5 | – | 7 | 2 | 163 |

表 4-2-4: BA - 場面ごとにおける動詞形式の使用　（過去形）

| 場面 | 過去 | た＋φ | たのだ | たのです | ました | なかった＋φ | なかったです | なかったのです | ませんでした | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ポ | BA-JK | 10 | – | – | 6 | – | – | – | – | 16 |
| 職 | BA-JH | 1 | – | – | – | – | – | – | – | 1 |
| ポ | BA-JY | 12 | – | – | – | 2 | – | – | – | 14 |
| 職 | BA-JC | 5 | – | 1 | 1 | – | – | – | – | 7 |
| | 合計 | 28 | – | 1 | 7 | 2 | – | – | – | 38 |

表 4-2-5: BM - 場面ごとにおける動詞形式の使用　（非過去形）

| 場面 | 非過去 | φ | だ | です | んだ(のだ) | んです(のです) | ます | ない＋φ | ないです | ないのです | ません | へん | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ポ | BM-JY(1) | 10 | – | – | – | – | 4 | 10 | – | – | 1 | – | 25 |
| 職 | BM-JD(1) | 25 | – | – | – | – | 3 | 15 | – | – | – | – | 43 |
| ポ | BM-JY(2) | 15 | 1 | – | – | – | 5 | 11 | – | – | 1 | – | 33 |
| ポ | BM-JT | 20 | – | – | – | – | 1 | 10 | – | – | – | – | 31 |
| 職 | BM-JD(2) | 50 | – | – | – | – | – | 25 | – | – | – | 1 | 76 |
| | 合計 | 120 | 1 | – | – | – | 13 | 71 | – | – | 2 | 1 | 208 |

表 4-2-6: BM - 場面ごとにおける動詞形式の使用 （過去形）

| 場面 | 過去 | た＋φ | たのだ | たのです | ました | なかった＋φ | なかったです | なかったのです | ませんでした | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ボ | BM-JY(1) | 8 | - | - | - | - | - | - | - | 8 |
| 職 | BM-JD(1) | 3 | - | - | - | - | - | - | - | 3 |
| ボ | BM-JY(2) | 9 | - | - | - | - | - | - | - | 9 |
| ボ | BM-JT | 10 | - | - | 1 | - | - | - | - | 11 |
| 職 | BM-JD(2) | 10 | - | - | - | - | - | - | - | 10 |
| | 合計 | 40 | - | - | 1 | - | - | - | - | 41 |

### 4.1.4.2. 非過去における「普通体」・「丁寧体」の使用

いずれの会話でも肯定形が出現し得る文脈が最も多く見られた。その中で、まず普通体の「V 基本形 ＋ φ」形式と「V 連用形 ＋ます」形式に焦点を当てたい。

「自然習得」から「正式な学習」への順で日本語と接してきた対象のブラジル人話者にとっては普通体の「V ＋ φ」が基本形式であると思われる。表　～　のデータがそれを裏付けているのである。３名のブラジル人話者は職場で日本語をインプットする時間が最も長く、さらにそのインプットには普通体が際立つ。しかし、BI と BA の場合は、ボランティア場面における「V 連用形 ＋　ます」の使用頻度が高く、「職場内」の一対一のインフォーマルな会話でも見られた。それは、ボランティアの日本語教室において、「V 連用形 ＋ ます」のインプットや生産が多くなることに起因すると考えられるであろう。

BI と BA に注目すると、場面によって、「V 基本形 ＋ φ」と「V 連用形 ＋ます」の使い分けが窺われる。例えば、同じボランティア場面でも話し相手によって「V 連用形 ＋　ます」の割合が増加し、また BA は、「職場内」場面と、「職場外」場面を境界線に、「V 基本形 ＋　φ」と「V 連用形 ＋　ます」を切り替えているようである。その切り替えの要因やパターン、また会話の中の丁寧体の機能などについては次節で詳しく述べることとする。

一方、BI と BA と比べ、１ヶ月間の短い学習期間の BM は、いずれの場面でも普通体が圧倒的に多く、出現した丁寧体（V 連用形 ＋　ます）には切り替えの意識が潜在してはいないようである。

図 4-1: BI- 動詞における「普通体」・「丁寧体」の場面ごとの分布

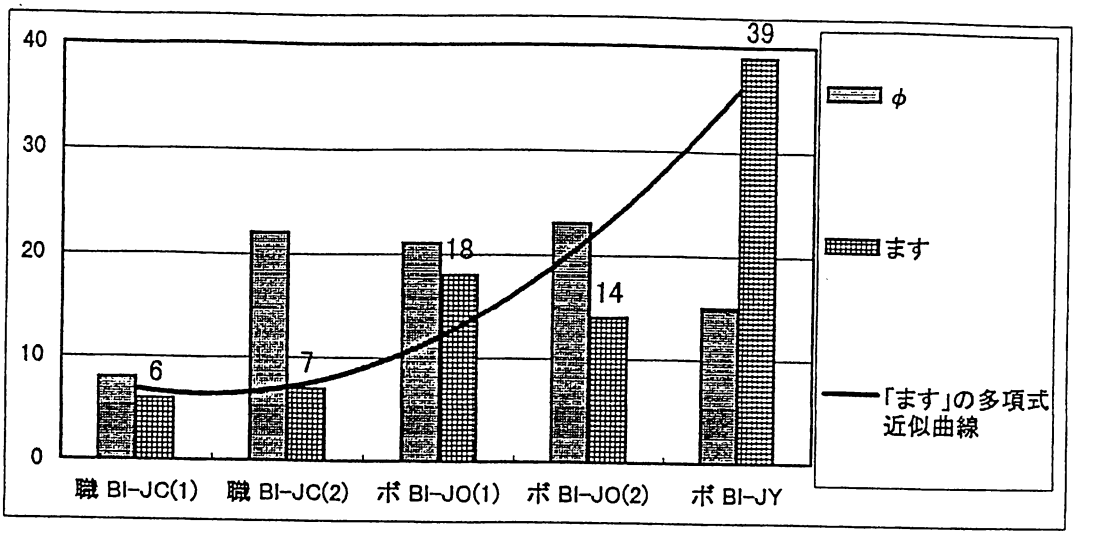



図 4-2: BA - 動詞における「普通体」・「丁寧体」の場面ごとの分布

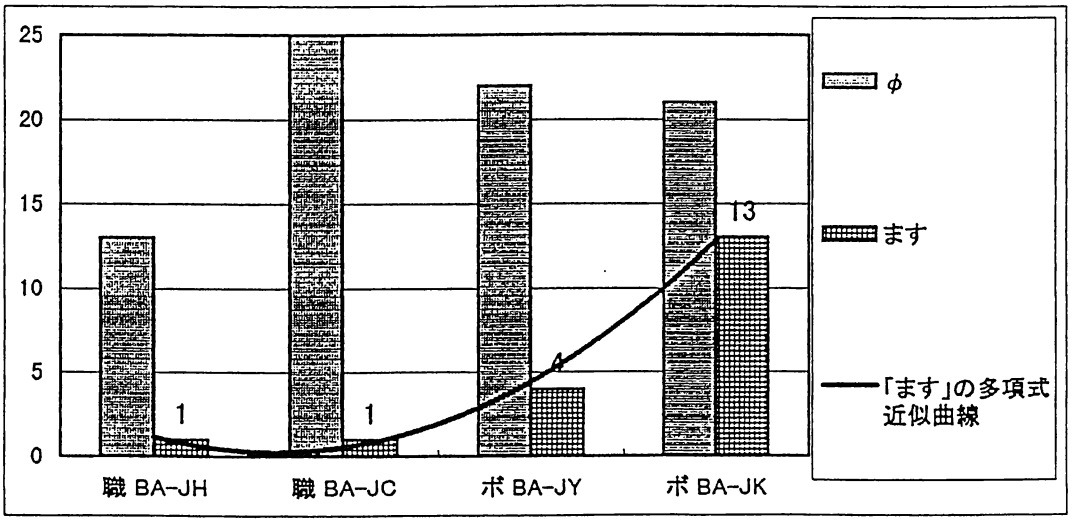
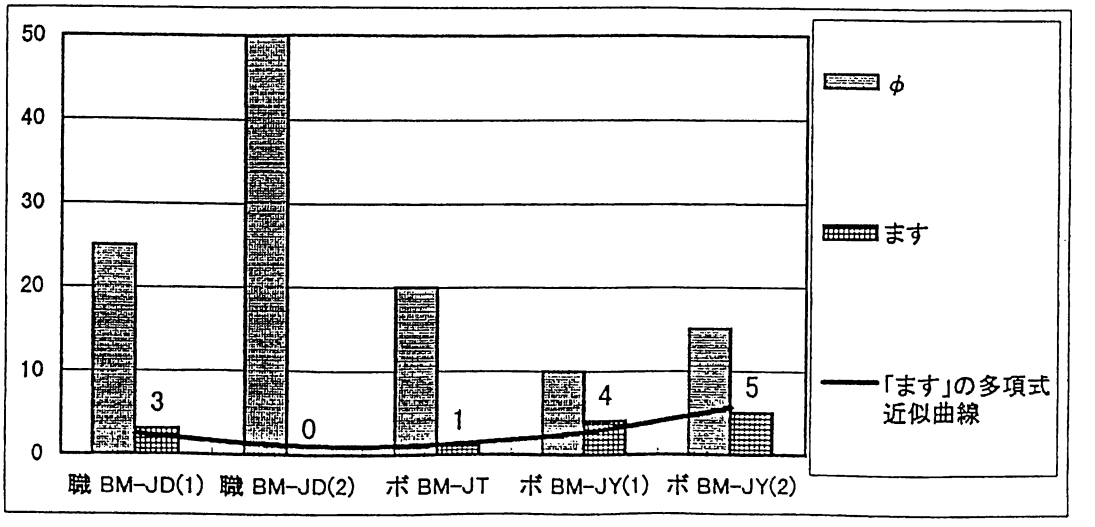



図 4-3: BM - 動詞における「普通体」・「丁寧体」の場面ごとの分布



否定形に関しては、次のような結果が得られた。否定形が出現し得る文脈では、「V 未然形ナイ ＋ φ」形式がいずれの場面、またいずれの段階でも最も多く使用された。 BI と BA の場合は、「V 連用形 ＋ ません」形式が特にボランティア場面で見られた。なお、話しことばでよく使用される「V 未然形ナイ ＋ 助動詞デス」が最初の録音段階でしばしば現れ、「V 連用形 ＋ません」より出現頻度が多かった。以下、例をあげながら、インフォーマントごとにデータを分析してみたい。

ブラジル人話者にとっては、肯定形の「V 基本形 ＋ φ」と同様に「V 未然形ナイ ＋ φ」が基盤となっている形式である。しかし、肯定形が出現した文脈では「V 連用形 ＋ ます」が多く使用されたが、その形式に対応する否定形の「V 連用形 ＋ ません」の出現頻度が比較的に低いものであった。要因としては、母語話者からの「V ナイ ＋ 助動詞デス」のインプットが多いため、その形式が優先されたことが考えられる。

BI と BA、いずれも「V 連用形 ＋ ません」を、主にボランティア場面で使用したので、普通体である「V ナイ ＋ φ」とのスタイルの差を意識しているとも言える。一方、BM が、肯定形の場合と同様に、ここでもこうした意識を示さなかった。

BI の第 1 段階の会話(BI-JO(1))において、「V 連用形 ＋ ません」が出現したのは「わかりません」という形式のみであり、しかも 1 回きりであった。 「V 未然形ナイ ＋ の（ん）＋ 助動詞デス」の中間形式と思われる「V ナイ ＋ 助動詞デス」は 4 回使用されたが、その 4 回のうちの 2 回は「けど」が後接した。

(34) [BI-JO(1) ボ]

BI:あのね、（ん）あの、僕たちの先生は<u>いないですけども</u>

(35) [BI-JO(1) ボ]

BI:(中略)普通の人はあまりなあ、よく<u>しゃべらないですけど</u>、（ん＝ん、ん＝）

＝わかりませ＝んなあ。　　（ボランティア場面）

「V 未然形ナイ ＋ 助動詞デス」は次の段階(BI-JY)でも使用されているが、この段階から「V 連用形 ＋ません」形式が増えてくる。ただし、異なり語を調べると、

４回中３回「知りません」という形式が出現した。要するに、回数は多くても、語種が少ないということである。第３段階の BI-JO(2)の会話では、「V ナイ ＋ です」が減少するが「V 連用形 ＋ ません」は増えない。基本形の「V ＋ φ」が最も多く用いられる形式である。

BA のデータでは、最初の録音段階、ボランティア場面の BA-JK のみに両形式が多く見られ、それ以降の段階ではほとんど「V 未然形ナイ ＋φ」のみが使用された。なお、いずれの用例でも「の（ん)」が脱落している。

最後に BM のデータに焦点を当てる。「V ＋ φ」が最も多く見られた形式であったが、「V 連用形 ＋ ます」も使用されている。そこで、BM は両形式を習得していることがわかる。ただし、両形式が含む、スタイル差のような語用論的な機能には気づいていないようである。特に、(36)と(37)で見られるように、「V 連用形 ＋ ます」は積極的に生産しなかったこと、言い換えれば、話し相手の直前の発話に使用された動詞を反復したことが少なくない。

(36)（ボ）[BM-JY(1)]

JY: テレビとかは＋

BM: なに＋

JY: テレビとかは見る、見ますか。

BM: ああ、見ます。

(37) [BM-JY(2)]

JY:ああいうパーティーは、もっとあった方がいいと。たくさんあった方が。あんまり、いつもはパーティーしませんか。

BM: いやー、しません。

さらに、「V 未然形ナイ ＋ φ」以外の形式では「V 連用形 ＋ ません」が２回見られたが、用例(37) で観察したように、その形式の生産も積極的ではないように思われる。

以上述べた「V＋φ」と「V 連用形 ＋ます」以外では、「V＋の（ん）だ・です」、またその中間形式「V ナイ ＋ です」の用例がいくつか取り上げたので、以下、日

本語習得における「のだ」の困難点について考察を試みる。

### 4.1.4.3. 「の（ん）だ・の（ん）です」の使用

「の（ん）だ・の（ん）です」を付加することによって発話時の話者の判断が現れ、用法が異なってくるが、こうした用法は一般的に第２言語話者にとって習得しにくいとみなされている。

ブラジル人話者の発話ではこの形式がどのように用いられているかを調べた結果、全体的には出現頻度が少なく、また録音調査の最後の段階になって、初めて出現した。

以下、各インフォーマントのデータに着目してみたい。

BI の全体のデータを見ると、録音調査の最初の段階には「V + の（ん）デス」の中間形式と思われる「V + デス」という形式が見られた。その形式は第１段階の BI-JO (1)、BI-JY、それぞれの会話で１回ずつ用いられた。

(38) [ボ　BI-JO(1)]

JO:しゃべるでしょう＋じゃ、やっぱり、恥ずかしい、日本語でしゃべるのは。

BI:じゃ、ま、そう。僕、家の、一緒に住んでるですから（あ、そうか）よくしゃべるな。

(39) [ボ　BI-JY]

JY: ええ、友達と一緒にボウリングとか

BI: ああ、名古屋、ちょっと＝遠い＝（＝うん＝）ですから

JY: このあたりは+

BI: ああ、たまに行くです。

JY: ほんと＋ええ。

否定形の「V ナイ + の（ん）です」に関しても、対応する中間形式「V ナイ +

です」が見られた。この形式が出現した文脈では、例(19)(20)で見られるように、言い止しの文に用いられる「けど」が後接されている。しかし、BI が学習しはじめて１年後の、録音調査の最後の段階で初めて「の」が用いられた。

(40) [職　BI-JC(2)]

JC: ブラジル料理、日本にないでしょう。

BI: ある。

JC: どこやん＋

BI:　レストラン。ブラジル料理

JC: ちゅう、中華料理あるね。

BI: あるんですけども。

さらに、ボランティア場面における録音調査の最後の段階には、「V ＋ のだ」形式が１回現われた。

(41) [ボ　BI-JO(2)]

BI: O さん、ずっと休みだったんだ(XX)

JO: そう。わたしね、仕事が忙しくて、[...]

上の例だけでは BI が「のだ・のです」を習得したとは断定しがたいが、「V ＋ んですけど」、また「V ＋ んだ」をひとまとまりの固定形式として認識している可能性があるように思われる。インフォーマントは「のだ」・「のです」を形式として用いても、いずれも１回しか出現しなかったため、その機能の習得について考察を進めることができない。

BA には BI と同様の習得順が見られる。また、否定形の「V ナイ ＋ のです」形式に関しても、中間形式が用いられている。まず、この中間形式の例を見てみよう。

(42) [ボ　BA-JKa]

BA: そうね。[ブラジルに]ずいぶんいないから、わからないですよ。

(43) [ボ　BA-JKa]

BA:[パソコンの]ハードは買いました。インストール、あまり知らないですよ。だって、使わないから。

いずれの発話でも、文末助詞の「よ」が伴っている。ここで、BI における「けど」の後接と似たようなパターンが見られるのではないかと思われる。ここでも「V ナイ ＋ です ＋ よ」が、強調する手段の固定形式として習得されたことがあり得るのである。

BA が「V ＋ の（ん）です」を初めて生産したのは、録音調査の最初の段階から１年５ヶ月後のことである。ただし、BI とは異なり、BA がその形式を使用する環境は多様であることがわかった。

(44) [ボ　BA-JY]

BA: (中略)車に乗って、(はい) すぐ走って

JY: はい、あ、＝それでいいんです＝

BA: ＝はい、問題なければ＝はい、免許とれるんです。

[断定文]

(45) [ボ　BA-JY]

JY:(中略) 烏丸の四条通りのところに（うん）ちょうど奥さんの、あの、絵をね、運びに行って、

BA: Y さん、結婚してるんですか（うん）あ、ほんと＋

[質問文]

(46) [職　BA-JC(1): BA が JC に借りたお金をまだ返せない理由を説明する]

BA:こないだ百円借りて、・・んで、恥ずかしくて、でちょっと今日はちょっと、財布を、忘れたんですけれど（笑）

[謝罪の導入文　言い止し]

(44)では JY の質問に対して、BA は応答し、その応答の中には BA 自身しか把握していない情報を JY に説明しようとする文脈なので、強調の手段として文末に「のです」を使用したと思われる。このように、(44)の例文は述べ立てとして捉えられるのであろう。一方、(45)は質問文であり、しかも JY の直前の発話の内容から予想できる情報（JY が結婚していること）を尋ねているため、ここでは「のです」の使用が適当だと判断される。さらに、(46 ) では「けれど」が後接されることによって、この発話は言い止しの文になり、また語用論的には、お金が返却できない理由を説明している文である。要するに、謝罪発話行為の一部として捉えることができるであろう。「のです」が複数の文脈に出現したが、その否定形にあたる「ないの（ん）です」は最後の段階になっても、用いられなかった。以前の段階に現れた「V ナイ ＋です ＋よ」がここでも見られる。

(47) ［ボ　BA-JY］

BA:（自動車免許について）いつからいつまでとか、その一、教習所の住所とか。

JY: ん、そんなん覚えてないやん、知ってるはず（ｘｘ）（笑）

BA: その、住所、ぜんぜん覚えてないですよ。

上述したように、こうした「V ナイ ＋です ＋よ」形は形式として「V ナイの（ん）です」の中間形式であり、語用論的な機能としては、強調する役割を担っているように思われる。なお、BM の談話資料には「のだ・のです」が一切出現しなかった。

上のような「の」が脱落した理由として次のようなことが考えられる。一つは、普段の会話で「の」が「ん」の形で用いられており、これは第２言語話者のブラジル人にとっては音声的に聞き取りにくい要素なのではないかと思われる。つまり、その「ん」が聞き取れなかったため、動詞の不定詞に直接「です」をつける結果になったのではないかと考えられる。もう一つは、ボランティアの教室で使われている教科書では「V ＋ のです」形式を用いる文型が項目として記載されていないことも関係しているであろう。このように、学習からのインプットがないわけである。従って、話者は周囲のインプットを整理や処理し、その形式が担う機能を自分自身の判断によって習得していく。

また、職場場面では普通体が最も多く使用されており、「V ＋ の（ん）です」のインプットがほとんどない。普通体に属している「V ＋ の（ん）だ」に関しては、職場内の上司や同僚の発話では関西方言が優先されているので、「V ＋ のだ」ではなく、「V ＋ ンヤ」の出現頻度が最も高い。このように、「V ＋ のだ」及び「V ＋ のです」のインプットが職場外のボランティアの話し相手との会話にのみ限定されているのである。

#### 4.1.4.4. 過去形における注目点

インフォーマントが参加した会話では、過去の出来事に関する話題が、非過去形と比べ多くないため、過去形の全体の出現頻度は高くはないが、注目すべき点がいくかあげられる。

ブラジル人話者にとっては、ベースになっている肯定過去形式はいわゆる「普通体」の「V ＋ 助動詞た」であり、実際にはこの形式がもっとも多く使用された。それに続いて、「丁寧体」の「V 連用形 ＋ ました」も見られ、BI と BA の場合は、その使用が話し相手に対する待遇の表現として捉えられているようである。

BI のデータに注目すると、最後の第３録音段階（学習をはじめてから１年後）のボランティア場面で「V 連用形 ＋ました」の使用が増えることに気づく。

また、「V た ＋ の（ん）です」形式は BA のデータにのみ、しかも最後の録音段階で現れた（例( )を参照)。その辞典の学習期間は２年６ヶ月にのぼっていた。

過去否定形については、BI のデータ以外は、ほとんど出現し得る環境がなかった。BA の場合は、「V 未然形 ＋ なかった」形式がボランティア場面の BA-JY でしか見られなかった。

BI は、ボランティア場面の JY との会話において「V 連用形 ＋ ませんでした」形式を１回使用した。

［ボ　BI-JY　学習期間: ７ヶ月間］

(48) JY: （中略）その時は、なにしてたん＋

BI: ああ、なにも<u>しませんでした</u>。

なお、同じ会話でも誤用と思われる語形を併用したことも観察された。

(49) JY:ふうん、ええ。すぐもど、戻りました。要するに、話しをしたと、遊ぶというのは（そう）そういうことね。ふーん。なんか、カラオケに行くとか。

BI: ああ、行きませんかった。

以上の例を見ると、この段階では過去否定を表す「丁寧体の助動詞」形式には揺れが存在すると言えるであろう。ただし、「V連用形 + ませんかった」は一回しか出現しなかったため、その点で、明確な結論には至りにくい。

### 4.1.4.5. 「非過去形」・「過去形」の併用

全体のデータには過去形が少いと述べたが、肯定・否定過去形が出現する文脈に非過去形が現れた用例も数カ所に見られる。それは、その時点でブラジル人話者がまだ過去を表す形式を認識していなかったというより、むしろそれらの形式を完全には習得していなかったと言うべきであろう。要するに、ブラジル人話者が過去を表すのに非過去形と過去形、両形式を併用しており、彼らの中間言語には過去形がまだ定着していないと考えられる。そして、指摘しなければならないもう１つの点は、当該のインフォーマントのように、自然習得が出発点だった人にとっては、「V + φ」と「V未然形 + ナイ」が無標(unmarked)の基本形であり、いずれのテンスもその無標識の形式で表しつづける傾向があるということである。ここで、自然習得のBNのデータから典型的な例に注目したい。

(50) [職 [BN-JNa]

BN:寿司、うん、あ、食べる。２年ぐらい食べる。（ん）すしね（ん）まあ、できません。

BNにインタビューを行った際、上の発話をポルトガル語で言ってもらうと、「日本に来て、２年間ぐらい寿司を食べていたが、今は食べられない」という意味だと判明した。正式な学習をはじめたとはいえ、このような特徴はBI、BA、BM、３名のインフォーマントの日本語にも存在しているように思われる。

さらに、BNは無標識の基本形で過去を表しているが、「２年ぐらい」という、期間を表す補語を用いることによって、テンポラリティを表しているということである。動詞のテンス形式が適当ではない場合も、このように、時間副詞、時間的な補語などを使用し、テンポラリティを明らかにしようとする方法が、この段階の中間言語にはよく見られる特徴である。

以下、BI、BA、BMのデータからも動詞の基本形で過去を表している用例を抽出した。

(51) [ボ　BI-JY　学習期間: ７ヶ月間]

BI: (中略) [お正月に]ああ、大体、浜松に行った。

JY: ああ、浜松に行った。浜松って、なにがあるのかなあ＋

BI: ああ、お母さんがいます。

JY: ああ、お母さんがいますね。

BI: もう、もうブラジルに帰った。

(52) BI:えーと、ここの、日本（ん)、あ、来た時に（ん)、まだ友達いないです、(ん) Oの友達。

いずれの用例でも文脈から発話を時間的に位置づけることができる。(51)では、最後に「帰った」、(52) では従属節の「来た時」が時間の位置づけを印している。

(53) [ボ　BA-JK　学習期間: １年間]

JK: サッカーそうですね。

BA:日本に、1991 年はサッカー、ちょっとめずらしい。テレビはあまり出てない。今、ほんまにすごいなあ。皆、やってる。

(54) JK: ブラジルの番組というのはブラジルのテレビでやってる番組ですか。

BA: はい、はい。

JK: えええ。そういうのがあるんですか。

BA:ビデオから。ブラジルの人でそんなビデオ、レンタルする。昔は全然ないですね。(ああ) 日本の番組だけ。わからない。だから...

JK: 来た時は、[寒さ]大丈夫でしたか。

BA: 少し怖かったなあ。

JK: 怖かった+

BA: どんな寒く、(ああ) わからない。寒い、大丈夫。

(53) でも現在・過去の区別は、動詞ではなく、「1991 年」と副詞の「今」によってわかるようになっている。同様に、(54)では「昔」があることによって、BA が過去の事柄について話していることがわかる。

BM の (55) では、BM が「大阪に住んでいた頃、日本人の友達がいた」ということがすぐには話し相手に伝わず、その後の発話で時間の位置づけが明確になっている。

(55) [ボ BM-JY 学習期間: 1ヶ月間]

JY:(中略) [2年前のことについて話している]大阪の時は、日本人の友達とかは+

BM: ああ (ん)、います。

JY: で、その人とは今も会いますか。

BM: 今、会いません。

以上の用例において1つの共通点が見いだせる。それは、動詞の形式上、テンポラリティが標識されていないにもかかわらず、文脈の何らかの要素で発話のテンスがわかることである。

また、習得順について言えば、動詞の基本形 (V ～ル・ナイ) のインプットが圧倒的に多く、第2言語習得者は、習得の最初の段階で、基本形を使って過去形を表し、そして、その次の段階では、過去形が出現する文脈で非過去・過去の両形式を

併用するようになる。一般には、目標言語に近づけば近づくほど過去形（V ～タ・ナカッタ）の使用が増えてくることが予想されるが、第２言語話者は必ずしも目標言語と一致するようになるとは限らないのである。

### 4.1.5. 可能形の習得状況

録音調査の最初の段階で動詞の可能形は次のような形式で現れた。BM は可能形積極的に生産していないが、理解はしていると思われる。

(56) ［ボ［BI-JY］

JY: えっ、１週間まとめて、休みはとれへんの＋

BI: ぜんぜんとれない。

(57) ［ボ［BM-JY (1)］

JY: ばりばりの大阪弁（そうそう）ん、使える＋

BM: まあ、あまり使えない。

(58) ［ボ　BM-JY (2)］

JY: えー、船はおっきい船ですか。

BM: うん、おっきい。

JY: ん。で、それは、のれるん＝です＝

BM: ＝のれる＝

(59) ［ボ　BM-JT］

JT: 日本だったら、買えますよね。

BM: ん、買えます。

可能形のプロト形式としては可能動詞の「できる」と、能力動詞の「わかる」があげられる。日常会話でも多く使用されており、完全には可能形を使いこなせない

第２言語話者は可能や能力を表す文脈においてそれらの動詞を代償形式として用いる傾向があるようである。自然習得の初期にある BN のデータからそれを窺い知ることができる。BN は２回も「食べられない」という動詞の代わりに「できる」を用いている。

(60) [ボ　BN-J]

BN: [オイスター]おいしい＋

JU: うん。グッド。ほんまにおいしいのに。

BN: Never, never, never.

JU: ネバー＋そう＋えええ。

BN: できません。[オイスターが食べられません]

(61) BN:寿司、うん、あ、食べる。２年ぐらい食べる。[２年間ぐらい食べていた]（ん）寿司ね。（ん）まあ、できません。

JU: たべへん。

BN: たべ、できません。[今は、寿司が食べられない]

BA に対する第１回目の録音調査の時点では、上述のような傾向は見られず、可能形がまだ定着していないようである。その段階では、可能形が使用されているものの、その形式の意味が理解されていないようである。要するに、可能形が出現しても、その形式が単に基本形と同じ機能で用いられているわけである。

(62) [ボ　[BA-JK]

JK: （中略）会社の上の人ね、友達と同じようにしゃべれないでしょう＋

BA: 同じようにしゃべれる。

JK: あっ、しゃべれますか。（はい）そうなんですか。

BA: 同じように。はい。上の人としゃべれないから。

JK : あっ、しゃべれないんですか。

BA: はい。上の人、あまりしゃべれない。

以上の「しゃべれない」の意味についてインフォーマントに確認したところ、「上の人としゃべれない」は、「しゃべらない」あるいは「しゃべるチャンスがない」という意味において可能形を使用したという。ここでは、BA は話し相手が用いた形式をそのまま受けて、使用したのだと思われる。

さらに、可能形が現れるべき文脈で基本形が使用されたケースもあった。

(63) JK: 弟さんは日本語はできるんですか。

BA:うん、できる。できます。ブラジルで勉強してから、(ん、はい) 会話はすこしできる。日本に来てから、私よりもっと<u>しゃべる</u>。[しゃべれるようになった]

しかしながら、1年6ヶ月後のボランティア場面と職場場面、双方の場面におけるどちらの会話でも、上のような特徴は一切見られず、可能形を自ら生産するようになったことが観察できた。

(64) [ボ　BA-JY]

BA: (中略) 問題なければ、はい、免許<u>とれる</u>んです。

(65) [職　BA-JC]

JC: ちょっと気分が悪い。

BA: <u>食べれる</u>+

JC: いや、今度なんやな。ん+

BA: ケイク　[ケーキ]

### 4.1.6. まとめ

本節ではブラジル人話者の動詞の習得・使用状況を全体的に見わたしてきた。話者によって異なる特徴があるとは言え、習得過程および使用上の共通点が多く観察された。データの分析から次のような点が明らかになった。

①自然習得の初期段階では、テンポラリティの表し方が動詞のテンス・アスペクトによって文法化されるとは限らない。動詞の脱落、名詞を並列する構文が、特にBMの発話に多く現れた。こうした発話は基本的に文脈に頼っており、前後の文脈からその発話の時間的な位置づけがわかるわけである。

②習得の早い段階から「v ル形 + φ」と「V未然形 + ナイ」が基本形としてインプットされ、ブラジル人話者は過去の出来事もこれらの形式を用いて表す傾向が全体的に多少う見られた。学習が進むにつれ、話者はこれらの形式を「Vタ形 + φ」と「V未然形 +ナカッタ」に入れ替えるようになる。

③ Copula（「だ・です」、「だった・でした」の習得が遅れる傾向が見られた。非過去の場合は、「です」＞「だ」という順で行われる。

④「Vル形 + （の）（ん）です」及び「可能形」は、BAが参加した最後の録音段階の会話で初めて出現した。学習しはじめてから、２年６ヶ月後のことであった。

⑤場面ごとの使用形式に関しては、ボランティア場面と比べて、職場場面における過去の出来事についての話題が少ない。この傾向は「仕事を話題にする」場面(BA-JH、BA-JC)において最も顕著である。

⑥ BI と BA の場合、学習の時間的な長さによって動詞の実態に変化が見られたと言えるが、BM のデータの場合では使用形式の変化がなく、一語名詞文や名詞の並列文のような、習得の初期に現れる特徴がつづけて用いられている。

## 4.2. モダリティ形式の使用実態

母語で話す時は、話し手が単に情報を伝えるのではなく、その情報に対する判断、発話時の心境や話し相手への何らかの働きかけと配慮を示す要素を発話に含める。これらの要素はモダリティ形式として知られている。この節では、ブラジル人話者が使用するモダリティ形式の用法と機能を探ることを目的とする。

### 4.2.1. モダリティ表現の習得に関する研究の重要性

モダリティが第２言語習得研究の課題として最近まで充分に注目されなかった理

由の一つは、テンス、アスペクト、みとめ方などの文法カテゴリーのように述語の中核的な意味を担わないと考えられたからであろう。ただし、第 2 言語においても円滑なコミュニケーションを達成するためにはモダリティ表現が必要であることは言うまでもない。そして、第 2 言語話者自身が発話するたびに、習得の初期からモダリティ形式を用いることが以下のデータから検証できる。ところが、多くの場合、第 2 言語話者が使用するモダリティ形式の用法と種類は母語話者のそれと異なるため、母語話者にあてはまる使用規則が必ずしも第 2 言語話者の中間言語体系に適用されるとは限らない。それゆえ、第 2 言語話者の中間言語体系以内にモダリティ形式の使用に関する機能を探り、検討すべきである。

ヨーロッパ諸言語におけるモダリティ表現の習得を調べた研究としては、Dittmar (1993) と Stoffel & Véronique (1993) があげられる。これらの研究は目標言語を正式に学習していない外国人移住者の習得過程を追究したことにおいて先駆的である。

日本語において、モダリティ体系やモダリティの表し方を探求した研究が盛んになってきたものの、未解明な点も多数残存しているようである。従って、第 2 言語としての日本語におけるモダリティ形式とその用法の習得状況における研究もこれからの大きな課題として残っている。これまでの研究は、教室で学んだ学習者を対象としたものがほとんどである。その中で、終助詞、とりわけ「ね」に焦点を当てたものが際だつ (大曽, 1986; Sawyer, 1992; 伊豆原英子, 1993 尾崎、1996)。それは、「ね」が終助詞の中でも最も頻繁に会話に現れ、会話に不可欠な要素であるからだと考えられる。

### 4. 2. 2. 本稿で扱うモダリティ形式の性質と分類

仁田 (1991) によると、日本語のモダリティは「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」との 2 種に分けることができる。前者は発話時における話し手の事態に対する把握の仕方を表し、後者は発話時における話し手の発話・伝達態度を表すとする。本節では、仁田氏の分類を参考にし、ブラジル人話者の発話に現れたモダリティ形式を考察する。ただし、仁田氏が名称した「言表事態めあてのモダリティ」がカバーする表現は、以下「命題に関わるモダリティ」と呼ぶこととする。

上の分類に従えば、ブラジル人の発話に現れたモダティ形式の中で、「発話・伝達モダリティ」形式の出現が調査の最初の段階から見られ、その出現率が「命題にかかわるモダリティ」形式より高いことがわかった。その理由には２つが考えられる。１つ目は、仁田が述べる発話・伝達モダリティは「言表事態めあてのモダリティを包み込む形で存在している」ということから第２言語話者にとってそれらの形式が最も際立ち、習得しやすいものなのであろう。要するに、文末の位置にある形式がモダリティ形式の中でも、習得の順としては優先的であるのではないかと思われる。２つ目は、「発話・伝達モダリティ」は発話時の話し手の態度を示しながら、相手に働きかける役割を果たすものであるため、第２言語話者は習得の初期からそれを認識し、使用する必要性を実感するのであろう。

なお、仁田の「発話・伝達のモダリティ」という用語には益岡(1991)が呼ぶ「伝達態度のモダリティ」が相応していると思われる。益岡は、非対話文・対話文の２項対立について述べる際、対話文を特徴づけるモダリティを「伝達態度のモダリティ」と呼び、「よ」と「ね」をこうした「伝達態度のモダリティ」の代表形式とする。今回分析の対象となったブラジル人話者が参加した対話に最も出現頻度の高いモダリティ形式はまさしくこの「よ」と「ね」である。

以下、「よ」・「ね」を中心とした終助詞と、命題に関わるモダリティ形式という順でそれぞれが表す意味と機能を分析していきたいと思う。

### 4.2.3. ブラジル人話者が使用したモダリティ形式の考察の順序

ここでは、ブラジル人話者が使用したモダリティ形式に限って、次のように考察を進めたい。

(1) モダリティ形式と文末の「普通体」・「丁寧体」との共起を調べ、それに関してはっきりとした傾向が見られるかどうかを確認する。

(2) ブラジル人話者が会話の中で使用したモダリティ形式の語用論的な機能を分析する。ここで注意しなければならないのは、ブラジル人が使用する形式は母語話者のそれと同じだとしても、それらの形式が担う機能は母語話者と異なるケースが少なくないということである。従って、母語話者が使用するモダリティ形式を一般的

に捉える理論枠組みの観点からはブラジル人話者が用いる形式を説明することができない。ここではこうした母語話者とブラジル人話者における機能の差異にも触れることにする。

### 4.2.4. 日本語のモダリティ文献から見た「よ」と「ね」

「ね」と「よ」は「聞き手めあてのモダリティ」と呼ばれている。日本語の対話に不可欠な要素であり、多数の論文で扱われてきた。

「ね」の性質については、神尾(1990)が心理学の情報のなわ張り理論を適応し、その枠組みにおいて語用論的な観点からきめ細かく説明した。この理論にもとづくと、「ね」は「現在の発話内容に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す必須の標識である」(p.62)。これまでの文献がとっている立場は基本的に神尾と大きな違いが見られない。

益岡(1991)は、「ね」と「よ」を一緒に扱い、「ね」と「よ」の「基本的な特徴が、話し手と聞き手の情報、判断が一致するか一致しないかという点に求められる」と述べた。従って、両終助詞を同じカテゴリー内での相対立する項であると主張し、「ね」を「一致型」、「よ」を「対立型」と呼んだ。一方、白川(1992)は、「よ」が必ずしも「ね」と対比することによって説明できるとは限らないと指摘した。聞き手が知らない情報を伝える場合にも、「よ」が付加しない方が文の座りがよい例文があると言い、それらの例文を提示しながら、「よ」の機能を再考した。

諸文献から、「ね」と「よ」が日本語の対話文において如何に重要なのかを痛感することができた。これらの終助詞を非母語話者のブラジル人がどのように認識し、発話に用いているかを調べる必要があると思われる。次節で見るように、母語話者の日本語を資料にしたこれまでの文献からは説明できない現象がしばしば出没するからである。

### 4.2.5. 終助詞と「丁寧体・普通体」との共起

母語話者に関して言えば、丁寧体の文より普通体の文の方が終助詞の「よ」「ね」

を用いる頻度がはるかに高いことが一般的に知られている。その理由としてあげられているのは聞き手への配慮であり、とりわけ「話し手が聞き手に対して取る心理的な距離の遠近である」(益岡(1991)、p.104-105)。つまり、「よ」と「ね」の使用は聞き手との近い関係を表すということである。このように、終助詞の使用は丁寧さと深く関わっていることがうかがわれる。

母語話者は聞き手との距離を測りながら、終助詞を使用するのであろう。ところが、第2言語話者は必ずしも同じ基準で終助詞を用いるとは限らない。今回のブラジル人話者のデータはそれを示唆すると思われる。終助詞が普通体とのみ共起する場面があるにもかかわらず、全体的な傾向としては「ね(な)」が最も丁寧体に後接しやすく、「よ」が丁寧体より普通体とともに用いられることが多く見られた。また、話者による個人差が終助詞の使用に著しく反映されている。

以下の表は終助詞と普通体・丁寧体との共起を場面ごとに示したものである。

表 4-3: 終助詞と「普通体」・「丁寧体」との共起

| | BI-JO(1) | | BI -JY | | BI-JC(1) | | BI-JO(2) | | BI-JC(2) | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 |
| よ | 12 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 6 | 1 | 23 | 3 |
| ね | 1 | 1 | 0 | 4 | 0 | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 2 | 8 |
| な(なぁ) | 7 | 3 | 3 | 5 | 2 | 0 | 11 | 1 | 6 | 0 | 29 | 9 |

| | BA -JK | | BA -JH | | BA -JY | | BA -JC | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 |
| よ | 0 | 2 | 1 | 0 | 2 | 2 | 2 | 0 | 5 | 4 |
| ね | 1 | 6 | 3 | 0 | 11 | 0 | 6 | 1 | 21 | 7 |
| な(なぁ) | 5 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 3 | 0 | 12 | 0 |

| | BM-JY(1) | | BM-JD(1) | | BM-KY(2) | | BM -JT | | BM-JD(2) | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 | 普通 | 丁寧 |
| よ | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 |
| ね | 3 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 7 | 0 | 12 | 0 |
| な(なぁ) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 |

インフォーマント別にきめ細かく見ていこう。

BM はすべての場面でほとんど普通体をのみ用いており、丁寧体と終助詞との共起が見られないため、この項目に関してはBMを分析対象外にする。

BI と BA の間には多少の差が見出せる。

BI のデータにおいては、全体的な傾向として「よ」が場面と関係なく、丁寧体より普通体の文で用いられることが多く見られた。それに比べ、「ね（な)」は最も丁寧体に後接しやすい形式であった。さらに、BI は機能的、または方言的な差を含む文体的な区別をせずに、「ね」と「な」を交代して用いているように見える。例えば、興味深いのはブラジル人が接している日本語母語話者が、「丁寧体 + な」ではなく、「丁寧体 + ね」を使用しているが、BI の発話に前者の形式が出現している[*1]。

なお、「そうですね（ねえ)」は固定された形式として出現している。

BA に関しては、特に次のような特徴に注目したい。1つ目は、ボランティアの JK と会話をする場面を除いて、普通体との共起が最も多く見られたことである。2つ目は、丁寧体に「よ」が後接した場合、「V 否定辞ナイ + です + よ」の形式が用いられたことである[*1]。なお、BI とは異なり、「な」より「ね」の使用頻度が高い。「な」（なぁ）は 丁寧体と共起することはなかった。このことから、BA が「ね」と「な」（なぁ）を機能的に区別していると考えられる。職場とボランティア、いずれの場面でも「ね」は話し相手に働きかけるときに使用し、「な」（なぁ）は、特に録音調査の第 2 段階に入ってから、独話に用いられている。このことから、「な」が普通体とのみ共起することが説明できるのではないだろうか。次の例(1)と(2)は同じ会話から抽出したものである。

(66) ［職　BA-JC］

JC: やるけども、僕は家族でやるから。

---

*1　滋賀県方言の母語話者によると、「丁寧体+な」は、年輩の男性が少々改まったスタイルの談話で用いる形式である。ただし、この形式は本稿の母語話者インフォーマントのデータにはみられなかった。

*2　Copula の「です」に後接するが、「なん（なの）です」は一切出現しなかった。

BA: 家族でやる。それは多いね（うん）うん。

(67) [同僚の JC と卓球をやって、負けそうになった時]

BC: [得点]はちはち。

BA: はち。[3 秒]ったなあ。逆転できないなあ。

全体的に丁寧体の文には終助詞が用いられない結果となった。その背景には、丁寧さ以外の要因が働いていると思われる。筆者の仮説として、「丁寧体」と共起しないのは、ブラジル人話者の会話の中で、丁寧体が終助詞に類する機能を果たしているということの結果と考えたい。要するに、「です」・「ます」が丁寧さだけではなく、終助詞の習得不足を補う形で文末に用いられ、終助詞と同様に発話の強調などの語用論的な機能を持っていると考えられるのである。こうした「丁寧体」の語用論的な機能に関しては後節で詳しく考察するが、まず、使用された終助詞の機能について詳しく述べたい。

### 4.2.6. 「よ」とその語用論的な機能

以下、「よ」が現れた文脈とその機能の種類を整理し、各話者について具体的な用例を取り上げながら、考察する。

＊強調：２つのパターンが見られた。１つは話し相手が確認の形で尋ねた内容を受け継ぎ、その事実性を目立たそうとするものである。なお、いずれの用例でもその情報はブラジル人話者の領域内にある。

(68) [ボ　BI-JO(1)]

JO: 土曜日働いてる人が多いですね。

BI: 多いよ。

JO: 多いね。

BI: 多いよ。

JO: じゃ、お休みって、週一回だけですか。

BI: 一回だけよ。

(69) [職　BA-JH]

JH: モザイクフェーザ...それ、モザイクフェーザーはな、途中止められんのか。

BA: 止まられへんよ。

(70) [ボ　BM-JY(1)]

JY:友達皆一緒になって＋（そ、そ）ん、でも、サッカーは１１人いるでしょ。

BM:（笑）いるよ。

(71) [ボ　BM-JT]

JT: じゃあ、[お金]もう自分のためだけだから、暇さえあれば遊びにいける。でも、あまり時間がないか。

BM: ないよ。

もう１つは、自らの発話で提供する情報の事実性を、「よ」の使用によって強める場合である。

(72) [ボ　BI-JO(1)]

JO:ん、多分ね、あの、そう、とてもね、上手だと思う。とても上手で、頭もたくさん覚えてると思うだけど、しゃべら

BI:しゃべったら、なんでも知ってるよ。

(73) [ボ　BA-JK]

BA:[コンピューターの]ハードは買いました。インストール、あまり知らないですよ。だって、使わない。

＊主張：自ら述べた意見の正当性を強めようとする[3]。意見の主張として用いられた「よ」は最も少なく、BI 以外の話者の発話には出現しなかった。

(74) [ボ　BI-JO(1)]

JO: [日本人が]恥ずかしいと思うよ。恥ずかしいから、あの、何話したらいいかわからない。

BI: 日系人が、日系人が恥ずかしいと思うよ、僕は。

*反論：話し相手の発話とは異なった情報を提供し、もしくは反対の意見を述べる際、または話し相手の予想からはずれた情報を伝える際に「よ」が用いられる。

(75) [ボ　BI-JO(1)]

JO: えーと、会社で一緒に働いている、周りに日本人はいないの＋

BI: たくさんありますよ。

(76) JO: 日本人はね、割とね、恥ずかしがりだからね。

BI: 違うよ。

JO: 違う＋なんで＋

BI: 恥ずかしいではないよ。

(77) [職　BA-JC]

JC: [作業の最中]ポッケーないよ。ポッケーない＋

BA: 入ってるよ。ああ、もう入ってるわ。大丈夫。

以上、ブラジル人話者の発話で用いられる「よ」の機能をまとめてみた。全員のデータにわたり、「よ」が最も多く担った機能は強調である。主張の「よ」は BI の

*3 本稿では「～と思う」などの動詞を用い、明らかに意見を述べる発話だけを扱う。直感的な印象を述べる発話は意見として認められるかどうか議論になる点であるが、ここでの考察の対象外にする。

みの発話で見られ、また反論の「よ」は BI の発話により多く出現した。BA は主に強調としての「よ」を用い、BM は強調以外の機能で「よ」を使用しなかった。それを簡略的に示すと、表 2 のようになる。

表 4-4: 「よ」の語用論的な機能とその分布

| | BI-JO(1) | BI-JY | BI-JC(1) | BI-JO(2) | BI-JC(2) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 強調 | 7 | 3 | 1 | 1 | 10 | 22 |
| 主張 | 1 | | | | | 1 |
| 反論 | 5 | | | 2 | 1 | 8 |
| 合計 | 13 | 3 | 1 | 3 | 11 | 31 |

| | BA-JK | BA-JH | BA-JY | BA-JC | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 強調 | 2 | 1 | 4 | | 7 |
| 主張 | | | | | |
| 反論 | | | | 2 | 2 |
| 合計 | 2 | 1 | 4 | 2 | 9 |

| | BM-JY(1) | BM-JD(1) | BM-JY(2) | BM-JT | BM-JD(2) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 強調 | 1 | | | 1 | 2 | 4 |
| 主張 | | | | | | |
| 反論 | | | | | | |
| 合計 | 1 | | | 1 | 2 | 4 |

### 4. 2. 7. 「ね」とその語用論的な機能

日本語学習者を対象に「ね」の習得を調べた Sawyer (1992) と尾崎 (1996) は「ね」の使用頻度に関して同様の結果を出している。双方とも初期の学習者においては「ね」の使用頻度が少ないと述べている。また、Sawyer が「ね」は定型表現の中で先に用いられるようになり、学習期間が長くなるにつれ、その機能が多様化するという。

今日の調査は以上の研究とは異なる結果に至った。まず、ブラジル人話者の談話

資料を観察すると、「ね」が頻繁に現れてくる。終助詞などのモダリティ形式をほとんど習得しておらず、一名詞文単位で表現する初歩の話者（BN）の談話においても「ね」が使用されることが多く見られる。「ね」は終助詞の中で母語話者の発話にも多く出現し、習得しやすいと思われる。ただし、「ね」の機能に迫ると、第２言語話者は母語話者が「ね」以外の終助詞を使用する文脈にも「ね」を用い、それらの「ね」は母語話者が用いる「ね」と異なる機能を果たしていることがしばしば見られるのである。もう１つは、ブラジル人話者のデータにおいて、「ね」が果たす機能の多様性が際立つことである。ブラジル人が使用する「ね」は特に次のような理由で興味深いと思われる。１つ目はブラジル人話者の語彙不足や表現力を補う形で「ね」を「代償形式」として用いられるからである。この特徴は特に一切学習していない話者(BN)のデータに見られる。２つ目は「ね」と関西方言の「な」を区別せずに使用しており、さらに「ね」より「な」の出現頻度が多い発話の話者がいることである。３つ目は、ポルトガル語には発音及び機能上「ね」と類似する談話標識(né)があるため、今回のデータにおいて、ポルトガル語からの転移と思われる中間言語的な用法が頻繁に見られることがある。なお、この中間的な用法の「ね」は代償形式としても用いられている。

本稿の結果が Sawyer・尾崎と異なったのは、ブラジル人話者が自然習得から学習へという順で日本語に接してきたことに関係があると思われる。例えば、尾崎が調べた「ね」の使用頻度順位を示す表を見ると、「ね」より接続詞「でも」や接続助詞「から」が多く使われていることに気づく。一方、筆者のブラジル人のデータには逆の傾向が見られる。「でも」や「から」のような接続詞と接続助詞の使用頻度が低く、場合によってはまったく出現していない。それは、教科書を媒介に正式に学習する場合、接続詞と接続助詞を用いた文型が「ね」のようなモダリティ形式の文型よりも重視されるからであろう。そこで、学習と自然習得の相違点が言語運用に反映されていると考えるわけである。

以下、ブラジル人話者が使用した「ね」の機能的な特徴をあげてみよう。

### 4.2.7.1. ポルトガル語の「né?」と日本語への転移

ポルトガル語の「né」([nɛ])は本来「não é?」という、英語の「isn't it?」やフランス語の「n'est-ce pas?」と同じように、tag questionの省略形である。発音と文中の位置は日本語の「ね」・「な」と類似し、機能的には確認要求と同意要求として用いられる点においても日本語の「ね」・「な」に近いと言える。ただし、ポルトガル語の「né」は日本語の「ね」にない語用論的な機能を担うことがある。

日本語の「ね」における機能を記述的に分析する際、話し手と聞き手が伝達情報を共有しているか否かが基本的なバロメーターになっている。それによって「ね」の使用の適切さが左右されるであろう。神尾(1990)が任意的な「ね」と必須的な「ね」に分け、前者は連帯感を示すとし、後者は「話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す」(p.65)と述べている。また、益岡(1991)によると、「ね」は「話し手と聞き手の意向が一致するとの判断を表す形式である」(p.100)。一方、ポルトガル語の「né」は以上のような機能を含むもの、その出現を決定させる上で話し手と聞き手が持っている情報が同一であることが必須的な条件だとは言えない。

ポルトガル語の談話標識における研究の中で「né」は常に取り上げられるが、その語用論的な機能に基づいた分析を試みた研究は少ない。Silva & Macedo(1992)が「né」を「feedback request」として扱う。さらに、「né」の使用状況に関しては、3つの条件のに下に「né」の出現頻度を量的に調べている。それらの条件は(1) 話し手と伝達情報との関わり(subjective / objective)、(2) 伝達情報は新情報か旧情報か、(3) 発話の長さ、とする。データに基づいた結果として、「né」は話し手が個人的な意見や主観的な話題について述べる場合、旧情報を伝達する場合に最も多く用いられる。さらに、短い発話より長い発話に現れやすいという。この結果は全体的な傾向を示すだろうが、筆者は上の考察に関して疑問に思う点がいくつかある。それらの疑問点を指摘するに当たって、日本語の「ね」とその相違点を挙げながら、ポルトガル語の「né」について簡単に論じ、最後にブラジル人の中間言語に現れた、ポルトガル語からの転移と思われる「ね」・「な」を考察する。

まず、日本語と類似する「né」の用法を見ておこう。

＊確認要求の「né」

(78) Você é advogado, né? O que te levou a trabalhar, tentar a vida como operário no
*you are lawyer What you led to work , try life as worker in*
Japão?
*Japan* (ブラジルテレビ番組 Globo Reporter, 1995)

＊同意要求

(79) Tá frio hoje, né?
*Is cold today*

以上の用例を日本語に訳すと、次のようになろう。

(78") ○○さんは弁護士さんですね。どのようなきっかけで日本に就労者として働きにいくことになりましたか。

(79') 今日は寒いですね。

話し手と聞き手が持っている情報の知識の有無[*4] という観点から言えば、(78)では話し手と聞き手が同じ知識を持っているが、その知識は聞き手の私領域に属しているので、確認の形で「né」を文末に付加するのである。(79)では話し手と聞き手ともに天候について同等の知識を持ち、話し手が挨拶ことばのように聞き手の同意を求める。これらの用例の日本語版においては、「ね」がポルトガル語の「né」と同じ位置、かつ同じような機能で用いられていると思われる。このように、これは「né」と「ね」の機能が重なる用例であるが、次はポルトガル語の「né」が担うそれ以外の機能を挙げてみたい。

ポルトガル語の「né」は、文末だけでなく、複文の場合、節末に間投助詞(filler)として挿入されることがある。また、長い発話の、文と文の間に出現する傾向が見られる。ただし、それらの「né」は、確認要求や同意要求の場合と異なり、「não é?」

*4 この分析の観点は神尾(1990)が論じる「情報のなわばり理論」に基づいている。

(isn't it)の意味が空洞化してしまうのである。要するに、聞き手がまったく知らない情報を伝達する際にも用いることができる。ここに日本語の「ね」との根本的な違いが見られる。

(80) Naquela época em que eu tinha me formado...é, a perspectiva da minha vida
*In that time when I had graduated the perspective of my life*
profissional aqui era nula, né. Como você não tem perspectiva profissional, você
*professional here was bad . As you don't have perspective professional, you*
acaba pensando no dinheiro. (ブラジルテレビ番組 Globo Repórter, 1995)
*finally think in money.*
卒業した時は、キャリアの見込みは全くありませんでした(né)。キャリアの見込みがなかったら、お金のことを考えてしまいます。

(81) Veja, agora que nós estamos falando sobre educação, estou lembrando o seguinte:
*See, now that we are talking about education, am remembering the following:*
nós somos casados e não temos filhos, né. Então lembrei a história de
*we are married and don't have children . Then remembered the history of*
um senhor (...)
*a gentleman* (Marcuschi, 1986)
教育の話をしたら、次のことを思い出しました。私たちは結婚していますが、子供はいません(né). それで、ある人のことを...(中略)

(80)と(81)は、話し手が聞き手の知らないと予想される私生活についての情報を伝達する断定文である。この「né」には2つの機能が起動している。1つは、談話(ディスコース)上の機能であり、ひとまとまりの情報を伝達する節や文の区切りを示す標識として用いられ、談話のリズムをなす機能である。談話を調整する機能と言ってもよいであろう。もう1つは、聞き手への働きかけを含意する機能である。その働きかけは聞き手の注意を引くと同時に、聞き手の共感を求める。前項で引用したSilva & Macedoは、こうした「né」は「feedback request」表現の範囲に入ると述べて

いるが、それは認めがたいのではないかと筆者は思う。なぜかというと、上のいずれの用例でも「né」は聞き手の反応を求めているわけではないからである。ある事情や事柄を語っている最中に、文間「né」を使用することによって、むしろ上で説明したような効果を表すのだろう。要するに、確認要求や同意要求とは異なり、(12)と(81)の「né」に対しては聞き手の反応がなくても、コミュニケーションに支障がないのである。

さて、ここではブラジル人話者が使用した、中間言語的な「ね」について考察したい。それらの「ね」(な) はポルトガル語からの転移だと思われ、転移によって、過剰一般化が生じているのではないかと推測される。

まず、BI の発話に現れるこの「ね」を見てみよう。

(82) [ボ　BI-JY]

BI: プリンじょうず。

JY: ん、プリンね。

BI: あの、ドミニカ料理もありますな。(ん) あの人 (ん) ...

JY: ん。K さんね。KT さん。

(83) [ボ　BI-JO(2)]

JO: ええ、えとね、あのね、西の方、オレゴンとカリフォルニアは行きました。

BI: カリフォルニアはきれいな+

JO: ん、きれい。サンフランシスコとかロザンセレスとか。

(82)では、話し手の BI が料理パーティを企画していることを聞き手の JY に知らせる文脈である。そのパーティには「ドミニカ料理が出る」という新情報を伝える際に、「ね」に相当する関西方言の「な」を使用している。また、(83)では、日本語母語話者の JO がアメリカのオレゴンとカリフォルニアに出張で行ったことをブラジル人の BI に初めて言う。それに対して、BI は「カリフォルニアはきれい」というコメントに「な」を付加するが、BI 自身はカリフォルニアに行ったことがないので、同意要求としては捉えにくい。(82)と(83)の「な」の用法は日本語母語話者の「ね」(な)

の普段の用い方とはかなり違うようであり、話し手と聞き手との情報の知識の有無及び共有とは無関係であろう。特に(83)の「な」は前述した聞き手との共感を述べていると思われる表現である。

これらの「な」の用法をポルトガル語から転移されたものとして認めれば、上の文脈で「な」が用いられたことを説明できると思われる。なお、インフォーマントに(82)と(83)をポルトガル語に訳させてみると、「né」が同じ位置に出現した。

(82') Também vai ter comida dominicana, né. Aquela menina...
*Also will have food dominican That girl*

(83') A Califórnia é bonita, né?
*The California is beautiful*

話者 BA のデータにもポルトガル語からの転移と思われる「ね」(な) が見られる。以下は第 1 回目の会話録音で得られた転移による「ね」の用例である。BA は日本にいるブラジル人が最近ブラジルのテレビ番組のビデオを借りたが、昔はそれができなかったということを伝えている。それは日本人話者の JKa にとっての新情報である。

(84) [ボ BA-JK]

JK: ブラジルの番組というのはブラジルのテレビでやってる番組ですか。

BA: はい、はい。

JK: ええええ、そういうのがあるんですか。

BA: ビデオから。ブラジルの人でそんなビデオレンタルする。昔は全然ないですね。(ああ) 日本の番組だけ。

BA に(84)をポルトガル語に訳させてみると、次のようになった。

(84') Os brasileiros alugam esses vídeos. Antigamente, não havia, né. Só havia
*The Brazilians rent these videos. Years ago, didn't have Only had*
programas japoneses.
*programs japanese*

ところが、BI と異なり、BA の場合は、ボランティアとの接触が多くなるにつれ、「な」より「ね」の方が多く用いられるようになり、転移による「ね」の中間言語的な用法がなくなっていく。

さらに、BM のデータを観察すると、全体的に終助詞が少なかったが、中間言語的な「ね」の用法に関しては同じ傾向が見られた。次のような用例である。

(85) [ボ　BM-JY(1)]

JY: (...)ブラジルで仕事やってるのと、日本で仕事やってるのと、どう違うんかなぁと思うんだけど。それはどうですか。

BM: ああ、こっち、こっちの仕事は初めてやってるね。ペンキ（うん＋）ペンキ。

(86) JY: ん（笑）そう。嵐山は、まあ、なんていうのかな、まあ。嵐山はいつ行きました+

BM: いまあ、嵐山、日曜日行ったね（うん＋）朝行った。後、金閣寺行った。

インフォーマントにポルトガル語に訳させると、やはり「né」が現れた。

(85') Aqui estou fazendo esse trabalho pela primeira vez, né. Pintura.

*Here am doing this job for the first time painting*

(86') Arashiyama, fui num domingo, né. Fui de manhã e depois, fui ao Kinkakuji.

*Arashiyama, went in a Sunday Went in the morning and then, went to Kinkakuji*

これもポルトガル語からの転移であろう。

### 4.2.7.2. 「補充形式」としての「ね」

以上、ブラジル人話者のポルトガル語からの転移による中間言語的な用法を見てきた。最後に、補充形式と呼ばれる「ね」について考察する。この性質の「ね」はBMの発話に出現している。

(87) [ボ　BM-JY(1)]

JY:(...)えーと、Oで、その、勉強したいと思ったのは、どんなきっかけ＋

BM: ん、友達(ん) 見た。草津ある（ん）、学校、日本語ね（ん)。

JY: 日本語教室が草津にあるから（ん)

(88) JY: 日本人の、その、生活で変やなぁって、思ったこととか、面白いなぁって、思ったこととか、ありませんか。

BM: ン、面白い（ん)。あった。

JY: ん。どんなのが＋

BM: 女の、大阪の（ん)、その大阪ね、ええ、変なことば使う。

(87)と(88)のように、語彙が不足の場合、あるいは構文に困難を感じる場合、話者は間投助詞に類する「ね」を使用するようである。話者の文法能力や表現力が不充分であればあるほどこうした「ね」が用いられると思われる[*1]。補足データとして、前章で紹介した日本語を職場で自然に習得したBNの発話を再び分析の対象とする。BNのデータには「ね」以外の終助詞が一切現れておらず、この「ね」は過剰一般化されているように思われる。

(89) [職　BN-JT]

JT: [第3者について]だめや。飲んでばかり。だめ。

---

*5　日本語能力が原因である場合、ブラジル人以外の第2言語習得者の発話にもこうした代償の「ね」が用いられる可能性があり得よう。

BN: (笑) お金持ちね。

JT: あん＋

BN: お金持ち。

JT: (XXX)。(BN: No?) だめや。

BN: 毎日スナック。スナック、ね。

(90) [初対面　BN-JU]

BN: あ、ポストカードは、私、あります。

JU: ほんとに＋

BN: ありますね。

JU: ええ。

BN: ん。今ね、今、ない。ブラジル。

(89) の「お金持ちね」の「ね」は同意要求もしくは確認要求として用いられている可能性はあるが、最後の「ね」は性質が明らかに異なる。話者の BN は「毎日同僚がスナックに飲みにいく」ことを話し相手の JT に知らせている。従って、確認要求や同意要求として捉えにくい。しかも、この文脈の「ね」はポルトガル語からの転移とは判断しがたい。(90) の「ね」についても同様のことが言えるであろう。

次の表 3 では、ブラジル人話者が参加したそれぞれの場面に出現した「ね」・「な」とその機能をまとめた。

**表 4-5: 場面による「ね」(な) の機能とその出現頻度:**

| | 場面 | ボランティア | ボランティア | 職場 | ボランティア | 職場 | ボランティア | ボランティア | 職場 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ね」・「な」の機能 | 1回目 / 2回目 | BI-JO(1) / BI-JO(2) | BI-JY | BI-JC(1) / BI-JC(2) | BA-JK / BA-JY | BA-JH / BA-JC | BM-JY(1) / BM-JY(2) | BM-JT | BM-JD(1) / BM-JD(2) | 1回目合計 / 2回目合計 |
| 間投(助)詞 | 文頭 | – / – | – | 1 / – | – / – | – / – | – / – | – | – / – | 1 / – |
| | 文中 | 9 / 2 | 1 | – / – | 1 / 8 | 1 / 1 | – / – | – | – / 1 | 12 / 12 |
| | 文末 | 2 / – | 2 | – / – | 2 / 2 | 2 / – | – / – | – | 1 / – | 9 / 2 |
| 確認要求 | | 1 / 1 | – | – / – | 1 / 1 | – / 5 | – / – | – | – / 3 | 2 / 10 |
| 同意要求 | | 5 / 8 | 3 | 3 / 4 | 5 / 6 | – / 2 | – / 1 | – | 1 / 2 | 17 / 23 |
| 同意表示 | | – / – | 1 | – / – | – / 3 | – / 1 | – / – | – | – / – | 1 / 4 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 独り言 | 1 / 2 | 3 / | 4 / 3 | 3 / 3 | – / 3 | – / – | / – | – / – | 11 / 11 |
| 転移 | 4 / 2 | 4 / | – / 1 | 2 / 2 | – / – | 2 / – | / – | – / 2 | 12 / 7 |
| 補充 | – / – | – / | – / – | – / – | – / – | 2 / – | / – | – / 1 | 2 / 1 |
| 1回目合計 / 2回目合計 | 22 / 15 | 14 / | 8 / 8 | 14 / 25 | 3 / 12 | 4 / 1 | / – | 2 / 9 | 67 / 70 |

表 4-6: 補足 - BN 話者

| 「ね」・「な」の機能 | 間投(助)詞 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 文頭 | 文中 | 文末 | 確認要求 | 同意要求 | 同意表示 | 独り言 | 転移 | 補充 | 合計 |
| BN-JU | 3 | – | – | 4 | 1 | 1 | – | – | 12 | 21 |
| BN-JP | – | – | – | – | 1 | – | – | – | 1 | 2 |

### 4. 2. 8. 「ね」以外の確認・同意要求表現

確認要求表現、同意要求表現、または同意表示として最も多く使用されるのは上述の「ね」であるが、特に録音調査の第 2 段階から「ね」以外の表現が用いられた。その中でも同意要求・表示として認められる「じゃないか」類の表現が BI と BA の会話に現れた。

(91) [職　BI-JC2]

JC: [黙っているブラジル人の BA に向かって]なんかしゃべれ、おまえ。

BA: (XXX)

BI: まあ、いいじゃないか。→同意表示

BI のデータにはこの例しか見られなかったが、一方 BA は「～じゃない」を多く用いている。

(92) [職　BA-JH]

JH: こんで普通。で、いい＋

BA: いいんじゃない。→同意表示

JH: こんでいい＋

BA: いいんじゃない。→同意表示

(93) [ボ　BA-JY]

JY: ガソリン代がかかるで＝しょ＝。

BA: ＝ええ＝そんなにガソリンは高くないじゃない＋→同意要求

JY: ううん、そんなことないよ。

さらに、「だろう」類が同意要求表現としてBAにのみ頻繁に現れた。

(94) [職　BA-JH]

JH: これは、絶対こっち＋こっちだけ＋ここは＋

BA: 入らないでしょ＋　→同意要求

JH: はいらへん。

(95) [ボ　BA-JY]

BA: うん、字の勉強になるから。

JY: あれ絶対＝いいと思うけど、うん＝。(＝いいかなぁと思ったりします)
ふうん。

BA: なかなか難しいでしょ。(ん) [笑] (そう、そう) ことばでもね。
→同意要求

なお、インフォーマントのどちらも強い確信を含意する関西方言の確認要求表現である「～ちゃう」を用いなかったことに注意したい。特に職場では「～ちゃう」が多く使用されているため、ブラジル人話者のデータにも見られると予想した。しかしそれは認められなかった。これについては、インフォーマントが「～ちゃう」を「違う」の意味としてだけに理解していることが考えられる。この形式は「違う

よ」という形で反論の文脈においてしばしば現れていることがそれを証明している。

### 4.2.9. 命題にかかわるモダリティ表現の使用

#### 4.2.9.1. 判断を表すモダリティ表現

命題の事柄に対する判断のモダリティ表現については、インフォーマントごとに考察する。

BI のデータにおいては、「かもしれない」がボランティアの JY との会話で初めて現れている。

(96) [ボ　BI-JY]

JY: 一番下の弟と、お母さんが（ふんふん）＝帰って＝（＝いっしょに＝）日本にいた。ん。そんで、もう帰らはった。

BI: [自分自身の母親と弟について冗談のように言う]遊びにきたかもしれない。

JY: なんや、なんや、それ。ブラジルから日本に遊びにきてたと。

調査の第２段階では、ボランティアの JO との会話にも「かもしれない」が再び現れている。

(97) [BI-JO2]

JO: アメリカ人。R。

BI: R。（ん、ん）あ、駅にいましたか、かもしれない、今。

JO: あっ、今＋　　[駅にいたかもしれない]

BI: はい。

(98) JO: ええ↑[メキシコ料理店の位置について]草津じゃないよね。

BI: どこか、どこか、いゆってないから。栗東かもしれない。

(99) [職　BI-JC]

BI:[同じ職場で働いたブラジル人の元同僚について]2 人とも戻りたいなぁ。

JC: いゆってた＋

BI: ん。

JC: ほんとに＋

BI: 来年かもしれない。

インフォーマントはいずれの場面においても自分の推し量りの不確かさを表す表現として「かもしれない」だけを用いている。インフォーマントが「かもしれない」の用法を一般化しているか否かはデータだけから明確に判断することはできない。しかし、外在にある不確実な根拠から事柄を推し量っている点においては母語話者と違わないように思われる。

BA のデータには「かもしれない」の他、「～かなぁ」が用いられた。双方とも録音調査の第 2 段階に初めて出現している。

(100) [ボ　BA-JY]

JY:ん、琵琶湖のねえ、えと、からすまはんという水族館（ん）ん。あのね、えーと

BA: 前に走ったことがあるかもしれない。

(101) JY: やっぱり、まだ体は=ブラジルの＝（＝ブラジルね＝）あのー（そうそう）血が流れてる[笑]

BA: そうかもしれない。

(102) [職　BA-JC]

BA: なんとか車で行けるかなぁ。

JC: 行ける、行ける。

(103) BA: ただのサービスじゃないかなぁ。うーん、だからちょっと

JC: ひょうとしたら、家まで来て、それ、そういう直してくれる。

BM のデータには「かもしれない」が出現している。ただし、それは自分自身のお好みについて述べる文脈であり、特殊な例ではあるが、このような用法は母語話者の場合にも見られるものでだろう。

(104) [ボ　BM-JY2]

JY: (...)なんか、ぎしゃぎしゃがついて、そういうやつね。

BM: 魚を、魚を、よりは、肉の方が好きなんかもしれない。

### 4.2.9.2. その他のモダリティ表現

「つもり」は BI のデータにのみ用いられている。二つの異なる用法が見られることに注目したい。一つ目は、話者が話し相手の意志を直接尋ねる文脈においてである。

(105) [職　BI-JC]

BI: 今、なんか、商売の勉強（x）

JC: 商売+僕むかない。僕、無口だから。

BI: じゃあ、えとー、年なったら、で、その会社、ずっと働きつもりじゃないか。　[働くつもりか]

JC: どっちとも言えます。半分、半分。

2つ目は、BI による「つもり」の用法に人称制限がないということである。(106)で見られるように、母語話者とは異なり、BI は 3 人称に対しても「つもり」を用いている。さらに、人間だけではなく、無生物に対して「つもり」の用法を広げたことによって、「意志」の意味がなくなり、「予定である」、「はずである」のような意味が生じている。(106)の「つもり」は話者の、「地震が来ること」に対する判断

を表していると思われる。要するに、BI は「つもり」を判断モダリティ表現として用いていると考えられるのである。

(106) [ボ　BI-JO2]

BI: [神戸大震災について](...)でも、あの時には、えーと、琵琶湖（ん）この辺に（ん、ん）えと、<u>来るつもりだったね</u>。

JO: 地震が＋　　[来る予定だった]、[来るはずだった]

BI: はい。滋賀県で。後、大丈夫ですから。(...)

以下の表 4-7 では各場面に用いられた「ね」と「よ」以外のモダリティ形式とその出現頻度を示した。

**表 4-7: 命題にかかわるモダリティ形式の出現頻度**

| | ボランティア | ボランティア | 職場 | ボランティア | 職場 | ボランティア | ボランティア | 職場 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1回目 / 2回目 | BI-JO(1) / BI-JO(2) | BI-JY | BI-JC(1) / BI-JC(2) | BA-JK / BA-JY | BA-JH / BA-JC | BM-JY(1) / BM-JY(2) | BM-JT | BM-JD(1) / BM-JD(2) | 1回目合計 / 2回目合計 |
| ～でしょう | | | | 6 | 7 | | | | 7 / 6 |
| ～じゃないか | 1 | | 1 | 2 | 1 / 1 | | | 1 | 1 / 6 |
| ～よう(勧誘) | 1 / 1 | | 1 | | 1 | | | 1 | 2 / 3 |
| ～よう(意図) | | | | 2 | | | | 1 | 3 |
| ～かもしれない | 2 | 1 | | 2 | | 1 | | | 1 / 5 |
| ～つもり | 1 | | 1 | | | | | | 2 |
| ～の(質問) | 1 | | 1 | | 3 | | | | 5 |
| ～の(断定) | 2 / 2 | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | 5 / 3 |
| ～わ | | | | 1 | 1 | | | | 2 |
| ～ぜ | | | | | 1 | | | | 1 |
| ～ぞ | | | 1 | | | | | | 1 |
| ～やん | 1 | | | 2 | 1 | | | | 1 / 3 |
| 1回目合計 / 2回目合計 | 4 / 8 | 2 | 1 / 5 | 15 | 9 / 8 | 1 / 1 | | 3 | 17 / 40 |

## 4.3. まとめ

モダリティ形式の使用は話者による個人差が著しいものの、ブラジル人の３名の資料を分析すると、主に次のような点を一般化することができると思う。

① モダリティ形式の中では終助詞の「よ」と「ね」が最も多く用いられている。それは、「よ」と「ね」が対話文に欠かせない終助詞であり、日本語母語話者の会話に頻繁に現れるため、第２言語話者が初期からこれらの終助詞を認識し、使うようになるからであると考えられる。

② 終助詞の「ね」に特に注目すべきである。先行研究によると、正式な学習を通じて日本語に接した学習者は学習の初期には「ね」の出現頻度が非常に低いという結果が出ているのに対して、自然習得が先立つブラジル人話者は異なる傾向を示している。「ね」の出現頻度は高く、さらにその用法に多様性がある。母語話者は、話し手と聞き手が同じ情報を共有しているか否かによって「ね」の適切さを判断するが、第２言語話者の場合は、その基準が必ずしも有効だとは限らない。ブラジル人話者が用いた「ね」には確認要求、同意要求・表示のほか、ポルトガル語から転移された用法と、表現や語彙の不足を補充する用法が見られた。

③「命題にかかわるモダリティ」に関しては、異なり語形が少なかったが、命題の事柄の不正確さを表す形式としての「かもしれない」が全員の談話で用いられている。ブラジル人が用いる「かもしれない」が自然な環境で習得されたようである。それは、インフォーマントが通っている日本語教室で使用されている教科書が「かもしれない」を用いる文型を扱っていないことから推測されることである。

④ 分析にあたっては、会話録音調査を二回に分け、縦断的にブラジル人話者の習得状況を調べたが、はっきりとした差が見られたとは言えない。むしろ、ボランティアと職場、領域によって終助詞とその他のモダリティ形式の出現頻度が異なることが観察できた。全体的には、職場場面の会話に比べ、ボランティア場面の会話においてモダリティ形式の使用頻度が高い。一方、特に仕事を話題にした会話(BA-JH, BA-JC)にはそのような形式が少なかった。すなわち、ボランティア場面では多くの話題についての対話が行われるため、モダリティ形式の種類と出現が多くなるとみなされるのである。

# 第５章
# スタイル切り替えの習得 －「普通体」・「丁寧体」の使い分け

留学生など、教室内で正式に学習した非母語話者はフォーマルなスタイルを先に身につけるが、インフォーマルなスタイルへの切り替えを習得するまでの過程は容易なものだとは言えない。それに対して、本研究で対象としているブラジル人就労者はインフォーマルなスタイルに接した後、ボランティアの教室を通して、フォーマルなスタイルを習得することになる。そのフォーマルなスタイルは主に「丁寧体」の使用に現れる。

ボランティア団体から接する日本語のスタイルは職場でのスタイルとの相違点が多く、そのスタイルに接する期間が長くなるにつれ、「職場内」と「職場外」、それぞれのスタイルに対する意識が形成され、それぞれを使い分けるようになることが観察できる。本節ではこうした切り替えはどのような要因によって起こるのかを明らかにし、ブラジル人話者の社会言語能力の一側面を検討してみたい。

## 5.1. 第２言語習得におけるスタイルのとらえ方と従来の研究

これまでの第２言語習得研究においては、学習者の中間言語にシステマティックな変異とその発生の諸要因を見出すことが中心的な研究課題となってきた。こうした言語変異をスタイルとしてとらえた代表的な研究をいくつか取り上げ、本研究との共通点と相違点を明らかにしたい。

まず、Labov のモデルを応用した Tarone の「連続体パラダイム」(continuum paradigm) を取り上げる (Tarone, 1985)。このパラダイムは学習者の言語形式への注意度 (degree of attention) を変数とし、注意度によって学習者が使用するスタイルがカジュアルなスタイル (casual style) から留意されたスタイル (careful style) へ変異していくことを検証する。カジュアルなスタイルには学習者が最も自然に使用できる言語形式が現れ、母語と目標言語からの干渉が少ないという。一方、留意されたスタイルは学習者の、言語形式への高い注意度を反映しており、文法的にはより正確であるとみなされている。また、Dickerson (1975) が Labov が提供した言語共同体における「sound change」

の枠組みを応用し、日本語を母語とする英語学習者の習得過程における音韻的な変異を調べた。これらの研究においては、スタイルとは言語形式の正確性、つまり言語形式への注意と結びついているものであるとしている。

スタイルの切り替えに焦点を当てたもう 1 つの研究としては Ellis(1987)が挙げられる。 Ellis は Tarone と同様に、学習者の言語が特定の条件によって、「変異し得る体系」(variable system)であると主張し、ある英語の複数形と、過去形を表す形態素の変異をスタイル切り替えとしてとらえようとする。ただし、Tarone は複数の異なる種類の談話にわたってスタイルの切り替えを調べているが、一方 Ellis は特定の談話（陳述）に限って、形態素の変異を追求している。また、Ellis は Ochs(1979)の「談話の計画性」(discourse planning)という枠組みを応用し、発話の際、学習者に与えられた談話を計画・整理する時間の長さとスタイル切り替えとの関係を明らかにする。すなわち、Tarone が挙げた言語形式への注意度に加え、Ellis は「談話を計画するための時間」という要因を導入しているわけである。

ここで Tarone と Ellis におけるスタイルのとらえ方について考察すると、いずれも文法的な正確性を基準に、より目標言語から遠ざかっている変種から目標言語と一致している変種への連続体としてスタイル切り替えを扱っている。しかも、そのスタイル切り替えに関する変数としては学習者の内部にかかわる心理的なもの（注意度、計画性）であり、社会言語学的な面を考慮に入れていないことに気づく。一方、本研究はスタイル切り替えに話者が置かれている社会的な場面の諸要素が重要な要因であるとし、その中で話し相手への配慮が中心的な位置を占めるとみなしている。したがって、本稿で対象とする「スタイル」は、場面や話し相手との関係によって選択され、特定の場面にふさわしいと思われる言語形式に限定することとする。

日本語学習者のスタイル切り替えに関する研究として渋谷(1997a)が挙げられる。この研究は日本の大学で日本語を学んでいる留学生の口頭発表を対象とし、従属節末の「常体」と「丁寧体」の切り替えに関与する諸要因や言語的な制約などを明らかにした。渋谷が指摘するように「学習者が、とりわけ日本で生活するような場合には、ある一定の習得段階において、このようなコードやスタイルを切り替える社会言語能力を身につけることが要求されることになる」。本稿で扱うブラジル人就労者の多くの場合は、留学生の場合とは異なり、スタイル切り替えは要求されない

だろうが、ボランティア団体の日本語教室で職場と異なるスタイルをインプットされ、学習することによって、スタイルの差を認識するようになると言える。また、彼らの実際の言語運用にも変化が起きることが予想されるのである。

## 5.2. 日本語のインプット —「職場内」・「職場外」

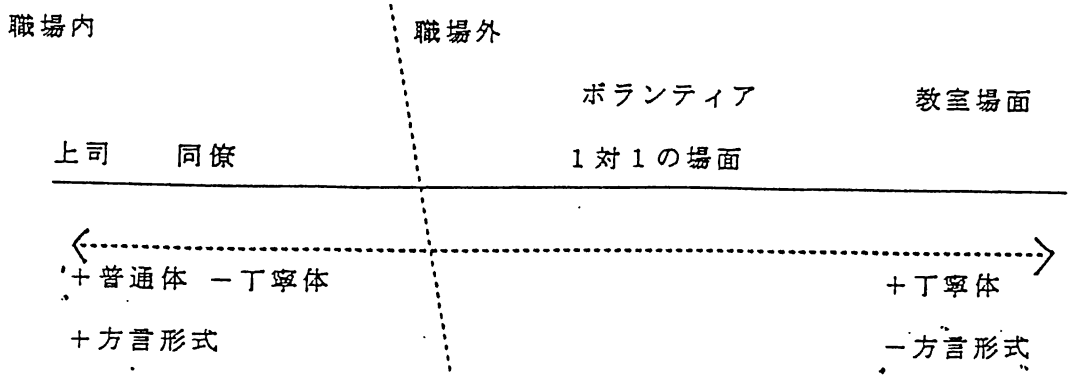
真田信治氏によると、現代の地域社会では方言がインフォーマルな場面で話されており、一方フォーマルな場面では、その地域の人々に共通する標準語、つまり「地域標準語」が使用されている。その地域標準語は「フォーマルなスピーチスタイル」と名付けられている（真田 1996)。こうしたアプローチは、方言と標準語が場面によってスタイルとして使い分けられていると見なしている。

当該のブラジル人労働者が日本語を習得する言語的な環境を観察すると、スタイルの観点から地域方言を扱わざるを得ないことになる。ブラジル人が職場でさらされている日本語は彼らが在住する地域のインフォーマルなスタイルに当たると思われる。このインフォーマルなスタイルには「普通体の高い使用頻度」と、「滋賀方言形の要素」という特徴を持っている。それに対して、ボランティア場面で話されている日本語は地域の「フォーマルなスピーチスタイル」であり、「丁寧体のより高い使用頻度」と、「方言を回避する傾向」という点では前者と対照的である。なお、ここで注意しなければならないのは、ブラジル人がさらされている方言は必ずしも在住している地域（滋賀県）の方言とは限らない。ブラジル人の同僚の中には、外の地方から就労のために滋賀県に移住した人もいる。例えば、インフォーマントの BM が最も接している同僚は長崎出身の年輩の人であり、使用している方言には滋賀方言の影響が少ないと見られる。

「職場内」では同僚と話す場面と上司と話す場面が観察できたが、双方の間には同様の言語的な特徴が見られ、同様のスタイルが使用されている。一方、ボランティア場面は２つに分かれる。１つは、ボランティアの知り合いとの一対一の自然な会話であり、もう１つは、ボランティアの教師に日本語を教えてもらう授業である。

自然な会話の場面はインフォーマルなスタイルの特徴を多少持っているが[*1]、授業場面に近づくにつれ、インフォーマルなスタイルに属すると思われる言語的な要素が少なくなっていく。ブラジル人が習得する言語的な環境を厳密に分析するのであれば、次の図 5-1 が示しているように、彼らがさらされている日本語を連続体として扱うべきであろう。

図 5-1: 日本語のインプット ― スタイルの連続体




以下、それぞれの場面で使用されているスタイルの実例を、ブラジル人の談話資料からとりあげてみよう。これらの実例からは「職場場面」から「教室場面」までの連続体における幅広いバリエーションが窺われる。

＊職場の上司（班長）と会話する場面

［BA-JH: 休憩時に BA がビデオカメラの使い方について JH に説している］

JH: それ、カメラ（X）＋…おまえ、ここに、ここ、なくても、見えるんか＋
　　ベース蓋して、あける…あ、電気つくんや

BA: そうそう。

*1　自然な会話の場合は、日本人話者によって、インフォーマルなスタイルの特徴が多くなることが見られる。方言形式を多少使用する話者がいれば、そうではない話者もいる。

[BI-JH: 同上の場面にBIが部分的に参加する]

BI: あしは要らないよ。

JH: えっ＋/ BI: じゃま。/ JH: これか。/BI: うん。/ JH: いる、いるんや。

＊職場の同僚と会話する場面

[BA-JC: 休憩時にコンピュータの修理店について話している]

JC: あんなー、このへん。アイビーエムって、野洲には、野洲にあるの。知ってるやろ。… …ん、そこではこういうなんはやってへん。ただ作ってるだけ。

[BI-JC: 休憩時に雑談している]

BI: ２人とももどりたいなぁ。

JC: ゆってた＋

BI: ん。

JC: ほんとに＋

BI: ん。来年かもしれない。

JC: Tゆってたで。A、 A一族はお金遣いが荒いやん。荒い。

[BM-JD: BMの部屋で雑談している]

JD: はっきりまだわからん。あんまりみちょらんけ。ただ(X)だけで。メーカーがちがうけえ。わからんわね。なんもね。相棒しらんの＋

BM: しらん。

＊ボランティアとの自然な会話の場面

[BA-JY]

JY: ガソリン代がかかるでしょ。

BA: ええ。そんなにガソリンは高くないじゃない＋

JY: ううん、そんなことないよ。あのー、(ええ＋) そ、だって、使ったら、使っただけガソリンいるやんか。

[BI-JO (2)]

BI: O さん、ずっと休みだった。

JO: そう。わたしね、えーと、仕事が忙しくて、それでね、１０月の、１０月がすご忙しくて、（はい）で、バザーとか、（はい）フリーマーケットとかしたんですね。それで、疲れたのと、アメリカと東京に仕事で行ったの。続けて（えええ）。それで、それで、その時の荷物がすごく重かったのね（ええ、はい）で、ここの筋肉＋（はい）が切れて（ええ、そんな）。ほんと[笑]。それで痛くてね、歩いても痛いし、しゃべっても痛かったんです（あああ）。今、大丈夫だけど。

[BA-JK]

JK: (...)で、北海道は縦の信号ばかりなんですよ。なぜかというと、雪が、横だったら、雪が積もるでしょう。そういうところで、同じ日本の中でも違うことがいっぱいあるんですよ。

BA: 向こうの、皆の日本語、発音は違いますか。

JK: あっ、発音、発音というか、アクセント（アクセント＋）ん。違いますね。

[BM-JT]

JT: ブラジルにはないでしょ。ねえ。へー。面白かったですか。今、こちらにいらっしゃってて、あの、他にね、会社で働いてるブラジルの人と連絡ありますと付き合ってますか。

BM: いや、ない。

＊授業場面

[BI-教師: 教科書の会話を読み上げている最中、教師が説明を加える]

教師: なんかありますか。わからないことが。

BI: ない。大丈夫です。

教師: じゃ、次は、あの、上の、ここの部分を、例えば、I さんが読んだら、F さんが答える。で、次は、A さんが上を読んで、I さんが答える。そういうふうにいきましょう。ううん、じゃ、I さんから。

[会話を大きな声で読みはじめる]

BI: 「工場の人は英語がわかりますか」。

BF: 「いいえ、わかりません。ですから、日本語で話さなければなりません。」

(中略)

教師: もう一回読んでください。

BI: 「毎日レポートを出さなければなりません。」

教師: わかりますか。

## 5.3. スタイル標識としての「普通体」・「丁寧体」

スタイルは丁寧さに自然に結びつく概念である。これまでは、モダリティの中に丁寧さを位置づけている研究が多い（益岡、1991, メイナード(1993)*2 など）が、仁田(1991)はモダリティと丁寧さ、それぞれを、現表事態を表す異なる文法カテゴリーでとして捉えるべきだという独自の観点を持っている。いずれにせよ、丁寧さに関してそれらの研究に共通している点は、「丁寧体」が聞き手が存在している場面でのみ使用されると主張しているところである。

日本語の社会言語学的な規則に従えば、話者が選択するスタイルは場面、話し相手との親疎関係、上下関係、年齢、その時の心理的な距離などに左右される。スタイル標識の１つとしては、文末文体を表す「普通体」・「丁寧体」の２項対立があげられる。スタイルや丁寧さを高める言語的な手段として「丁寧体」以外の要素、例えば、尊敬語、文末の言い止し（「が」、「けれども」など)、終助詞（ね）の付加などが数多く存在している。しかし、ブラジル人インフォーマントのデータにおいて、これらの要素がスタイルや丁寧さの標識として使用されているとは断定できない。敬意表現が体系化されていないポルトガル語を母語とするブラジル人にとっては、スタイル及び丁寧さの標識として最も目立つのが文末の「です」・「ます」体である。

---

*2　益岡は丁寧さのモダリティと名付けており、Maynard が談話的なモダリティとして「ダ・デス」のようなスタイルを考察する。

上述したような言語的な環境で日本語を習得した非母語話者としてのブラジル人がどのような基準の下で「普通体」・「丁寧体」を使い分けるのか、興味深い問題である。普段、会話を開始する時、普通体か丁寧体のどちらかが最初の基本的なスタイルになると思われるが、それは固定されたものではなく、会話の途中で切り替えが行われると予想される。こうした切り替えを規定する諸要因を次節で探ることとする。

今回の調査では「職場領域対ボランティア領域」という２つの領域の間で「普通体」と「丁寧体」の使用に関してどのような差があるかを調べ、各々の領域の中で見られるスタイル切り替えのパターンも明らかにした。それぞれにおける「普通体」のより高い使用頻度と、「丁寧体」のより高い使用頻度は次のような要因が考えられる。

① 聞き手への配慮

② 場面へのアコモデーション

③ 談話的なストラテジー

分析の結果として、ボランティア場面と比べ、「職場内」では普通体の使用が多く見られたが、それは個々の聞き手への配慮よりも「職場」という環境へのアコモデーションに起因していると思われる。一方、「職場外」では聞き手個人への配慮が第１の要因になるだろうと思われる。

また、職場内・外と関係なく、一定の会話における「普通体」・「丁寧体」の分布に関与するもう１つの要因は「普通体」および「丁寧体」が談話において果たしている語用論的な機能であろう。こうした「普通体」・「丁寧体」の併存(co-occurrence)は語用論的な観点からも説明できるのではないかと思う。

以下、これらの要因を検証していくにあたり、場面ごとに「普通体」・「丁寧体」の切り替えを考察していきたい。

## 5.4. 分析

分析にあたっては次のような手順で進めた。

① 質問・応答ペアー(隣接対)を抽出し、ブラジル人の「普通体」と「丁寧体」

の使用頻度を調べる。質問・応答ペアーを対象としたのは、質問したり、話し相手に応答したりする場合、相手への働きかけや押しつけが最も強く、待遇の意識が高まると思われるからである。もし話者が「普通体」と「丁寧体」の使い分けを標識とし、相手への配慮を示すのであれば、それは質問・応答に現れやすいのではないかと予想される。5.4.1. で解説をする。

② 「丁寧体」使用の談話的ストラテジーを考察する。質問・応答を含むブラジル人話者の全体の発話に見られる「丁寧体」の分布において、話し相手への配慮以外の要因も働いているであろう。それは、「普通体」が基本である発話で「丁寧体」の使用が談話的なストラテジーを果たしていることであるからである。5.4.2.で解説をする。

### 5.4.1. 質問・応答ペアーにおける「普通体」・「丁寧体」の切り替え

ブラジル人話者の会話資料を分析したところ、「質問・応答」ペアーにおけるブラジル人と日本人の「普通体」・「丁寧体」の使用には５つのパターンが見られた。

**① 型　日本語母語話者の普通体の質問にブラジル人話者が普通体の応答**

(1) JO: 今何の勉強してるφ↑/ BI: 本φ。/ JO: 漢字φ↑/ BI: 漢字も、少しφ。

**② 型　日本語母語話者の普通体の質問にブラジル人話者が丁寧体の応答**

(2) JY: そうか、そうか。夜勤の時は家で食べるφ↑

BI: そうです。で、夜中におなかすいたら、カップラーメン食べます。

**③ 型 日本語母語話者の丁寧体の質問にブラジル人が丁寧体の応答**

(3) JK: 日本語はブラジルでは全然勉強しなかったんですか。

BA: はい。日本来てから、日本来てから、勉強しました。

**④ 型 日本語母語話者の丁寧体の質問にブラジル人が普通体の応答**

(4) JO: じゃ、お休みって、週に一回だけですか。/ BI: 一回だけ φ よ

**⑤ 型 ブラジル人話者の自らの普通体と丁寧体で切り替わる質問**

話者が直接話し相手に質問する場合は「丁寧体」を用いる傾向が強くなる。次

の用例のように、特に話し相手の私的な生活について情報を尋ねる時、普通体から丁寧体に切り替えることがしばしば見られた。

(5) BA: 初心者のに、(そう) なんでひどいかなぁ。

JY: (...)烏丸の四条通りのところに (ん) ちょうど奥さんの、あの絵をね、運びにいって、

BA: Y さん、結婚してるんですか。(ん) あっ、ほんと。(笑) [また普通体に切り替え、冗談を言う]子供、4人 φ

JY: 子供↑ちがう、ちがう。 [普通体→丁寧体→普通体]

以上の①型が職場内の場面でよく見られ、②型は BI とボランティアの JY との対話、BA とボランティアの JK との対話では②が最も多く用いられた。

次の図 5-2、図 5-3、図 5-4 は、質問・応答に隣接対の中でブラジル人話者が発した質問及び応答における、それぞれの普通体・丁寧体の使用頻度を示す。

図 5-2 BI話者質問・応答ペア—普通体・丁寧体の使用頻度

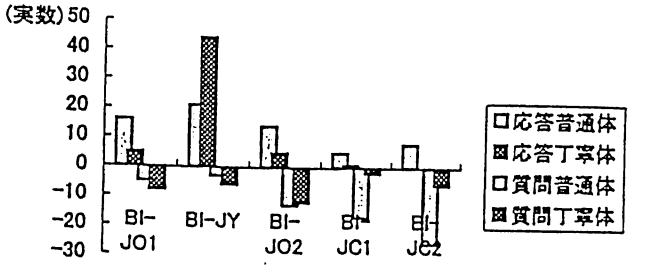



図 5-3 BA話者質問・応答ペア—普通体・丁寧体の使用頻度

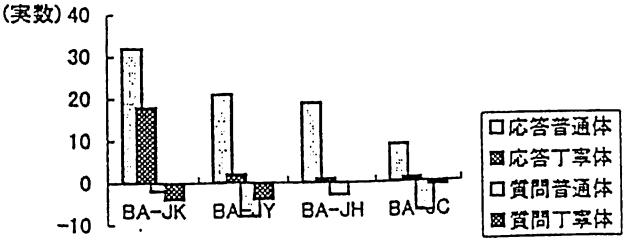



図 5-4 BM話者質問・応答ペア—普通体・丁寧体の使用頻度

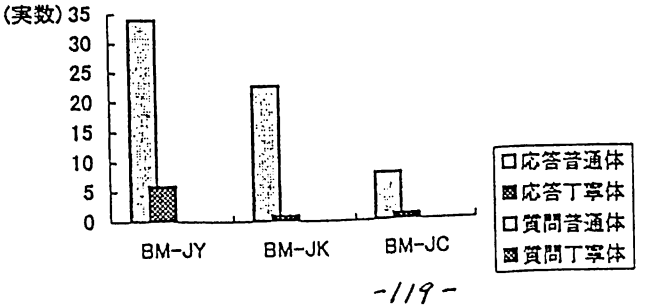


表 5-1 から表 5-6 では、ブラジル人が発した質問もしくは応答のみならず、隣接ペアの片方である日本人の発話を含め、それとの組み合わせとしてブラジル人の発話における「普通体」・「丁寧体」の使い分けをさらに細かく見ておきたい。

表の記号は次の通りである。

QT: 丁寧体を用いた質問; QF: 普通体を用いた質問; AT: 丁寧体を用いた応答; AF: 普通体を用いた応答

**表 5-1: BI が発した応答**

| | | ボランティア場面 | | | 職場場面 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 日 | ブ | BI-JO(1) | BI-JY | BI-JO(2) | BI-JC(1) | BI-JC(2) |
| QT | AT | 3 | 13 | 3 | – | |
| QT | AF | 2 | 1 | 2 | 1 | 1 |
| QF | AF | 6 | 14 | 9 | 4 | 6 |
| QF | AT | 2 | 23 | 2 | 1 | – |

**表 5-2: BI が発した質問**

| | | ボランティア場面 | | | 職場場面 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ブ | 日 | BI-JO(1) | BI-JY | BI-JO(2) | BI-JC(1) | BI-JC(2) |
| QT | AT | 6 | 2 | 5 | 1 | 3 |
| QT | AF | 3 | 6 | 5 | 2 | 1 |
| QF | AF | 5 | 4 | 18 | 18 | 16 |
| QF | AT | 1 | – | 2 | – | 7 |

**表 5-3: BA が発した応答**

| | | ボランティア場面 | | 職場場面 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 日 | ブ | BA-JK | BA-JY | BA-JH | BA-JC |
| QT | AT | 18 | | – | 1 |
| QT | AF | 20 | 10 | – | 1 |
| QF | AF | 6 | 12 | 20 | 10 |
| QF | AT | 4 | 1 | 2 | – |

表 5-4: BA が発した質問

| | ボランティア場面 | | 職場場面 | |
|---|---|---|---|---|
| ブ 日 | BA-JK | BA-JY | BA-JH | BA-JC |
| QT AT | 1 | 1 | – | – |
| QT AF | 1 | 3 | – | 1 |
| QF AF | – | 9 | 6 | 14 |
| QF AT | 1 | 1 | – | – |

表 5-5: BM が発した応答

| | | ボランティア場面 | | | 職場場面 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 日 | ブ | BM-JY(1) | BM-JY(2) | BM-JT | BM-JD(1) | BM-JD(2) |
| QT | AT | 3 | 4 | 2 | – | – |
| QT | AF | 14 | 11 | 31 | – | – |
| QF | AF | 16 | 18 | 5 | 8 | 8 |
| QF | AT | – | 1 | – | 1 | – |

表 5-6: BM が発した質問

| | ボランティア場面 | | | 職場場面 | |
|---|---|---|---|---|---|
| ブ 日 | BM-JY(1) | BM-JY(2) | BM-JT | BM-JD(1) | BM-JD(2 |
| QT AT | – | – | – | – | – |
| QT AF | – | – | – | – | – |
| QF AF | – | – | – | – | 7 |
| QF AT | – | – | – | – | – |

総合的には、いずれの場面でも「普通体」の使用頻度が「丁寧体」のそれより高かったものの、相対的には、ボランティア場面において「丁寧体」の出現が多く見られた。場面による切り替えがうかがわれるのである。さらに、図 2-4（横軸の下）および表 2-4-6 では、ブラジル人が発した質問の「普通体」・「丁寧体」の使用頻度を別々に示した。⑤型で見られるように、ブラジル人が隣接対の「質問」を発した場合、丁寧体を用いる傾向があった。特に、表 2-4 のボランティア場面では、全体の

発話数において「丁寧体」の質問が占めるパーセンテージが「丁寧体」の応答のパーセンテージと比べると、高いことがわかった。このように、隣接対に関しては、応答であるか、質問であるかによって、スタイルの差が見られるわけである。

なお、発話を数えるにあたって、杉戸(1987)の定義に従うことにした。杉戸によると、「１人の参加者のひとまとまりの音声言語連続（笑い声や短いあいづちも含む）で、他の参加者の音声言語連続（同情）とかポーズ（空白時間）によって区切られる」という。

### 5.4.2. スタイル切り替えに関与する諸要因の解説

#### 5.4.2.1.「職場内」の切り替え状況：場面へのアコモデーション

「職場内・外」を線引きとして「丁寧体」と「普通体」の使用の２つのパターンが見えてくる。例えば、BA は職場内において、同僚(JC)と会話する場面と上司に当たる班長(JH)と会話する場面があるが、その２つの場面の間に「丁寧体」・「普通体」の切り替えに関してほとんど差が出ないことがわかった。「普通体」の使用頻度がはるかに多いのである。その要因としてはブラジル人が働いている職場の言語環境にかかわっていると考えられる。

ブラジル人が働いている職場は製造工場の現場であり、切り替えの幅が事務職のそれほど広くはない。ブラジル人が普段接する日本人の同僚や上司がブラジル人に対して「普通体」を用い、しかも職場内での日本人同士の会話でも「普通体」だけが用いられている。要するに、職場内では「普通体」のインプットが多量なのである。

フォローアップインタビューを通じて得られた情報によると、ブラジル人が所属しているセクションには以下のような職階がある。その中でブラジル人が接する上司は係長と班長のみであり、それらの上司に対して「普通体」のみを使用している。

表 5-7: 「職場内」— ブラジル人が使用するスタイル

| 職階 | 接触の度合い | スタイル |
|---|---|---|
| 部長 | まったく接することがない | — |
| 課長 | ほとんど接することがない | 丁寧体 |
| 係長 | まあまあ接している | 普通体 |
| 班長＝主任 | 毎日接している | 普通体 |

（BI と BA とのインタビューより）

インフォーマントは直接かかわる班長や係長以外の上司（課長、部長など）とはほとんど接することがないため、スタイルを切り替える必要性を感じないことが確認できた。また、職場で「丁寧体」を用いてあらたまったスタイルを使うと、「変な目で見られる」（インフォーマントの発言のまま）とのことである。すなわち、目立つようになり、違和感を起こすのではないかと、インフォーマントは思っているようである。このように、ブラジル人は職場の言語環境に合わせる意識を持っているわけである。

なおまたフォローアップインタビューより、BI と BA は職場ではことば遣いに注意しておらず、一方、ボランティア場面ではなるべく「正しい日本語」を使おうとする、という回答が得られた。ブラジル人自身がここで呼んでいる「正しい日本語」とは「丁寧体」というものを１つの特徴として持っているようである。要するに、テレビで使用されている日本語、またはボランティアの日本語教室で話されている日本語が「正しい日本語」のモデルになっているのではないかと思われる。このように、ブラジル人インフォーマントにとっては、「正しく話す」というのは「フォーマルなスタイルで話す」とほぼ同義であるという結論になりそうではあるが、ブラジル人が呼ぶ「正しい」の厳密な意味合いが明確になっていない。この点についてはさらに追究する必要があろう。

各インフォーマントが「普通体」と「丁寧体」というスタイルの差を実際に認識しているか否かを確かめるために、談話録音の他、筆記テストも行った。このテストの結果については次節で述べたい。

### 5.4.2.2. スタイル切り替えの意識テスト

テストは第１部と第２部に分けられる。第１部では、職場場面とボランティア場面を設け、それぞれの場面の話し相手に対して、「気分が悪いため、休みたい」と、「ブラジルから送ってもらったお菓子を食べないか」を日本語でどのように言うかを尋ねた。場面の説明はすべてポルトガル語で書いてあるが、ローマ字またはひらがなでの日本語の自由回答を求めた。第２部では、母語でスタイルを切り替えているか否かを調べるために、ポルトガル語で回答するためのよりあらたまった場面と、よりくだけた場面を設けた。本来、ポルトガル語において、スタイルを切り替えるのであれば、第２言語を習得する際にもスタイル切り替えに対する意識が表面化するだろうと予想される。そこで、ポルトガル語でのスタイル切り替えを調べる意義があると考えた。

まず、第１部の結果を見てみよう。インフォーマントがスタイルを意識した場合、それは「普通体」と「丁寧体」との切り替えによって表された。

**表 5-8: 気分が悪いため、休みたい**

| | 職場内 | | ボランティア | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 上司 | 同僚 | 教師[*3] | よく話す知り合い | あまり話さない知り合い |
| BI | 丁/普 | 普 | 丁 | 丁 | 丁 |
| BA | 丁 | 普 | 丁 | 普 | 丁 |
| BM | 丁 | 丁 | 丁 | 丁 | 普 |

*3 本稿でしばしば使用している「教師」とはボランティア教室で日本語を教えている人を指す。ただし、学習しているブラジル人とボランティアの教師の間に必ずしも先生・生徒という関係が成り立っているとは限らない。

表 5-9: ブラジルから送ってもらったお菓子を食べないか

| | 職場内 | | ボランティア | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 上司 | 同僚 | 教師 | よく話す知り合い | あまり話さない知り合い |
| BI | 丁 | 普 | 丁 | 丁 | 丁 |
| BA | 丁 | 普 | 丁 | 普 | 丁 |
| BM | 丁 | 丁 | 普 | 丁 | 丁 |

日本語の回答を見ると、BI と BA、双方の話者が同僚に「普通体」、班長に「丁寧体」を用いた。一方、BM はほとんど全ての場面で「丁寧体」を使用したが、「あまり話さない知り合い」および「ボランティアの日本語教師」が話し相手である場面では普通体を用いた。テスト終了後、BM に尋ねたところ、その２つの場面での普通体の使用は意図的ではなかったという。BM の丁寧体の使用を左右させる要因は明確になっていない。そもそも BM はスタイル切り替えという社会言語能力が発達していないのではないかと思われる。

この第１部全体の結果からは、スタイル切り替えに関して、意識と実際の使用との間に差異があることがわかた。

ポルトガル語は、日本語と異なり、敬意を表す表現が体系化されていない言語である。敬意を表す表現は語彙レベルにとどまると言っても過言ではない。言い換えると、構文に影響がなく、スタイルの差はより改まった語彙、よりくだけた語彙の使用により判断できるのである。

テストのポルトガル語項目の回答には場面による大きなスタイルの差は見られなかったが、上のような特徴が現れた。この第２部でも職場の上司に「気分が悪いため、家に帰りたい」という場面があり、その場面では BI と BA がよりあらたまった表現を使用している。

表 5-10: 友達に「気分が悪いため、休みたい」という場面 — ポルトガル語版

| | 上司 | 日本語訳 | スタイル |
|---|---|---|---|
| BI | estou passando mal | 気分が悪い | 中立 |
| | 同僚 | | |
| | não estou muito legal | 調子がよくない | 俗語的な表現 |
| | 上司 | 日本語訳 | スタイル |
| BA | poderia*4 sair mais cedo? | 早く帰ってもいいですか | 改まった |
| | 同僚 | | |
| | acho que vou embora | 帰ろうかな | 中立 |

その他、「自分の家に遊びにきた親の友人に、気分が悪いから、休みたい」と、「自分の家に遊びにきた親しい友達に、気分が悪いから、休みたい」という場面も設定した。ここでは、BA のみがこの２つの場面の間にスタイルを切り替えた。BI と BM はいずれの場面でも同じ表現を用いた。そして、それらの表現のスタイルは中立なものであった。

表 5-11: 親の友達に「気分が悪いため、休みたい」という場面 — ポルトガル語版

| | 親の友人 | 日本語訳 | スタイル |
|---|---|---|---|
| BA | fiquem à vontade | どうぞ、ごゆっくり | 少々改まった |
| | 親しい友達 | | |
| | estou meio estranho*5 | ちょっと調子が おかしい | 俗語的な表現 |

*4 英語では、「can」に対して、「could」がよりスタイルが高いと言われている。それに相当して、ポルトガル語では、「posso」に対して、「poderia」が高いスタイルの標識として認められている。

*5 "estar estranho"とは BI が用いた"estar legal"と同様に、口語的な表現であり、よりくだけた場面用いられる。

なお、BM の回答に関しては、スタイルの差がまったく見られなかった。いずれの場面でも同様の表現を使用した。このことから、BM がポルトガル語でもスタイル切り替えを行っておらず、スタイル切り替えに対する意識は希薄であると判断できるであろう。従って、ポルトガル語での社会言語学的な背景が日本語におけるスタイル切り替えの習得に影響を及ぼしていると考えられる。

#### 5.4.2.3.「職場外（ボランティア）」の切り替え状況:話し相手への配慮

前節で述べたように、ボランティアと会話する諸場面には一つの共通点がある。それは、「丁寧体」の使用頻度が、職場場面のそれと比べ、高いということである。ボランティア場面では、話し相手によって「普通体」・「丁寧体」を待遇表現として使い分ける傾向が見られる。

ボランティア場面では、会話の参加者同士の関係が最初から決まっていない場合、話者が待遇表現にとまどい、会話が進むにつれて、関係を築いていくと思われる。今回対象となったボランティア場面の日本人及びブラジル人話者は顔見知りではあったが、これまで話をしたことがなかった。従って、最初はより改まったスタイルが用いられると予想される。実際には、いずれの場合でも、会話の開始部には「丁寧体」が用いられていた。こうした開始部で用いられるスタイルはしばらくの間その会話の基本的なスタイルのマーカーであると言っても良いであろう。ただし、参加者の心理的な距離や持ち出された話題などによって、話者がスタイルを切り替えることが頻繁に見られた。話者が心理的な距離を短く感じた場合、会話のある時点で普通体に切り替え、逆に、より大きな距離があった場合は、丁寧体を多く用いる、という現象がブラジル人話者が参加したボランティア場面で観察された。

まず、BI のケースを見てみよう。BI がボランティアの日本語教室に通いはじめ５ヶ月たった時点で、初対面のボランティア相手 JO、JY と会話する場面を１つずつ設定した。JO との会話より JY との会話で「丁寧体」の出現が著しく多く見られた。JY は会話の途中から関西弁を交えながら、よりインフォーマルなスタイルで話しかけたものの、BI はそれにアコモデーションしなかった。

(6) JY:あの、O[ボランティアの日本語教室]の、えーと、来てる女の子は知らへんの↑ 知らへん↑

BI: 知りません。

一方、職場場面では次の例があった。

(7) JC: [髪のジェル]ん。使う。めちゃくちゃ使う。

BI: かまへん ↑

JC: なにが

BI: あのー、かたくになって

また、質問に対する応答には「普通体」から「丁寧体」への言い直しが、会話中5回も観察された。

(8) JY: 生まれたのは名古屋。

BI: ああ。

JY: 名古屋、知ってる↑

BI: 知ってる。知ってます。

JOとの会話では、このような言い直しは1回しか見られなかった。

BA の場合は、JK との場面に比べ、JY と会話をした場面において、普通体の使用頻度が増加した。

各インフォーマントにフォローアップインタビューを行うと、より気楽に話せる話し相手に対して「普通体」を多く用いると言う。BI と BA、それぞれに最も話しやすい話し相手は JO と JY であった。

BI と BA、いずれの場合も、切り替えをする能力がボランティア場面からのインプットによって発達していると思われる。一方、BM は「普通体」と「丁寧体」のこうしたスタイルの差に対する意識が希薄である。それは、正式な学習をほとんどしていないからであろう。BM が用いる丁寧体の発話は生産的ではないため、スタイルの標識としては判断しがたい。要するに、日本人話者が用いた動詞を受け、そ

のまま使用しているわけである。

(9) JT: 日本だったら、[自動車が]買えますよね。

BM: うん。買えます。

(10) JY: テレビとかは＋

BM: なに＋

JY: テレビとかは見る、見ますか。

BM: ああ、見ます。

### 5.4.2.4. 談話ストラテジーとしての丁寧体

野田(1997)が談話の中の丁寧さの役割を調べた結果、新聞の投書やエッセイなどの文章の中の「普通体」と「丁寧体」の混用が、読者に対して、丁寧さ以外の多種の談話的な機能を果たしていると言う*6。これらの機能はごく普通の対話でも見られるはずである。要するに、「普通体」と「丁寧体」が混用されている場合、「丁寧体」への切り替えは丁寧さや聞き手への配慮だけではなく、強調すること、聞き手の注意を引くことなどの効果を狙う談話のストラテジーとしても捉えることができる。

また、三牧(1993)では、同一談話の中で待遇レベル・シフトが起こる場合、「心的距離の調節」と、「談話の展開標識」という機能が見られると指摘し、後者を綿密に分析している。

以上の研究は、母語話者の談話をのみ扱っているものであるが、非母語話者の談話にも類似するストラテジーが使用されてもおかしくない。実際に調べてみると、ブラジル人が参加した会話にも待遇意識以外の原因とするこうした談話的なストラ

*6 ここで述べる「普通体」と「丁寧体」の混用が 5.4.1.であげた⑤型の「質問するときの丁寧体への切り替え」とは異なる種のストラテジーとして捉えている。その根本的な違いが話し相手への待遇が中心的な要因かどうかということにある。本節で取り上げるストラテジーは待遇と直接結びつかないと解釈している。

テジーが現れた。ブラジル人は普通体の中に丁寧体を使用することによって特定の効果を目指していると思われる。以下、それらのストラテジーを考察したい。

**＊個人的な意見を述べ立てる**

（11）BI: 日系人が、日系人が恥ずかしいと思うよ、僕は。

JO: どうして↑

BI: 知らないよ。テレビ見て、僕、análise, análise[観察]して、[声が大きくなって]その考えます。　　[普通体→丁寧体]

[そう考えます]

**＊情報の中核になる部分（重要部分）を強調する**

（12）BA: [自動車免許について]ちょっとだけポルトガル語（はい）あの試験受けて（はい）、あと、ちょっと実際、乗れ道（はい）車に乗って、（はい）少し走って。問題なければ、はい、免許とれるんです。（あ、ほんとに）でも、すごく難しかった。　[普通体→丁寧体→普通体]

**＊新しい話題の導入**

（13）JY: [僕は料理]上手かどうかわからないけど。

BI: じゃ、じゃ、Oさんの話しますよ。 → 新しい話題の導入

JY: なに↑

BI: あの、僕たちは、あの、料理、Oで料理作ります。 →情報の中核を強調

**＊話し相手に負担をかける発話（依頼、謝罪など）**

（14）[借りたお金がまだ返せない理由を説明する]

JC: 金を返すの↑忘れました↑

BA: [笑]こないだ百円借りて...んで、恥ずかしくて、で、ちょっと今日は、ちょっと財布を忘れたんですけれど[笑]

以下のストラテジーは職場場面でのみ観察されたものである。

＊ふざけた発話: 冗談を言い合う時に用いられた。

(13) JC:兄貴ふたりとお父さんはパチンコ。で、俺ひとり競馬。俺ひとりね（あああ)。でも、今は兄貴ふたりも競馬。お父さんだけパチンコ。

[BI は話し相手のお兄さんが競馬に行くようになったのは話し相手のせいだと、ふざけて言う]

BI: おまえの責任ですか。　（「おまえ＋丁寧体」は同文のスタイルの混用）

JC: そうです。僕の責任です。だから、お嫁さんがこわいです。

BI: こわいなあ。

JC: こわいなあ。

BI: なんでそんなことする↑兄貴。　[普通体→丁寧体→普通体]

丁寧体への切り替えによる各場面で用いられたストラテジーの分布を表にまとめると、次のようになる。

表 5-12: ブラジル人が使用した談話ストラテジー

| 談話のストラテジー | 職場内 | | 職場外 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | BI-JC | BI-JC(2) | BI-JO(1) | BI-JY | BI-JO(2) |
| 意見の述べ立て | | | X | X | X |
| 重要部分を強調 | | X | | | X |
| 新しい話題の導入 | | | | X | X |
| ふざけた調子 | | X | | | |
| 依頼・謝罪の導入 | | | X | | |
| | BA-JH | BA-JC | BA-JK | BA-JY | |
| 意見の述べ立て | | | | | |
| 重要部分を強調 | | | | X | |
| 新しい話題の導入 | | | | | |
| ふざけた調子 | | X | | | |
| 依頼・謝罪の導入 | | X | | | |

## 5.5. まとめ

データからは、ブラジル人は丁寧さや敬意を表すために、尊敬語、言い止しな、丁寧語以外の言語的な手段を習得するまでの段階には至っていないと判明した。ブラジル人話者によるスタイル切り替えの意識は主に文末の「普通体」・「丁寧体」の使い分けに現れるのである。話者が自ら使い分けるようになるのは、日本語にさらされる２つの領域、すなわち「職場内」と「職場外のボランティア場面」におけるスタイルの差に対する意識が形成されてからだと思われる。その意識は、特にボランティアの日本語教室で学習しはじめることによって、強まるようである。これを念頭に置いて、日本語教室で学習しているBIとBAの運用と、学習していないBMの運用と対照的に分析する。

BI と BA のデータを見ると、「職場内」と「職場外」、それぞれでの切り替えを決定する要因が異なることがわかった。「職場内」では、ブラジル人は、話し相手個人ではなく、環境にアコモデーションする傾向が窺われる。それは、「普通体」のみにさらされているからであろう。一方、ボランティア場面では、ブラジル人自身が「正しい言い方」と呼ぶ、よりフォーマルなスタイルが用いられている。要するに、ブラジル人はフォーマルなスタイルを「正しい日本語」と見なし、ボランティア場面ではこうした「正しい日本語」を使うべきだという意識を持っているのである。職場場面と異なり、ボランティア場面では話し相手との個人・心理的な距離による「丁寧体」と「普通体」の切り替えが見られる。

また、いずれの場面でも、待遇としてだけではなく、「強調」、「新しい話題の導入」などの談話的なストラテジーとして普通体と丁寧体を切り替え、談話になんらかの効果をもたらす能力が発達していることがわかった。

BI、BA と比べ、ほとんど学習していない BM は「普通体」と「丁寧体」をスタイルの差を二項対立だとは認識していないようである。さらに、スタイルを意識化させたテストでは、BI、BA とは逆に、BM がポルトガル語でもスタイルを切り替えないという結果が得られた。このように、社会言語的な能力の発達に関与する要因として、主に学習と母語での社会言語的な能力があげられる。

スタイル切り替えを調べることによって、これまで充分に取り上げられていなか

った、自然習得と正式な学習との相違点を、社会言語学的なアプローチを用い、少しは解明することができたと思う。また、外国人と地域社会のボランティア団体とのかかわり合い、正式な学習の役割など、近年の社会言語学及び日本語教育が直面している課題に接近することができたと考える。

# 第6章
# 結 論

## 6.1. 本稿のまとめ

本稿はブラジル人就労者の日本語習得および日本語使用の実態における諸特徴を総合的に考察してきた。ブラジル人の属性、言語的な背景、日常のネットワークをアンケート調査を通じて調べた上で、自然談話の具体的な日本語使用を分析した。自然談話においては、まず動詞とモダリティ表現の使用について記述的に述べた。また、スタイル切り替えの習得を調べることによって、社会言語能力の一側面を明らかにした。

前章までで、特に次のようなことが明らかになった。

(1) 第3章で考察したアンケート調査の結果からは、ブラジル人の多くが日系人であるにもかかわらず、日本語が使いこなせる人は少ないことがわかった。インフォーマントの内省による回答を見ると、受動的な話者(passive speaker)が最も多いと思われる。要するに、聴解能力はある程度あるが、会話能力が低いということである。

また、日本語能力や日本語習得に関与する変数としては、日本の滞在期間が重要ではないことがわかった。たとえ長く滞在しても、日本語を使用する機会が少なければ、滞在期間の影響がほとんど見られないのである。そこで、ブラジル人が形成するネットワークが重要な役割を果たしていると考えられる。

ブラジル人が持つネットワークは「職場内」と「職場外」という2つの領域に分れられる。多くの場合、職場外は日本人と接することがほとんどなく、付き合いの範囲が同国人に限られている。このような場合は、日本人との付き合い、つまり日本語のインプットが職場に限定されている。しかしながら、ボランティアの日本語教室の増加に伴い、職場外でも日本人と接し、実際に学習するようになったブラジル人も多くなりつつある。

本稿のアンケート調査から、日本語習得および使用に関する要因としてあげられるのは、主にインフォーマントの社会ネットワークであると思われる。

(2) 第４章の前半では、BI、BA、BM という３名のインフォーマントにおける動詞の使用状況を調べた。ボランティアの日本語教室で学習している BI と BA のデータを、ほとんど学習歴がない BM のデータと対照的に分析した。BI と BA と比べ、BM は動詞の脱落が多く、名詞並列文の出現頻度が高く見られた。

BI と BA の談話を縦断的に調べると、録音調査の第１回目には過去の出来事、現象を非過去形で表すことがしばしば見られたが、調査の最後の段階に過去形が多くなった。このように、動詞に関しては、形式の習得が意味や機能の習得に先立つと思われる。

場面ごとに分析すると、職場場面では過去の出来事を話題にすることが少ないため、主に非過去形が多く現れると考えられる。

(3) 第４章の後半では、モダリティ表現の使用を考察した。モダリティ表現の中で、終助詞の「よ」と「ね」が調査の最初の段階から最も多く用いられた。特に「ね」の使用が注目を集める。ブラジル人は「ね」を複数の文脈で用い、ポルトガル語から転移された用法も見られる。また、語彙や表現力が足りない場合は、「ね」を補充形式として用いる傾向も観察される。

モダリティ表現に関しては、縦断的に調べたにもかかわらず、はっきりとした傾向が見られなかった。場面ごとに調べると、ボランティア場面の方が出現頻度が高いことがわかった。

(4) 第５章では、スタイル切り替え能力を考察したところ、BI、BA の運用と、BM の運用とは異なることが判明した。BI と BA が学習することによって、日本語の標準語的なスタイルにさらされ、そのスタイルと、職場で用いられる方言的なインフォーマルなスタイルとの差を意識を持つようになる。さらに、職場場面とボランティア場面によって、自らスタイルを切り替える能力が発達する。こうしたスタイル切り替えは特に「普通体」と「丁寧体」の使い分けに見られる。一方、BM は職場場面とボランティア場面におけるスタイルの差を認識していないようである。こうした BI、BA と BM との間に見られる差異は主に学習の有無によるものだと思われる。

## 6.2. 調査の反省

３名のインフォーマントにおける日本語習得を縦断的に調べることによって、日本語習得への学習期間という変数の影響を明らかにすることを目的とした。しかし、学習の影響は、むしろ学習歴のある２名のインフォーマントと、学習歴のない１名のインフォーマントとの対照によって、横断的に検証されたところが多かった。このことから、縦断調査にはより厳密な追究が必要であると思われる。例えば、自然談話資料のほか、対象の言語項目を誘導するテストなどの調査法を試みるべきであろう。

## 6.3. 今後の課題

以上、ブラジル人就労者における「職場内」と「職場外」、それぞれの日本語のインプットについて考察した。特に職場では、日本語母語話者による方言形式の使用が多く見られた。にもかかわらず、ブラジル人が自ら用いた方言形式の用例は少なかった。学習の有無に関係なく、方言の使用は動詞の否定辞「へん」や「だ」に相当する関西方言の「や」に限られている。その理由は明らかになっていないが、今後、方言のインプットと習得、または方言に対する意識についてより深く調査を行う必要がある。また、今回は、実際の言語使用の実態を重視したが、ブラジル人の日本語を習得する動機づけ、日本語に対する意識など、言語使用に潜在している意識を調べることが望まれる。

本稿の調査は事例研究の形式で行った。各インフォーマントに個人差があるとは言え、共通する点も多く見出せたことに充分価値があると思われる。しかし、今後インフォーマントを増やし、調査地を他の地方に広げることは望ましいが、単独研究には限界があることを認めざるを得ない。そこで、大規模の共同研究を通じてであれば、本研究でカーバーしなかった問題点や課題を総括的に明確にすることができると思われる。

最後に、ブラジル人の定住化に伴い、日本語の使用にとどまらず、ポルトガル語の使用の実態、特に家庭内の日本語とポルトガル語の併用などの研究の必要性が迫

ってくる。また、ブラジル人を含む外国人就労者と地域社会とのかかわり合い、この新しい社会的な状況をめぐる日本語教育の対応などの課題も興味深いものである。本研究が日本語使用の実態という、ブラジル人の言語行動の一側面を調べたことによって、これらの課題に関する研究の糸口になれば、幸いである。

# 参 考 文 献

【日本語の文献】

伊豆原英子(1993)「『ね』と『よ』再考 ー『ね』と『よ』のコミュニケーション機能の考察から」『日本語教育』80.

大曽美恵子(1986)「語用分析1『今日はいい天気ですね』ー『はい、そうです。』」『日本語学』5-9.

生越直樹(1991)「韓国人日本語学習者のテンス・アスペクトに関する誤用について」『現代日本語のテンス・アスペクト・ウォイスについての総合的研究 』鈴木重幸、工藤真由美その他、1988-1990年度科学研究費報告書

尾崎明人(1996)「追跡調査にみられる終助詞「ね」の使用状況と変化」『日本語研修コース修了生追跡調査報告書2』、名古屋大学留学生センター.

神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館.

梶田孝道(1994)『外国人労働者と日本』日本放送出版協会.

喜多川豊宇(1997)「ブラジル・タウンの形成とディアスポラ ー 日系ブラジル人の定住化に関する7年継続大泉町調査」『東洋大学社会学部紀要』第34-3号、平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(2).

窪田富男(1982)「学習者の見た動詞の活用 ー とまどいの過程」『日本語教育』6-47、日本語教育学会

国立国語研究所(1994)『ポルトガル語の話しことばの諸相 ー 日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究』中間報告(1).

国立国語研究所(1996) 『ポルトガル語の話しことばの諸相 ー 日本語とポルトガル語との社会言語学的対照研究』くろしお出版.

ザトラウスキー・ポリー(1993) 『日本語の談話の構造分析 ー 勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.

真田信治(1996)『地域語のダイナミズム』おうふう.

渋谷勝己(1988)「中間言語研究の現状」『日本語教育』64、日本語教育学会.

_____(1997a)「日本語学習者のスタイル切り替え ー 従属節の丁寧表現をめぐって」『無差』第4号、京都外国語大学日本語学科.

_____(1997b)「旧南洋群島に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」『阪大日本語研究』９号、大阪大学文学部日本語学講座.

白川博之(1992)「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77、日本語教育学会.

杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相 ― 座談資料の分析』三省堂.

長友和彦(1993)「日本語の中間言語研究 ― 概観」『日本語教育』81、日本語教育学会.

ナカミズ・エレン(1995)「在日ブラジル人と日本人との接触場面 ― 会話におけるコミュニケーション問題」『世界の日本語教育』第５号、国際交流基金、日本語国際交流センター.

_____(1995)「日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワークと日本語使用」『阪大日本語研究 』７号、大阪大学文学部日本語学講座.

_____(1997)「日本語におけるスタイル切り替えの習得段階 ― ブラジル人就労者の例」『阪大日本語研究』９号、大阪大学文学部日本語学講座.

西原鈴子(1994)「誤解をめぐる研究領域」『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互『誤解』のメカニズム ― 日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究』、国立国語研究所.

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.

ネウストプニー(1996)「日本語教育のネットワーク ― ランゲージ・マネージメントの観点から」『ひろがる日本語教育ネットワーク ― 最新事例集』、日本語教育学会

野田尚史(1997)「『ていねいさ』から見た文章・談話の構造」国語学会平成九年度春季大会研究発表原稿集.

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版.

南不二男(1987)『敬語』岩波書店.

三牧陽子(1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第１部門 第42巻 第１号.

渡辺雅子(1992)「ブラジルからの出稼ぎ労働者の『日本』との出会い」『社会調査実習報告書』, vol.8, 3月、明治学院大学社会学部社会学科.

_____(1995)『共同研究出稼ぎ日系ブラジル人（上）論文編[労働と生活]』、明石書店.

【欧米語の文献】


Barnes, J.A.(1954). "Class and Committees in a Norwegian Island Parish", In: *Human Relations - Studies towards the Integration of the Social Sciences*, London: Tavistock Publications.

Barden, B. & Gro β kopf, B.(1994). "Ossi meets Wessi": social and linguistic integration of newcomers from Saxony", In: *Intercultural Comnunication - Proceedings of the 17th International L.A.U.D. Symposium Duisburg*, 23-27 March, 1992, Peter Lang.

Dabène, L. & Moore, D.(1995). "Bilingual speech of migrant people", In: Milroy, L. & Muysken, P.(eds.) *One Speaker, two languages: cross-disciplinary perspectives on code-switching*, Cambridge U.P.

Dickerson, L.J.H.(1975). Internal and External Patterning of Phonological Variability in the Speech of Japanese Learners of English: Toward a Theory of Second-Language Acquisition, Michigan: UMI.

Dittmar, N.(1993). "Proto-Semantics and Emergent Grammars", In Dittmar, N. & Astrid Reich (eds.), *Modality in Language Acquisition,* Berlin: Walter de Gruyter.

Ellis, R.(1987)."Interlanguage Variability in Narrative Discourse: Style Shifting in the Use of the Past Tense", In *SSLA*, 9,1-20, Cambridge U.P..

_____(1994) *The Study of Second Language Acquisition*, Oxford: Oxford U.P..

Fishman, J.A. (1986). "Domains and the Relationship between Micro - and Macrosociolinguistics", In: Gumperz, J. & D. Hymes (ed.) *Directions in Sociolinguistics*, New York: Basil Blackwell.

Givón, T. (1985). "Function, Structure and Language Acqusition", In Slobin, D.I., The Crosslinguistic Study of Language Acquisition Vol.2: Theoretical Issues, New Jersey: Lawrence Erbaum Associates.

Gudykunst, W.B. & Y.Y. Kim (1984). *Communicating with Strangers - An Approach to Intercultural Communication*, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company.

Handa, T. (1973). "Destino da língua japonesa no Brasil", In: Saito, H. & Maeyama,T.(eds.) *Assimilação e Integração dos Japoneses no Brasil*, Vozes/EUSP.

Kim, Y.Y.(1986). "Understanding the social structure of intergroup communication: a personal network approach". In: Gudykunst, W.B. (ed.) *Intergroup Communication*, London: Edward Arnold.

Klein, W. & Dittmar, N. (1979). Developing Grammars — *The Acquisition of German Syntax by Foreign Workers,* Berlin: Springer-Verlag.

_____(1993). "The acquisition of temporality", In Perdue, C.(ed.) Adult language acquisiton: cross-linguistic perspectives vol.II The results, Cambridge U.P.

Larsen-Freeman & Long, M. (1991). *An Introduction to Second Language Acquisition Research,* New York: Longman.

Marcuschi, L.A.(1986). *Análise da Conversação*, São Paulo: Ática.

Margolis, M.L. (1994). *Little Brazil - An Ethnography of Brazilian Immigrants in New York City*, Princeton Univ. Press.

Maynard,.S.K.(1993). *Discourse Modality - Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*, Philadelphia: John Benjamins Publishing Co..

Milroy, L. (1987). *Language and Social Networks*, Oxford: Basil Blackwell.

Mitchell, J.C. (1969). "The Concept and Use of Social Networks", *Social Networks in Urban Situations*, Manchester U.P.

Ochs, E.(1979). "Planned and Unplanned Discourse", In Givón, T.(ed.) *Syntax and Semantics*, vol.12, New York: Academic Press.

Schumann, J.H. (1987). "The Expression of Temporality in Basilang Speech", In SSLA, Cambrdige U.P., pp.21-42

Silva, G.M.de Oliveira & Macedo, A.T.(1992). "Discourse markers in the spoken Portuguese of Rio de Janeiro, *Language Variation and Change*, 4, Cambridge U.P..

Stoffel, H.& Véronique, D.(1993). "Acquisition de modalités en français et procès de modalization chez des adultes arabophones marocains", In Dittmar, N. & Astrid Reich (eds.), *Modality in Language Acquisition*, Berlin: Walter de Gruyter.

Suzuki, T. (1987). "As Expressões de Tratamento da Língua Japonesa no Brasil: uso e processo de aculturação", In: *Estudos Japoneses VI, Revista do Centro de Estudos Japoneses da USP*, São Paulo.

Tarone, E.(1983). "On the Variability of Interlanguage Systems", In *Applied Linguistics*,4-2., Cambridge U.P..

_____(1985). "Variability in interlanguage use: a study of style shifting in morphology", In *Language Learning*, 35, Michigan: Blackwell, p.373-403.

# 謝 辞

本稿の執筆にあたって、ご指導を賜った真田信治先生、渋谷勝己先生をはじめとして、大阪大学文学部日本語学講座の先生方に厚くお礼を申し上げます。

執筆の中間段階で、河野彰氏、宮治弘明氏、庵功雄氏、日高水穂氏にそれぞれ貴重なコメントや批判をいただきました。また、本稿の全体的構成にあたっては、由井紀久子氏に貴重なアドバイスをいただきました。さらに、同氏には日本語を丁寧に直していただきました。なお、談話資料の文字化やデータ入力の作業には船木礼子氏、小田美恵子氏、鈴木恵子氏、李吉鎔氏にご協力をいただきました。社会言語学講座の大学院生諸氏、変異理論研究会の皆様には発表の場において、活発な意見をいただき、本稿の質を高める糧となりました。以上の方々に深く感謝致します。

調査にあたっては、大橋香織氏、上田あゆみ氏、Gilberto Nakamura 氏、Sérgio Oura 氏、滋賀県草津市国際交流協会の奥村陽一氏、恩地美和氏、竹屋久美子氏、辻恵子氏、宏川行弘氏がご協力くださいましたこと、そしてブラジル人と日本人のインフォーマントの方々が、お忙しい中、長い調査に親切に応じてくださいましたことを心より感謝申し上げます。

最後に、大阪大学への留学を応援してくださった泉山陽一先生、ブラジリア大学の Alice T. Joko 先生、Ulf G. Baranov 先生、サンパウロ大学の Junko Ota 先生、そして父親に深く感謝の意を表します。